

ISSN : 1346-0676

The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XLIV



ディケンズ・フェロウシップ日本支部
年報 第44号

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

年 報

第 44 号



The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XLIV

2021

*The Japan Branch Bulletin
of the Dickens Fellowship*

No. 44

ISSN: 1346-0676

Edited by Yuji Miyamaru

Editorial Board

Ryota Kanayama

Fumie Tamai

Yuji Miyamaru

Aya Yatsugi

Takashi Nakamura

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship

Tokyo University of Science and Technology

2641 Yamazaki, Noda-shi, Chiba 278-8510, Japan

[http : // www.dickens.jp/](http://www.dickens.jp/)

©2021 The Japan Branch of the Dickens Fellowship

目 次

巻頭言

やっぱり役者さんてすごい！……………	松本 靖彦	1
--------------------	-------	---

書 評

ディケンズ（原作）／アーマンド・イアヌッチ（監督）		
映画『どんだ底作家の人生に幸あれ！』……………	新井 潤美	3
A. N. Wilson, <i>The Mystery of Charles Dickens</i> ……………	渡部 智也	8
Mitsuharu Matsuoka, ed., <i>Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays</i> ……………	原 英一	13
Ushashi Dasgupta, <i>Charles Dickens and the Properties of Fiction: The Lodger World</i> ……………	筒井 瑞貴	20
Leon Litvack and Natalie Vanfasse, eds, <i>Reading Dickens Differently</i> ……………	石井 昌子	27
Jennifer Gribble, <i>Dickens and the Bible: 'What Providence Meant'</i> ……………	吉田 一穂	33
Troy J. Bassett, <i>The Rise and Fall of the Victorian Three-Volume Novel</i> ……………	甲斐 清高	40
山本史郎（著）『翻訳の授業——東京大学最終講義』……………	向井 秀忠	45

Fellowship's Miscellany

中から見たブレグジット——2019～20年在外研究報告……………	三宅 敦子	51
オックスフォード大学留学記……………	中越 亜理紗	58

2020 年度秋季総会報告…………… 65

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約……………		77
『年報』への投稿について……………		79

追悼 松村昌家教授

追悼 松村昌家先生（1929.11.21-2019.9.9）……………	西條 隆雄	82
追悼 松村昌家先生……………	植木 研介	84
あふれる知識と情熱——松村昌家先生のディケンズ研究……………	新野 緑	93
松村昌家先生と読書会の思い出		
——「豊かな想像力と忍耐力」を心に刻んで……………	永岡 規伊子	94
松村先生との出会いと思ひ出……………	大前 義幸	96

ディケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績（2020～2021）……………		98
--------------------------------------	--	----

お問い合わせ先……………		101
--------------	--	-----

役員一覧……………		101
-----------	--	-----

編集後記……………		102
-----------	--	-----

CONTENTS

Editorial

After All, Actors Are Brilliant!	Yasuhiko Matsumoto 1
--	----------------------

Reviews

<i>The Personal History of David Copperfield</i> , based on the novel of Charls Dickens, and directed by Armando Iannucchi	Megumi Arai 3
A. N. Wilson, <i>The Mystery of Charles Dickens</i>	Tomoya Watanabe 8
Mitsuharu Matsuoka, ed., <i>Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays</i>	Eiichi Hara 13
Ushashi Dasgupta, <i>Charles Dickens and the Properties of Fiction: The Lodger World</i>	Mizuki Tsutsui 20
Leon Litvack, ed., <i>Reading Dickens Differently</i>	Masako Ishii 27
Jennifer Gribble, <i>Dickens and the Bible: 'What Providence Meant'</i>	Kazuho Yoshida 33
Troy J. Bassett, <i>The Rise and Fall of the Victorian Three-Volume Novel</i>	Kiyotaka Kai 40
Shiro Yamamoto, <i>Lecture on Translation: The Valedictory Lecture at the University of Tokyo</i>	Hidetada Mukai 45

Fellowship's Miscellany

Brexit from the Inside: 2019–20 Sabbatical Report	Atsuko Miyake 51
Studying at Oxford: The Days of Sweetness and Light	Arisa Nakagoe 58

Annual General Meeting of the Japan Branch 2020

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship	77
---	----

In Memoriam 'Masaie Matsumura'

..... Takao Saijo, Kensuke Ueki, Midori Niino, Kiiko Nagaoka, Akiyuki Omae	82
Publications by Members of the Japan Branch, 2020–2021	98

ディケンズ・フェロウシップ日本支部（2020-2021）

2020 年度秋季大会

日時：2020 年 10 月 3 日（土）

会場：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行のため
感染拡大防止の観点からオンラインにて実施

プログラム

理事会（10：30-11：00）

開会の辞（11：00-11：05）

総会（11：05-11：30） 支部長 新野緑

研究発表 1（11：30-12：15）

司会：渡部智也（福岡大学）

発表：杉田貴瑞（早稲田大学）

『リトル・ドリット』におけるアーサーの内向性について

研究発表 2（13：15-14：05）

司会：田中孝信（大阪市立大学）

発表：吉田朱美（近畿大学）

『*A Tale of Two Cities*, アンデルセン「人魚姫」,

ポー『William Wilson』におけるドッペルゲンガーのテーマ』

研究発表 3（14：00-14：45）

司会：田中孝信（大阪市立大学）

発表：溝口薫（神戸女学院大学）

『『ドクター・マリーゴールドの処方箋』—— ディケンズにおける感情と倫理』

シンポジウム（15：00-17：30）

「今に生きるディケンズ」

司会・講師：佐々木徹（京都大学）

講師：阿部公彦（東京大学）

板倉巖一郎（関西大学）

猪熊恵子（東京医科歯科大学）

閉会の辞（17：30） 副支部長 松本靖彦

19 世紀イギリス文学合同研究会準備大会 — 延期 —

ディケンズ・フェロウシップ日本支部が参加する予定になっていた「19 世紀イギリス文学合同研究会」は、その最初の集いである準備大会を 2021 年 6 月 5 日（土）に神戸市外国語大学にて開催の予定でありましたが、禍にて延期となり、2021 年 9 月 18 日（土）にオンラインでの遠隔映像通信による実施となりました。

巻 頭 言

Editorial

やっぱり役者さんてすごい！

After All, Actors Are Brilliant!

日本支部長 松本 靖彦

Yasuhiko MATSUMOTO, President and Honorary Secretary of the Japan Branch

新型のウイルス感染症が世を席卷する前は、年末になると毎年のようにプロの役者さんたちが演ずる『クリスマス・キャロル』の朗読劇を観に行っていました。ある年、公演後の打ち上げで出演者の皆さんからいろいろなお話を聞いた時に、役者さんて本当にすごいなあ……と思わされたことがあるので、それについて書きます。

実を言うと、僕はずっとスクルージの甥のフレッドが嫌いでした。あまりにも快活で屈託がなさすぎて、ちっとも現実味のある人物に思えないばかりか、その過剰な「いい奴」ぶりが鼻について仕方ありませんでした。伯父が人好きのしない人物であることはよく分かっているくせに、それにもう何度も断られているのにも関わらず、なんで毎年わざわざ伯父の職場にやって来ては、自宅でのクリスマス・ディナーに來いとしつこく誘うのか（決して裕福なお家でもないのに）全く解せませんでした。

せっかくの楽しいクリスマスの団らんに、何もこんな嫌なじいさんと呼ぶことないじゃないか。こいつちょっとアホなの？それとも偽善者？……と、どうにも僕はフレッドの態度を素直に受け取ることができませんでした。でも『クリスマス・キャロル』についての批評ですとか、さまざまな解釈をたくさん読んでしまいましたので、〈まあ『キャロル』って寓話とかおとぎ話みたいなところのある作品だからなあ、フレッドってそういう1つのタイプってゆうか、ちょっと平板なところもある「キャラクター」なんだろうねえ……〉というような理屈で納得した気になっていました。それでもやっぱり『キャロル』を本で読んでいても、お芝居で観ていても、フレッドが出てくると何かモヤモヤしていました。あ、こいつ嫌だ、って。

それで冒頭のお話に戻るのですが、ある年末の『クリスマス・キャロル』朗読劇を観にいった時のこと。二枚目俳優さんがあんまり爽やかにフレッドを演じるので、それを観てまたモヤっとした僕は〈まったく好青年にもほどがあるぜ。一体どんな気持ちで演じているのだろう〉と思い、そのモヤモヤを打ち上げの席でその役者さんにぶつけてみました——「フレッドってあんまりいい奴すぎて嫌になりませんか？あんな嫌なじいさんのことをとことん構おうとするのが、どうにも信じられないんですよ」と。

すると間髪入れずにその役者さんは「そりゃあだって、スクルージがフレッドに自分のお母さんを思い出させてくれるからでしょ？フレッドにとってスクルージって、亡くなったお母さんを知る唯一の手がかりじゃないですか。お母さんに会いたって気持ちで近づいていってるんじゃないですか。僕、フレッドはスクルージのことほんとに好きだと思いますよ。」とさりりと言っただけでした。

はあ～なるほどねえ。『キャロル』は何度か読みましたが、そんな風に考えたことはありませんでした。そう言われてみると、それがごく当たり前のように思えます。『キャロル』の人物造形なんて、そんなに深みのあるものじゃないだろうと決めつけていた僕には衝撃でした。フレッドはただ「いい奴」なのではなくて、彼にはスクルージのことがどうにも慕わしく思われ（とっつきにくい変人だとは思っているでしょうが）会いたくなる——そして、クリスマスという大切な時だからこそ一緒に過ごしたくなる——理由があったのでした。だから、スクルージが世間でどのように思われていても、自分が彼から邪険に扱われようとも、「伯父さん、伯父さん」とまとわりついていったのですね。そんな風に、登場人物の中にぐっと入りこむ役者さんの読解力というのはすごいもんだなあと感じ入った次第です。

ディケンズの人物造形は回りくどく書かれてはいないので、僕にとってのフレッドの場合のように〈はいはい、知ってるよ。そういうキャラクターなんでしょ〉と分かった気でいてしまい、当たり前なのだけれども重要な点を見逃してしまう可能性は割と高いのではないのでしょうか。そういうのに気づかせてくれるのって、物凄く切れのある思考力というよりも、一見分かりやすく自明な事柄の意味を丁寧に拾い直す、煽やかなりテラシーなのだと思います。鋭い思考力も欲しいところですが、そんなリタラシーもうんと磨ければいいなと思います。そしたら、小説や物語の世界がぐんとリアルになり、それに触れる自分の人生も数倍豊かになりそうですから。

今後もみなさまとともに、ディケンズの世界、また私どもが共に生きるこの世界につきまして、発見、また再発見の旅を続けていくことができましたら幸いです。

書 評 REVIEWS



チャールズ・ディケンズ（原作）、
アーマンド・イアヌッチ（監督）、
映画『どん底作家の人生に幸あれ！』
(*The Personal History of David Copperfield*,
a film based on the novel by Charles DICKENS,
directed by Armando IANNUCCI)
(119分, 英米希, 2019年)

(評) 新井 潤美
Megumi ARAI

英文学者で小説家でもあるデイヴィッド・ロッジの1986年の小説『小さな世界——アカデミック・ロマンス』(*Small World: An Academic Romance*)は、いわばグローバルなキャンパス・ノヴェルであり、登場人物の英文学者たちは世界の各地で開かれる英文学の学会を渡り歩く。その中の一つのエピソードでアイルランド出身の若い英文学者パーシ・マクギャリグルが東京に行き、「パブ」という看板のある店に入ると、そこはカラオケのあるバーだった。パーシはそこで日本人のサラリーマンのグループと出会う。パーシが大学で英文学を教えていると聞くと、彼らは話を合わせようとし、一人が最近、シェイクスピアの芝居『肉と胸の不思議な事件』(*The Strange Affair of the Flesh and the Bosom*)を見たと言う。パーシは明らかに相手がなんらかの勘違いをしていると思い、失礼にならないように「その作品は知りません」と答える。しかし日本人グループの一人が日本で英語を教えている英文学者で翻訳者でもあるので、彼に「今のは『ヴェニスの人』のことです」と説明され、驚くが、他にも『浮世の欲情と夢』(*Lust and Dream of the Transitory World*)が『ロミオとジュリエット』で、『自由の刀』(*Swords of Freedom*)が『ジュリアス・シーザー』のことだと聞いて、面白いがる。

「これはゲームにいいかもしれませんね」とパーシは言った。「いろいろタイトルが作れますよね。例えば『消えたハンカチの謎』は『オセロ』だし、『早期退職の悲劇』は『リア王』とかね。」(『小さな世界——アカデミッ

ク・ロマンス』第四部第三章)

最初に挙げられた『肉と胸の不思議な事件』は実は1883年に井上勤によって訳された『西洋珍説・人肉質入裁判』のこのようだし、『浮世の欲情と夢』は河島敬蔵の1886年の訳『春情浮世の夢』、『自由の刀』は坪内逍遙が1884年に訳した『自由太刀余波鋭鋒』だろう。このようになら「自由」な、あるいは「珍訳」ともいえるかもしれない外国の作品のタイトルの翻訳が日本で今でも見られるのは映画の世界においてだろう。日本語訳を見ただけではオリジナルがとても想像できない。それでも『慕情』(*Love Is a Many-Splendored Thing*)とか『哀愁』(*Waterloo Bridge*)とか『旅情』(*Summertime*)とかはまだ、それなりの味があるが、『愛と哀しみのボレロ』(*Bolero*)とか『愛と哀しみの果て』(*Out of Africa*)、『いつか晴れた日に』(*Sense and Sensibility*)などについては、日本の映画配給会社が邦題を決める会議(があるのだとすれば)をぜひ傍聴したくなる(『ロード・オブ・ザ・リング』や『リバー・ランズ・スルー・イット』のように、冠詞や複数形を取り除いたカタカナ化も困りものだが)。

前置きが長くなったが、『どん底作家の人生に幸あれ!』も、どうしてこうなったのか、ぜひ配給会社に聞いて見たいタイトルである。たまたま今年の前年の大学院の授業で『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*)を読んでいたが、この映画を見た学生の一人が「原作よりもデイヴィッドが作家であることが強調されている」と言っていて、なるほどと思った。原作では、デイヴィッドが作家として成功を収めるに至った過程があまりはっきりと書かれていないことは多くの研究者が指摘してきたとおりである。しかし映画はまず劇場でデイヴィッドが自ら、『デイヴィッド・コパフィールド』の有名な冒頭‘*Whether I shall turn out to be the hero of my own life, or whether that station will be held by anybody else, these pages must show*’を聴衆の前で朗読している場面から始まる。最初からデイヴィッドは作家として映画の観客の前に現れ、映画はデイヴィッドの回顧録というかたちで進んでいく。これはもちろん、原作が一人称で書かれ、ディケンズ自身がこの作品が「自伝的」であると読者に思わせようとしていたことを考えると、この演出はきわめて妥当なものに思えるだろう。文学作品の映像化でよく見られるのが、原作だけではなく、原作者についての情報やエピソードをさりげなく盛り込むことによって、それに気づいた観客の知的プライドを満足させる効果のある演出である。例えば『恋におちたシェイクスピア』(1998年)では、シェイクスピアが自分の名前を何度も、違った綴りで書いている場面があるが、それは実際にシェイクスピアの名前が生前でも様々に綴られて書類に署名されたり、印刷されたりしていたことへの言及である。あるいは、ジェイン・

オースティンの『マンスフィールド・パーク』の1999年の映画版では主人公のファニー・プライスが原作とはまったく違う、強気で行動的な女性として描かれているだけでなく、自分でも小説を書く人物である。その小説が、オースティンが少女時代に書いた習作の一部であったり、あるいはファニーが実家に書く手紙が、オースティン自身が書いた手紙だったりする。かなりのオースティン・ファンか、オースティン研究家でないとは分からないような演出がされているのである。監督のパトリシア・ロジーマはこの映画を作るにあたって、オースティンの伝記についてだけでなく、1990年代のポストコロニアリズム的批評などについてもかなりの「予習」をしていて、例えばファニーのおじのサー・トマスが西インド諸島に持っているプランテーションで奴隷を拷問したり性的暴行を加えたりするという、原作にはない要素を加えて、オースティン・ファンや研究者の不興を買った。原作をよく読むと、サー・トマスが奴隷貿易に関してやましいところはないことがはっきりとしている。ロジーマがあえてオースティンの習作や手紙に関する知識をその作品に盛り込んで、その「予習」の成果を示しているだけに、このような強引な解釈は強い批判を浴びたのである。

一方、『デイヴィッド・コパフィールド』では、主人公のデイヴィッドにチャールズ・ディケンズの姿が重なるのはその「自伝的」要素を考えてもまったく自然である。『どん底作家の人生に幸あれ!』の監督のアーマンド・イアヌッチは昔からのディケンズ・ファンであり、ディケンズの生誕二百年を記念して2012年に *Armando's Tale of Charles Dickens* というドキュメンタリー番組で、主に『デイヴィッド・コパフィールド』をとりあげ、この作品がディケンズという作家について ‘*tantalizing insight*’ を与えるものだと言っている。彼がこの作品の映画化を手がけることになった時にまずデイヴィッドを演じる役者のことを考えたが、彼の考えるデイヴィッドにもっとも合っていたのが、『スラムドッグ\$ミリオネア』（2008年）や『Lion / ライオン——25年目のただいま』（2016年、この邦訳も、なぜわざわざ英語表記とカタカナ表記が併記してあるのかは謎だ）で話題を集めたデーヴ・パテルである。「デーヴしか考えられなかった」とイアヌッチはインタビューで話している。彼がそれまで出演した映画で見せた繊細さや喜劇性、ロマンティックでカリスマティックな要素が、イアヌッチが抱いていたデイヴィッド像にぴったりだったという。

インド系イギリス人のデーヴ・パテルがデイヴィッドを演じるとなると、どうしてもエスニシティの問題が生じてくる。イアヌッチは最初はデイヴィッドの父親がインド人だったという設定にすることも考えたが、いわゆる「カラーブラインド・キャスティング（‘*nontraditional casting*’ ともいう）を思いついた。役者のエスニシティ、肌の色、体型、性別やジェンダーをいわば無視して配役をする

ことは最近のイギリスの演劇、特にシェイクスピアなどの古典にはよく見られる（オペラなど、そもそも観客にある程度のリテラシーが要求される芸術形態ではもっと前から行われていた）。逆に配役をすべて白人にすることの方が珍しくなっていて、例えば2015年にトレヴァー・ナンが『ヘンリー六世』第一部と第二部、そして『リチャード三世』を演出したときに白人の俳優のみを使った時には俳優組合などから抗議が起こったほどである。媒体として、より写実的なゆえにこれまでその種の演出は難しかったテレビドラマや映画においても「カラーブラインド・キャスティング」は多くなってきていて、例えばNetflixの人気ドラマ『ブリジャートン家』などが一例である。

「カラーブラインド・キャスティング」には当然賛否両論ある。歴史的検証の問題を別にしても、最近では「人種を無視するのはかえって危険だ」という見方も少なくない。また、作品や配役の仕方によっては、かなり観客にリテラシー、あるいはある種の「洗練」を要求する。以前、ある大学の英文学の講義で、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの『オセロ』のDVDを見せたことがある。そこでも当然、「カラーブラインド・キャスティング」が行われていて、ヴェニス総督が女性であるのはまだしも、イアーゴを演じていたのがアフリカ系の俳優だった。兵士などにもアフリカ系の俳優がキャスティングされていたが、オセロ以外の他の主要人物は白人の俳優が演じていた。学生は原作を何語でもよいから読んでくることになっていたし、大部分は真面目で聡明な学生たちだった。そして講義では、これが「カラーブラインド・キャスティング」であることは、英語風にいうと、それこそ顔が青くなるくらいに何度も繰り返した。だが、100人以上の講義である。期末試験をしたら案の定、「イアーゴ自身も黒人なのに、オセロに敵意を抱くのは酷い」的なことを書いてきた学生が2、3人いた。彼らが「英文学の授業で『オセロ』のイアーゴが黒人だと教わった」などと言いつらしていないことを願うばかりである。

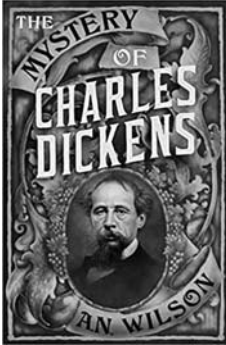
しかしブラインドキャスティングの是非はともかく、『どん底作家の人生に幸あれ!』ではあまりにも様々な人種が入り交じっているので、これを額面通りに受けとめる観客はまずいないだろう。アグネスはアフリカ系の女優ロザリンド・エリエイザーが演じているが、父親のウィックフィールド氏を演じるのは東洋系の俳優ベネディクト・ウォンだし、ステイアフォースの母親を演じたのはナイジェリア生まれのニッキー・アムーカ＝バードである。また、デイヴィッドの入る学校の校長はミセス・ストロングとなっている。これは単に原作のミスター・ストロングを女性にただけで、原作のストロング夫妻のドラマの要素は完全にカットされている。

この映画の場合は、前にも書いたように、イアスッチがパテールにデイヴィッ

ドを演じさせたかった結果としての「カラブラインド・キャストイング」なわけだが、やはりこのようなキャストイングの難しさを感じずにはいられない。つまり、「なぜこの配役なのだろう？」と常に配役を意識せざるをえなくなることが、映画鑑賞の際にきわめて気が散る要素となってしまうのである。例えば「カラブラインド」ならば、幼少時のデイヴィッドをインド系の子役にする必要もなくなるのではないかとか、デイヴィッドとアグネスの子供が白人でもよいのではないかなど、余計なことを考えてしまう。また、ドーラが金髪の白人であり（モーフィッド・クラーク）、いわゆる‘Dumb Blonde’のステレオタイプどおりである一方、アグネスは原作のイメージよりもはるかに活動的で気が強いのも、演じる女性がアフリカ系であるという意味で、ステレオタイプに沿っているとも思われる。ユライア・ヒープはベン・ウィンショーがみごとに演じていて、赤毛でこそないものの、まさに原作どおりの気色の悪さを醸しだしている。さらに、デイヴィッドとアグネスがユライアのことを陰で笑っている場面なども映画には見られるのだが、もしユライアを演じるのがエスニック・マイノリティの俳優で、デイヴィッドとアグネスが白人だったらこういう演出も難しいだろうとつい思ったりしてしまう。

キャストには他にも「ドクター・フー」で有名なピーター・キャバルディのミスター・ミコーバー、ヒュー・ローリーのミスター・ディック（個人的にはローリー自身の印象が強すぎて、ミスター・ディックも単にローリーがこれまで演じてきたようなシニカルな紳士のように見えてしまった）、ティルダ・スウィントンのミス・トロットウッドなど、多彩なキャストで固めている。しかしその個人的なキャストゆえか、それぞれの人物が際立ちすぎていて、どこかまとまりのない印象も与えてしまうことも事実だ。

一方で、物語の展開のテンポもよく、衣装や町の風景もカラフルであり、基本的にはコスチューム・ドラマでありながら、ときおりシュールな演出（例えば天井からいきなり大きな手が降りてくる）も見られて、観客を飽きさせない。『デイヴィッド・コパフィールド』を予習してきた観客を喜ばせて、知的プライドにアピールするような「内輪ネタ」のようなもの（例えばデイヴィッドの名前への言及やドーラの消え方）も用意されている。そしてなによりも、『デイヴィッド・コパフィールド』が喜びと光に満ちた、‘life-affirming’な作品で、自分の一番のお気に入りの小説だとドキュメンタリーで語っていたイアヌッチの思惑どおりの活気に満ちた、楽しめる作品であり、原作の「精神」を再現する彼の試みは評価されるだろう。



A. N. WILSON,
The Mystery of Charles Dickens
(x+358 頁, Atlantic Books, 2020 年
本体価格 £17.99)
ISBN : 9781786497918

(評) 渡部 智也
Tomoya WATANABE

この書評の執筆依頼を受ける、ちょうど1週間前の早朝のことである。突然の叫び声で目を覚ました私の耳に、けたたましい非常ベルの音が飛び込んできた。ただ事ではないと思った私はすぐに着替え、家の外に出た。同じく外に出てきた斜め向かいの住人に尋ねたところ、「マンション1階から火が出ている」とのこと。考える暇もなく、私はほかの住人とともに反対側にある階段を使って建物の外へと避難した。幸い、程なく駆けつけた消防隊によって、30分ほどで火は消し止められたが、後に報道で知ったところでは、実に20台近い消防車が出動する火事だったらしい。問題は火事の後である。火事の原因を突き止めるために警察が現場検証をおこなったが、現場検証に立ち会ったという管理人の話では、「おそらくこうだろう」という推測の域を出ない結論となったらしい。放火等の人為的なものでないと分かった点は一安心だったが、結局出火の原因は謎のままに終わった。世の中、分からないこと、謎に満ちていると強く感じずにはおられなかった。そのような時に頂いたのが、この「謎」という言葉が表題に含まれる本書、*The Mystery of Charles Dickens* の書評執筆の依頼である。なぜこんな偶然が起こるのか、これもまた、人生の謎の1つなのかもしれない。

さて、本書はその表題通り、ディケンズという作家にまつわる数々の謎を議論の起点として、ディケンズに対する理解を深めようと試みたものである。著者のA. N. ウィルソンは、ミルトンやヴィクトリア女王などの伝記で知られる作家であり、必然的に本書は作品研究というよりは作家研究という色彩が強い。以下、その概要について章ごとにざっと述べていく。

まず第1章は「15ポンド13シリング9ペンスの謎」(*The Mystery of Fifteen Pounds, Thirteen Shillings and Ninepence*)という奇抜なタイトルがつけられている。このお金はディケンズが死ぬ前日に小切手で引き出した22ポンドと、翌日彼が死んだ際に持っていた6ポンド6シリング3ペンスとの差額であり、このお金が

どこに消えたのかというちょっとした謎である。著者はこの点から議論を開始し、このお金が愛人ネリー・ターナン（一般的にはエレン・ターナンと呼称されるが、本書では一貫してネリー・ターナンと記載されているので、以下それに倣う）に支払われたものだと推察する。つまり、ディケンズは一般的に言われているように、死の前日に家で一日中執筆にいそんでいたのではなく、ネリーに会いに行き、彼女の家で倒れたのだと言う。これ自体は目新しい説ではないが、著者はさらに、その際両者の間には性的な行為があり、ディケンズはそのショックで倒れたのではないかとさえ述べる。その上でディケンズとネリー、さらに演劇との関係が考察され、ともにリスpekタブルであることを求める両者の共通項として、父親の影が存在するという点が挙げられる。ディケンズはともかく、ネリーの父親について言及されることはあまりないので新鮮に思えた（彼女の父はネリーが6歳の時に精神病院で死んだという）。

続く「子供時代の謎」(The Mystery of His Childhood)と題された第2章では、両親との関係と、それが彼に与えた影響が考察される。議論の中心となるのは、彼が子供時代にウォレン靴墨工場で働かされたという有名なエピソードであるが、著者はこの出来事を、「小説家としての徒弟生活の始まり」と呼び、この経験によって彼が過去を小説の中に盛り込む（フィクションにする）ことで現実からの逃避を果たしてきたということ、そして両親との関係が作家としての彼を作り上げたのであり、彼らは彼に愛されているという確証を与えてくれなかったものの、代わりに彼には人を楽しませる才能があるということを感じさせてくれたと分析する。

第3章は「残酷な結婚の謎」(The Mystery of the Cruel Marriage)と題され、ディケンズと妻キャサリンの関係が中心に考察される。まず「なぜ愛と優しさの権化のような小説家であるディケンズが、妻に対してあれほど厳しいのか？」という疑問を取り上げ、これに対するもっとも単純な答えは、彼の母親に対するネグレクトと同じだろう（つまり、妻への厳しさと母への反感は根底で繋がっている）と推察する。その上で、ディケンズのキャサリンとの結婚、さらには2人の不和と最終的な別居に至る経緯が、主にディケンズの手紙やフォースターの伝記を引用しながら説明される。

第4章は「ディケンズの慈善活動の謎」(The Mystery of the Charity of Charles Dickens)と題され、ディケンズと慈善活動の関係が中心に考察される。まず、ディケンズがウィルキー・コリンズに宛てた手紙の中で言及される「硝酸銀」(nitrate of silver)という言葉を元に、ディケンズが性病にかかっていた可能性を指摘する。そしてこのように彼自身が娼婦のお世話になった経験があり、彼自身も「墜ちた」人間であったからこそ、「墜ちた女性達」の救済を目指して作られ

たユレーニア・コテージに収容された女性達を救いたい、という強い思いに繋がっていたと述懐する。その上で、彼の作品に見られる慈善行為や、彼自身の慈善活動の分析を通して、キリスト教的な慈善というものが、人としてのみならず芸術家としてのディケンズにとって中心に位置するものであったということを理解せねばならないと主張している。

「公開朗読の謎」(The Mystery of the Public Reading)と題された第5章では、ディケンズが死ぬ数日前にギヤッツヒルの邸宅の庭で、既に公開朗読活動をやめていたにもかかわらず、「サイクスとナンシー」の朗読練習をおこなっていたというエピソードを取り上げる。そしてウラジミール・ナボコフが述べた、「ディケンズ作品の最大の魅力はディケンズの声 (voice) である」という言葉を引きつつ、ディケンズにとっていかに演じることが重要な意味を帯びる行為であったかということ、そしていかに「声」が重要であったかを考察していく。さらに公開朗読に関する様々なエピソードに言及した上で、ディケンズの公開朗読は彼の力がどう働くかを見せてくれると述べ、ディケンズが単なる芸術家ではなく、催眠術師 (mesmerist) だったと結論づける。

第6章は「エドウィン・ドルードの謎」(The Mystery of Edwin Drood)と題されている。これは言わずと知れた、ディケンズ最後の、そして未完の小説のタイトルであるが、本書の中で唯一、作品名を章題としていることから、ディケンズを理解する上でこの作品が非常に重要だと著者が捉えていることが窺える。この中で著者はアヘンとディケンズを含めたヴィクトリア朝の人々との関係に始まり、催眠術がディケンズに与えた影響、さらに本作の着想を得た背景を考察していく。著者はジャスパーの姿にディケンズが投影されていると言い、本作を生み出すきっかけは、自らの死が近づいてきたということ、そして自分が死ぬことで、ネリーを支配することができなくなり、若い愛人は別の若い誰かのものになってしまうという思いがあったと推察する。そして本作のジャスパーに見られる自己の分裂はディケンズ自身のそれでもあり、一方の自己がもう一方の自己を認識しないようにするというバランス芸 (juggling act) はこれで終わりを迎えたと締めくくる。著者はディケンズ最大の謎は彼自身が持つ二面性 (作品で慈愛を説きつつ、妻に残酷な仕打ちをする等) にあると考えているようで、その問題に彼自身が真正面から取り組んだのが本作であり、だからこそ特に重要だと捉えているのである。

第7章は「チャールズ・ディケンズの謎」(The Mystery of Charles Dickens)と、最終章に相応しく本書と同じタイトルが付けられている。この章ではディケンズの死にまつわる話、生前の本人の希望と異なり、ウエストミンスター寺院に葬られることになった経緯などが語られ、最後はネリーとその一家のその後の逸話で

締めくくられる。だがなんと言っても本書で最大の読みどころは、ここで明かされる著者自身の過去のトラウマ的な出来事とディケンズとの関係であろう。著者は少年期に、子供をむち打ちながら自慰行為にふける小児性愛嗜好の校長の下で教育を受けたという酷い経験を赤裸々に語る。そしてその時、あるいはその後に触れたディケンズ作品が、辛い子供時代だけでなく、あの頃を思い出すときにも助けになったと述懐する。その上で著者は、ディケンズは、自分たちよりも前に自分たちのために「そこ」にいたと思わせてくれる作家であり、その経験が我々自身の経験を理解し、自分たちの人生に対して救いとなる鏡を見せてくれるような作家なのだと評価している。

本書の根底にあるのは、ディケンズは自分の秘密を他ならぬ自分の作品の中に隠したユニークな作家という著者ウィルソンのディケンズ観である。そして隠された物を明らかにするために、著者は伝記的な事実と様々な作品の描写を横断的に扱い、そこに意外な関連性を見出しながら議論を進めていく。これが良い方向に進むこともあるが、外連味のありすぎる話になることもある。以下、いくつかの例を挙げてみたい。まず第2章でディケンズのトラウマ的な過去が作品に表出している例について、著者は『ニコラス・ニクルビー』の一場面を取り上げる。ニクルビー夫人が、ニコラスが自分たちに迷惑をかけないように朝食も食べずに出て行ったと涙を流したのに対し、ラルフは、‘When I first went to business, ma’am, I took a penny loaf and a ha’porth of milk for my breakfast as I walked to the city every morning; what do you say to that? Breakfast! Pshaw!’と冷たく言い放つ。ところがウィルソンは、この台詞がディケンズが後に執筆した自伝的断片の中で、自分の朝食に言及した箇所、‘My own exclusive breakfast, of a penny cottage loaf, and a pennyworth of milk, I provided for myself.’に酷似しており、自分自身の無垢な子供時代の経験を、悪党の非情な魂に変換していると指摘する。なるほど、書かれた時期が違うため気がつきにくいだが、この類似は非常に面白い。

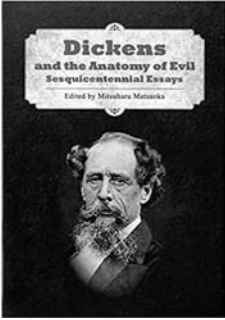
次に第6章でメスメリズムと『エドウィン・ドルード』のつながりを論じる上で、かつてディケンズが催眠術治療を施そうとした相手エミール・デ・ラ・ルーのエピソードを取り上げる。この中で、マダム・デ・ラ・ルーが、誰かに石を投げつけられるという幻覚に苦しんでいると訴えた点を取り上げて、これがデピュティに石をぶつけられるガードルズを彷彿とさせるという。「石をぶつけられる」というモチーフは聖書を含め他にも見られるため、この主張はいささか突飛かもしれないが、このようなつながりは考えたこともなくハッとさせられた。

第6章にはもう1つ面白い指摘が見られる。既に述べたように、著者は『エドウィン・ドルード』の根底には、自らの死によってネリーを失う事に対するディケンズの恐れがあり、そのためこれまで表だって書くことのできなかった性の問

題がこれまでの作品以上ににじみ出ているという。そしてまず、寄宿学校の校長トウィンクルトンが、「胸」(bosoms)という言葉を使う直前に思いとどまって「心」(hearts)と言い換えた部分を取り上げて、これがディケンズがこれまで度々見せてきた、性について書くことをためらう姿勢の例であり、これに対してヘレナ・ランドレスがジャスパーにおびえるローザを勇気づけようと抱きしめる場面では、「The lustrous gipsy-face drooped over the clinging arms and bosoms」と、「胸」という言葉が使われていると指摘する。ジャスパー(=ディケンズ)の欲望の対象であるローザ(=ネリー?)が性的に描かれているという訳だ。この対比はなかなか興味深いのだが、著者はさらに、ローザを守るヘレナと、彼女に恋をする兄ネヴィルの姓ランドレス(Landless)は風変わりな名前であり、ネリーの本名、すなわちエレン・ローレス・ターナン(Ellen Lawless Ternan)に着想を得たに違いないとまで述べる。ディケンズであれば誰しも、これらの姓の奇妙さを感じたことはあるだろうが、しかしそこまで言えるのかどうか。とりあえず評者としては、「違いないとまでは言えない」と述べるにとどめた。

このように面白い視点を提供してくれる本書であるが、疑問に感じる点も多々ある。1つには、ここまで見てきたことから分かるように、意外な関連性を見出す、といえは聞こえは良いが、無理があるように感じられるところも少なくない。特に、著者は『骨董屋』のクイルプを、quill penから生じた名前であり、すなわち作者ディケンズを指すと捉え、このクイルプのネルに対する欲情を、後のディケンズのネリーに対する欲情と対比させているのだが、これはさすがに偶然の一致以外の何物でもないだろう。

確かにクイルプをディケンズの醜い欲望の投影と捉えた主張は、目新しいものではないがもっともである。quill penへの言及も興味深い。しかし、そうであれば、議論する上でもう一人欠かせない人物がいるのではないだろうか。すなわち義妹メアリー・ホガースである。ディケンズのメアリーに対する密かな愛情は広く知られている点であり、彼女がネルのモデルとなったという指摘も多くなされてきた。クイルプを欲望に満ちたディケンズと捉えるのであれば、当然メアリーとの関係については考えねばならない事だろう。ところが奇妙なことに、本書においてメアリーはほとんど登場しない。300ページを超える大部な本書において、メアリーへの言及はわずか3度に留まる。ディケンズと女性の問題は本書の重要なテーマの1つであり、マライア・ビードネルでさえそれなりにページを割いて論じられているにもかかわらず、である。そのため、ネルとネリーを関連付ける主張が単独で浮いてしまい、単なる名前の偶然の一致という印象が拭えない。なぜメアリー・ホガースとディケンズの関係への議論が一切なされなかったのか?これが、本書の持つもう1つの疑問点であり、本書を読み終えた評者の頭の中に浮かんだ「謎」である。



Mitsuharu MATSUOKA, ed.,
*Dickens and the Anatomy of Evil:
Sesquicentennial Essays*

(xiv+366 頁, Athena Press, 2020 年,
本体価格 3,636 円)
ISBN : 9784863403376

(評) 原 英一
Eiichi HARA

2020 年はディケンズ没後 150 年記念の年にあたる。1970 年の没後 100 年には、英米で多くの記念出版が相次いだ。日本でも、当時刊行されていた月刊誌、『英語研究』（研究社）のディケンズ没後 100 年記念の臨時増刊号が出版された。全 104 ページの最初から最後まで、ディケンズ関係の記事で埋められている。宮崎孝一先生（当時、成城大学教授）、小池滋先生（当時、東京都立大学助教授）、川本静子先生（当時、津田塾大学助教授）による特別座談会、「ディケンズはわれらの同時代人か」が、先学 3 人の若々しい写真とともに、掲載されている。わがディケンズ・フェロウシップ日本支部は、東京支部として、1970 年の 12 月に発会式を行った。ということは、2020 年は、日本支部発足 50 周年記念の年にもあたっていたのだ。

この没後 150 年記念論文集は、松岡光治氏の単独編集によるものである。松岡氏の Preface によると、予想外の COVID-19 パンデミックの下、さまざまな困難が生じ、没後 150 年記念というサブタイトルを外さなければならないかもしれないという状況に追い込まれかけたが、何とか 2020 年内の刊行にこぎつけたという。1 年程度の遅延であれば、「没後 150 年記念」とうたっても、人類史上未曾有の異常事態の渦中なのだから、いっこうにかまわなかっただろう。いずれにしても、この論文集は、各執筆者の協力はもちろんだが、編者の松岡光治氏の驚異的な情熱とエネルギーがなければ、実現しなかったはずである。

松岡氏は、エリザベス・ギヤスケルの没後 150 年記念論文集 *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*（大阪教育図書、2015）をやはり単独で編集、刊行している。16 カ国からの寄稿者 32 名による 500 ページ超、全文が英文という、まさに記念碑的出版だった。今回のディケンズ没後 150 年記念論文集は、Acknowledgements にあるように、ギヤスケル論集

の姉妹編である。ここでは、20名の寄稿者が、ディケンズの主要作品を論じている。長さは360ページ超。二人の小説家のスケールの違いを考えれば、不釣り合いな感じがする。これは過去半世紀の間にギヤスケルの評価が飛躍的に高まったことを示すと同時に（50年前、評者が学生だった頃は、ギヤスケルは、英文学史の本などでは、ギヤスケル夫人、Mrs. Gaskellと呼ばれていた）、大量の研究が生産されてきたディケンズについて、新しい論を提出することがますます困難になっていることの表れなのである。

今回の記念論文集は、中堅・若手のディケンズ研究者が中心となっている。松岡氏編集のギヤスケル論文集と同じく、全文が英語によるという、非常に意欲的、挑戦的なものであり、まずその点を高く評価したい。内容は、粒ぞろいというわけにはいかず、玉石混淆となった。しかし、論文集というものは、例外なくそうなのだから、それが本書全体の価値を低下させることにはならない。

松岡氏の Preface に続いて、Paul Schlicke 氏が、“Dickens and Evil”と題して、簡潔にして要を得た Introduction を寄稿している。

以下、出版年代順に20篇の作品が取り上げられる。

Kotaro Murakami, “Boz’s Curiosity and Compassion for the Miseries of the Poor”

村上幸太郎氏は、当初ボズは、貧民の窮状についての好奇心の方が同情心よりも強かったが、1836年以降のスケッチには好奇心以上の感情が見られるなど、彼の都市スケッチには二面性があることを指摘する。作品解題として見れば、妥当な内容である。

Mark Weeks, “Exploding ‘Dark Shadows’: Coded Territories and Laughing Nomadic Bodies in *The Pickwick Papers*”

この論文は、PPに見られる codification とその影響を、「情動」 affect 理論によって明らかにしようとしている。Deleuze の nomadism も援用されており、本書の論文の中では、唯一、最近の文学批評動向を反映したもの。30年以上にわたった文学理論優勢の時代は終わったのだろうか。

Mio Hatada, “*Oliver Twist*: The Complicity between Good and Evil”

畑田美緒氏は、OTでは明瞭に分けられているかに見える「善」と「悪」の区分が実は疑問であることを指摘する。Works Citedには見えないが、今年の2月に没した Hillis Miller の OT 論（1958）を踏まえれば、新しい知見を提出できただろう。この名著は、もう60年以上前のものだが、いまだに色あせていない。評者も、駆け出しの研究者だった頃、畑田氏と類似の観点から OT を論じたことがあったが、それはミラーに多大な影響を受けてのことだった。

Mizuki Tsutsui, “*Nicholas Nickleby*: Dickens’s Anti-Melodramatic Strategy”

筒井瑞貴氏は大学院生だが、並みいる先輩研究者たちの顔色をなからしめるようなすばらしい論文をものした。Peter Brooks のメロドラマ論によれば、メロドラマの第一の特徴は“the manichaeistic struggle of good and evil”なのだが、筒井氏は、*NV*のテキストは、このメロドラマ的ヴィジョンを踏襲するかに見えながら、深いところで、その二項対立に疑問を投げかけているという。典型的なメロドラマ、Douglas Jerrold の *Black-Eyed Susan* などを参照しながら、ニコラスのビルドゥングスロマン的「成長」の曖昧性を論じ、典型的な悪役 Ralph Nickleby の造形に見える複雑さを論じ、*NV*の舞台化（Stirlingによる）がディケンズのアンチ・メロドラマ志向を示すことを論じていく。最後の Mrs. Nickleby を扱った部分が最も秀逸。“the moral value is not bipolar but unipolar”であることを体現する彼女によって、メロドラマ的枠組みは縦横無尽に踏みしだかれていく。評者はかねて Mrs. Nickleby が *NV* 中で最も強烈な個性を持つ、実に興味深い、魅力的なキャラクターだと感じていたが、筒井氏は、彼女の驚異的なエネルギーの源泉を見事に解き明かしてくれた。

Yyota Kanayama, “*The Old Curiosity Shop: The Beginning of the End of the Folkloric Times*”

ディケンズの小説には、さまざまなフォークロアが組み込まれている。金山亮太氏は、Dick Whittington 伝説の反映を *OCS* の Kit Nubbles に見る。Whittington 伝説が古代インドに起源を持つ資本主義の寓話であること、1600年頃の商業資本主義隆盛の時代にイギリスに移入されたと推定されることなど、歴史的考察を行い、*OCS*のテキストを深く読み込めば、説得力ある議論が展開できたかもしれない。

Yasuki Kihara, “Innocent Evil in *Barnaby Rudge: A Nightmare Abounding with Monsters*”

木原泰紀氏は、*BR*には紋切り型のハッピーエンディングはない、善よりは悪が明瞭に焦点化されているという。Hugh と Barnaby は子供っぽい無垢を持ちながら、悪の方に傾斜する。Hugh はゲオルク・ジンメルという「異邦人」stranger であり、それはベンヤミンのフラヌールにも通じる。

Nanako Konoshima, “*American Notes: Social Evil and Carceral Landscape*”

*AN*における獄舎的 carceral あるいは閉所恐怖症的言語が、ディケンズの後の小説に発展していくことを論じた内容は、十分に説得力がある。木島菜葉子氏はセンスがよいだけでなく、それに寄りかからず、テキストに沿った着実な論の進め方ができる研究者である。この *AN* 論もそれを証明する大変優れたもので、感心させられた。ただし、タイトル（social evil は「売春」を指すのが普通）と英語の一部（口語の thusly がしばしば使用される）に疑問を感じる

点があった。

Tomoya Watanabe, “‘Ravin’ Mad with Conscious Willany”: Would-be Patricide in *Martin Chuzzlewit*”

Jonas Chuzzlewit は、ディケンズが描き出した悪人の中では、最も複雑で奥深い人物の一人であり、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』に強い影響を与えている。渡部智也氏の論文は、この悪人の背後に隠されたものを明らかにしようと試みる。父親殺しを犯そうとしたジョナスは、「恐れ」fear につきまともわれている。彼は何を恐れているのか。渡部氏はここで、作者ディケンズ自身が抱いていた「恐れ」との関連を持ち出す。それはウォーレン靴墨工場での経験から発するものである。幼いディケンズが少年労働者におとしめられたのは、金銭にだらしない父親 John のためであり、父親に対する憎しみがジョナスの「父親殺し」（未遂）に投影されているという。

Hiroshi Enomoto, “*Christmas Books: The Arithmetic of Economy and the Antidote for Evil*”

A Christmas Carol での Scrooge の evil には完全に経済的な起源がある、と榎本洋氏は指摘する。徒弟としてのスクルージは、経済的利益を追求するピューリタンの衝動に動かされている。*The Chimes* の背景にあるのは、マルサスの人口論である。*The Battle of Life*, *The Haunted Man* で、ディケンズは焦点を社会問題から個人の葛藤へと移行させる。*Christmas Books* の作品解題として十分な内容といえるだろう。

Manami Tamura, “*Pictures from Italy: Darkness in the Sunny Land*”

Pictures from Italy は、旅行記の刊行が盛んになる中で、前例のない特色を持つことが意図されていた。田村真奈美氏の記述は、このイタリア旅行記のどこが独特のものであるのかを、当時の旅行ガイド出版事情、絵画などを背景として浮かび上がらせるものである。全体として、とてもまとまりがよく、あまり読まれないこの作品の紹介として卓越したものとなっている。それだけに、誤植が目立ったのが残念（とくに 184 頁）。校正のための十分な時間が取れなかったのだろう。

Aya Yatsugi, “Mythological Imagination in *Dombey and Son*: Florence Dombey’s Initiation and Revealed Evil Nature”

矢次氏は、*DS* でのシンデレラの要素を中心として、付随する神話や儀式的断片を論じようとする。金山氏の *OCS* 論と同様に、フォークロアに基盤を置いた議論である。「シンデレラ」物語の最古形が 9 世紀の中国にあるという南方熊楠の発見など、この物語の歴史的变化を踏まえた上で、*DS* のテキストを深く読み込むことができれば、有益な知見を得ることができたのではないか。

Keiko Inokuma, “*David Copperfield: Evil Veiled in Haze in the Distance*”

高橋和久・丹治愛（編）『二十世紀「英国」小説の展開』（松柏社、2020）所載の猪熊恵子氏の *Alasdair Gray, Lanark: A Life in Four Books* 論が大変すばらしいものだったので、期待して読んだ。この DC 論も、その『ラナーク』論ほどではないかもしれないが、期待を裏切らない好論である。善なる主人公デイヴィッドが潜ませている「悪」は、ユライアなど、他のキャラクターに移し替えられているというのが一般的な解釈だが、猪熊氏はそのような「置き換え」displacement そのものを分析しようと試みる。猪熊氏が *Ur-David Copperfield* と呼ぶものでは、ニューゲイト監獄が前景化されていることが指摘される。本来「ニューゲイト・ノヴェル」であるはずだった DC はビルドゥングスロマンへ変化していった。そこには「記憶」と「忘却」の see-saw relationship があるという (p. 213)。これは非常に刺激的な洞察だ。

Mitsuharu Matsuoka, “‘I Can’t Help Writing It’: *Maladies of the Penny Post in Bleak House*”

BH では手紙が重要な機能を果たしている。Captain Hawdon と Honoria との間に交わされた恋文は、後半のプロット展開のキーとなるが、最初の方に出てくる Mrs. Jellyby が寄付集めのために Caddy に書かせている大量の募金の手紙も印象的だ。アフリカの Borrioboola-Gha とかいう地域の人々のためだという慈善活動が、娘を無料奉仕という形で搾取する結果になっていることを意識できない telescopic philanthropy は、ディケンズらしい、わかりやすい諷刺だが、決して極端な誇張ではない。その背景には、1840 年代に Penny Post が急速に普及したことがある。松岡光治氏は Penny Post の実情を跡づけることから始めて、*Bleak House* で「書くこと」writing が持つ意味を追求していく。実証的なリサーチに裏づけられているので、Tulkinghorn や Bucket についての分析も十分に説得力がある。

Keiko Kiriya, “*The Dandy-Devil: An Analysis of James Harthouse in Hard Times*”

桐山恵子氏は、dandy と超自然的存在としての devil との密接な関係を、HT に登場するハートハウスを通して分析する。dandy と devil との関係はそれなりに裏づけられているのだが、devil に重点を置くと、ヴィクトリア朝の dandy とはずれてしまう。魅力的な外見を備えた「悪魔」は、イギリス小説の歴史上、男性女性を問わず、いろいろな形で現れてきていた。Clarissa の Lovelace, *The Monk* の Matilda など。その伝統は、さらに小説以前の演劇にまで遡ることができる。しかし、Regency あるいはヴィクトリア朝で登場してきた dandy は、これら中世以来の伝統に根ざす「悪魔」とは異なる、近代的相貌を備えている。たとえば、若き日の Matthew Arnold が、Oscar Wilde に似た dandy として振る

舞っていたことには、思想史的、文学史的理由がある。着眼点は面白く、知性のきらめきに彩られた議論は大変魅力的だったので、今後の研究の充実を期待したい。

Arisa Nakagoe, “‘Foreigners Are Always Immoral’: Rigaud and Cavalletto in *Little Dorrit*”

中越亜理紗氏の論文は、LD で登場する 2 人の外国人、Rigaud と Cavalletto を分析するもの。脅威をもたらすりゴーと Bleeding Heart Yard に受け入れられるキャヴァレットは類型を出ることがないのだから、このようなマイナーなキャラクターを論じる意義を明確にする必要があっただろう。なお、Bleeding Hearters と書いているが、原文では Bleeding Heart Yarders.

Masayo Hasegawa, “Cannibalistic Martyrdom in *A Tale of Two Cities*: The Ambiguous Duality of Sydney Carton’s Death”

長谷川雅世氏の論文は、Sydney Carton の自己犠牲の意味を、彼の cannibalistic desire を通して明らかにしようとするもの。1845 年の Sir John Franklin 率いる北西航路探検隊の遭難についての 1854 年の報告書では、人肉食が大きなスキャンダルとなった。ディケンズとコリンズの共作戯曲 *The Frozen Deep* (1856) はこの事件を題材としたもので、フランクリン探検隊が犯したとされる人肉食を否定することが、創作の契機であった。この芝居の登場人物 Wardour (ディケンズが演じた) は、ヒロインへの報われぬ愛のために苦しみ、最後はライバルのために自己犠牲の死を遂げる。ウォーダーとカートンの類似は、先行研究でしばしば指摘されてきた。長谷川氏は、この芝居と *TTC* に共通して見られる人肉食への隠された志向を追求している。カートンの自己犠牲はキリスト教的価値観の表現であるはずだが、そこには dark side があるという (284 頁)。彼の憎しみは彼自身に向けられたものであったのだ。

Fumie Tamai, “Bemoaning the Present Evil Period”: The Uneasy Relationship between Sympathy and Social Reform in *The Uncommercial Traveller*”

玉井史絵氏によれば、UT は都市のさまざまな悪の解決法を探り、執筆活動によって世界を変えようとするディケンズの最後の試みである。ディケンズは貧民への同情と共感に突き動かされていたが、同時に貧困層が中産階級にとって、あるいは社会秩序にとって、脅威となることを恐れていた。普通選挙権が与えられれば、現存の秩序は覆され、社会は退化するのではないかという危惧は、彼をはじめとする中産階級が共有していたものである。玉井氏の堅固な論考は、その不安定な関係をよく分析している。

Sari Nishigaki, “*Great Expectations*: The Chain of Evil and Consolation”

西垣佐理氏は、GE における「悪」はすべて、ピップのジェントルマン願望

から発しているとし、この物語はピップがその悪しき影響から解放される過程を描くものであると述べる。

Akiko Kimura, “*Our Mutual Friend: Evil and the Fantastic*”

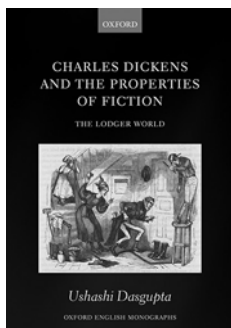
木村晶子氏は、*OMF* は、「ファンタスティックなもの the fantastic」の表現として優れているとして、それに焦点をあてて「悪」を探求する。「家族の中の悪」、「社会の中の悪」、さらに「精神の中の悪」が論じられる。これらの「悪」に対して、Lizzie や Jenny Wren が空想する世界のような、イメージーションの世界が対抗力になるという。

Yasuhiko Matsumoto, “*Perverted Virtue?: Jasper’s Evilness in The Mystery of Edwin Drood Readdressed*”

松本靖彦氏によれば、ジャスパーの悪は、ある程度まで、美德とも捉えることができる。このような逆説を出発点として、このキャラクターの詳細な分析が試みられる。登場人物の多くは、自分が置かれた環境に不満を持ち、misplaced と感じている。ジャスパーの場合、その misplacement の感覚が、Edwin への愛情、Rosa への欲望の基盤にあって、いわば二重性を備えている。彼は複雑な二重人格者なのだ。集中力 concentration と誠実さ conscientiousness が彼の美德なのだが、それが二重性を備えるがゆえに、ついには「悪」に変質していくのである。未完の作品であるので、松本氏の議論も途中で頓挫せざるをえないのだが、テキストの奥深くに切り込む論述は十分に説得力があり、知的興味で読者を惹きつける。

この論文集は、全体としては、ディケンズ作品へのイントロダクション的な構成となっているが、個々の論文の内容を見ると、作品解題的なものもあれば、特殊な一面を追求したものもあり、多様である。フォーマットが決まっているため、必ずしも得意としない作品を割り当てられた執筆者もいたのかもしれない。各自に自由に作品を選んで論じてもらっても、よかったのではないだろうか。

ともあれ、全文を英語としたことは、大きな意義がある。それは、世界のディケンズ研究者に対して、自分の実力をさらけ出すということである。称賛もあれば、厳しい批判もあるだろう。仲間内に安住することなく、そのような試練にさらされてこそ、我が国のディケンズ研究は、真に前進することができる。



Ushashi DASGUPTA,

*Charles Dickens and the Properties of Fiction:
The Lodger World*

(xvi+307 頁, Oxford University Press, 2020 年,
本体価格 £80)

ISBN : 9780198859116

(評) 筒井 瑞貴
Mizuki TSUTSUI

19歳の時に書いた‘Lodgings To Let’という詩の中で、ディケンズは恋人のマリア・ビードネルを下宿屋を差配する女主人に見立てて愛を綴っている。そして遺作となった『エドウィン・ドルードの謎』は、下宿屋を営むトープ夫人が謎の間借り人ダチェリーのために朝食を用意する場面で幕切れとなる。このようにディケンズが生涯にわたって関心を寄せ続けた「借家・借間 (tenancy)」のモチーフに焦点を当ててヴィクトリア朝における家庭生活の概念を問い直した著作が、本書 *Charles Dickens and the Properties of Fiction: The Lodger World* である。以下、各章の概要を述べ、最後に私見を記したい。

‘Tenancy’とは不動産の賃貸であり、その支払いは定期分割払いで行われた。「借家人／借間人 (tenant)」は住居を所有しているのではなく、一定の取り決めに従って、家主の監督下で限られた期間のみその賃貸物件を使用することができた。そもそも19世紀のイギリスでは持ち家を所有することができた中流階級はごく少数で、ほとんどの場合は家や部屋を借りて暮らしていた。つまり、借りる、又貸しする、下宿人を入れる、あるいは別の世帯と隣り合っ暮らすなど、無条件に占有するのではなく、空間を何らかの形で他者と共有するという生活様式が支配的だったのだ。このように部屋や家を借りるという居住の形態は、ヴィクトリア朝の人々の「家庭」概念の形成や認識に少なからぬ影響を与えていると著者は序章で指摘する。例えば、ジョン・ラスキンやサラ・エリスは男性が商業活動に従事する公的領域から完全に分離した私的領域としての「家庭」を理想に掲げたが、借家(間)における「家庭」は、大家や家主によって絶えず介入・干渉され、また家賃の請求や支払いが日常的に行われることで、いわば市場の論理が家庭生活に持ち込まれることになり、私的領域の独立性は自明なものではなくなってしまう。

ギャッツヒルの邸宅を購入するまでに少なくとも9回の引っ越しをしたというディケンズも、家屋や下宿の賃貸とは浅からぬ関係を持っており、その創作活動や想像力の源泉の一つであった。ディケンズにとって、借家(間)とは様々な物語を生み出しうる可能性を持った場であり、笑劇や教養小説、探偵小説などジャンルを超えて作品の重要な舞台としてたびたび登場させている。本書の5つの章はそれぞれ固有の文学形態に焦点を当て、空間を他者と共有することで生まれる混沌や予期せぬ調和、孤独と社交など、‘lodger world’ (9) で形成される共同体の複雑な機能に目を向け、それらが焙り出す階級、資本、ジェンダー、ナショナルリティといった諸問題を論じている。

第1章 *Building a Career: From Sketches to Dombey* では、ディケンズの初期作品に見られる下宿屋 (boarding/lodging-house) や女主人 (landlady) の表象が検証され、同時代の笑劇との関連性が論じられる。19世紀には下宿屋を舞台とした一幕ものの笑劇が数多く上演され、おせっかいな女主人、不測の出来事、滑稽な取り違え、幸運な偶然などが描かれ、家族や友人、恋人どうし、あるいは共同体の紐帯が強化される大団円、といった典型的な筋書きで人気を博した。一つの部屋で物語が展開し、特別な衣装や小道具も必要とされないことや、盗み聞き、すれ違い、どたばたといった当時の大衆演劇の常套を容易に盛り込めることから、こうした物語設定は重宝されたが、劇中人物はおしなべて平面的で戯画化されたステレオタイプとして描かれた。ディケンズも自作にこうした流行を取り入れたが、下宿屋という場をより複雑かつ多角的に捉えていたことが主に前期作品の分析を通じて示される。『マーティン・チャズルウィット』のトジャーズ夫人の下宿屋が示すように、見知らぬ者同士が一つ屋根の下で共同生活を営む空間は、活気と変化を象徴する場として大都市ロンドンそのものの縮図となっている。そして、都市生活における流動的で持続性の欠けた人間関係ゆえに、下宿という場においては他者を単純化し誇張して認知するという笑劇的な人間理解が生まれるという。この意味で、下宿屋とはまさに平面的な他者認識を植え付ける空間であったと著者は主張する。カリカチュア化されたディケンズの人物造形はアーバンリアリズムの対極にあるのではなく、都市生活における他者との関わり方を忠実に写し取る手法に他ならず、本質的にはその一形態なのだ。また、目まぐるしく入れ替わる下宿人たちと友愛や敵対、恋愛など多様な関係性を構築する立場にあった女主人も、ディケンズの作中においては他者を注視し、偵察し、判断し、お喋りし、非難し、共感するという多面的な役割を担っており、小説家としての自己が重ね合わされていると指摘される。『ニコラス・ニクルビー』に登場する家主のミス・ラ・クリーヴィーがミニチュア肖像画家として、様々な職業の人間を観察し、作品に仕上げる「芸術家」としての一面を併せて持っていることが想起さ

れよう。

教養小説を取り上げた第2章 ‘To Let To Let To Let’: The *Bildungsroman* and the Spatial Imagination では、『デイヴィッド・コパーフィールド』や『大いなる遺産』などの作品が分析される。若き日のデイヴィッドやピップはそれぞれアデルフィ、バーナーズ・インやテンプル地区で下宿暮らしをするが、これは少年から大人への移行期間において重要な意味を持っている。彼らは部屋を装飾し快適で理想的な住環境を構築し、また時には友人や知人を招待し、自らの居住する空間を他者に提供して客を歓待する主人 (host) の役割を務めるが、こうした経験が結婚後に営む家庭生活の予行演習として機能するのである。第2章ではこのように教養小説の主人公の通過儀礼の場として下宿が捉えられ、さらにミコーバーやクラブ夫人、ウィンプル夫人といった、下宿の(女)主人の代理親 (surrogate parent) としての位置づけも問い直される。保護者としては適任ではないミコーバーは、代理父というよりも対等の大人として、単なる下宿人と家主との関係性を越えた絆をデイヴィッドと形成し、家庭生活と社会生活との間の緩衝地帯を提供している。一方で、「私だって母親ですもの」を口癖とするクラブ夫人は下宿人に対する代理母の役割を自任しているが、頻繁に職務を放棄するこの人物は、労働や時間に対する怠惰な態度を示すことで、教養小説が是とする道徳に反旗を翻し、オルタナティブな価値観を体現していると述べられる。クラブ夫人の造形が家庭喜劇の登場人物そのままの紋切型であることは否定できないが、まさにそれゆえに彼女が女主人として発する諸々の陳腐な助言—— ‘keeping a good heart’ や ‘knowing one’s own value’ (104) など—— は、そのまま教養小説としての『デイヴィッド・コパーフィールド』が読者に向かって推奨するブルジョワ的イデオロギーのパロディとなるのである。

また、‘tenancy’ のイメージは、自らの人生を回想する主人公の言語表現においてもしばしば印象的に用いられている。例えば、幼いデイヴィッドが淡い恋心を抱くエミリーに宛てた手紙の文字が「貸しアパートの広告」に比せられることから、デイヴィッドが愛情を移ろいゆく仮初めの感情と認識していること示唆され、ローザ・ダートルの第一印象が「荒れ果てた空き家」に擬せられることで、愛情を注ぐことが他者に ‘home’ を提供する行為として捉えられていることが浮き彫りになる。このように、貸家(間)は主人公の内面世界を描く上でも有効なメタファーでもあったのだ。

第3章 ‘The Property of 1851’: The Great Exhibition and the Business of Hospitality では、1851年に開催されたロンドンの万国博覧会に焦点を当てる。万国博覧会の開催に伴い、‘Old English Hospitality’ (171) が国家的なアイデンティティとして掲げられ、ホテルや下宿屋といった接客業は需要の大幅な増加を見込むことと

なった。直接的な形では万国博覧会を小説の題材にしなかったディケンズも、翌年から刊行を開始した『荒涼館』などの作品に当時のロンドンの状況を反映させていると著者は述べる。『リトル・ドリット』では、偽善的な家主のキャスビーが「宿屋がないのに宿屋の看板を出しているだけ」と揶揄され、うわべだけの飾りが内面に代わって受け入れられる「実社会の博覧会 (the great social Exhibition)」の一例として批判されるが、こうした記述をディケンズの同時代の状況に対する言及として読むことができる。また、この時期には、会場が設営されたハイド・パークのみならず、レスター・スクエアも大陸からの旅行者が多く逗留し賑わう地域となり、追放者、亡命者、スパイ、政治扇動家、観光客であふれるコスモポリタンな空間となった。執筆時点より過去の時代を描いているとされる『荒涼館』ではジョージ・ランスウェルが射撃場をこの場所で営んでいるが、怪しげな外国人宿が立ち並び、みすぼらしい外国人が往来する様子は、1851年の状況を反映しているものであるという。第11分冊の冒頭で描かれるレスター・スクエアの描写でも、ヨーロッパから流入してきた政治的亡命者やスパイの存在が仄めかされている。しかしながら、『荒涼館』において前景化されるのはジョーやジョージといった貧困にあえぐ地元住民の存在であり、こうした外国人たちに物語が深入りすることはない。イギリス国内の状況に目を向けずにヨーロッパ大陸の問題に焦点を当ててしまうと、物語そのものがジェリビー夫人の慈善事業と大差ない‘a case of telescopic storytelling’ (182) に墮してしまうからだ。

さらに、ロンドンで暮らす外国人への同種の興味は、18世紀を舞台とした『二都物語』からも読み取ることができる。フランスから亡命してソーホー・スクエアで居を構えるマネット一家の上階には独身者の間借り人が暮らしていると噂されている。この人物についてはそれ以上掘り下げられることなく、ダーニーとルーシーが結婚するといつの間にか姿を消しているが、著者はこの‘ghostly lodger’ (185) に注目し、マネット一家のような亡命者を待ち受けていたかもしれない孤独な運命を暗示する存在であると指摘する。他の同時代の作家たちと同様に、ディケンズもロンドンの下宿屋が国際情勢を反映するさまをつぶさに観察し、作中に描き込んでいるのである。

続く Interlude: Londoners *Maritimized* はロンドンを離れて、海辺のリゾート地におけるホテルや宿屋、下宿屋に話題が移る。かつては田園地方 (pastoral) が引き受けていた都市からの逃避と回帰という機能を、ブライトン、ドーヴァー、マーゲート、ラムズゲートやヤーマスといった海辺の町が担うようになったが、いずれもヴィクトリア朝には観光客が集うリゾート地へと変貌を遂げ、単なる牧歌的な土地ではなくなっていった。それに伴い、パストラル的空間と伝統的に結びついていた階級の上昇志向、ロマンス、健全な身体への回復といった期待を

ディケンズは作中でことごとく転覆させる。『ボズのスケッチ集』では成り上がりのタッグス一家がラムズゲートで零落し、『デイヴィッド・コパーフィールド』のヤーマスではステアフォースがエミリーを誘惑し、『ドンビー父子』のブライトンではドンビーとイーデイスの不幸な結婚を招く求愛の場となり、スキュートン夫人は麻痺の末に死亡する、といった具合に、物語が‘modernized’ (38) されているという。

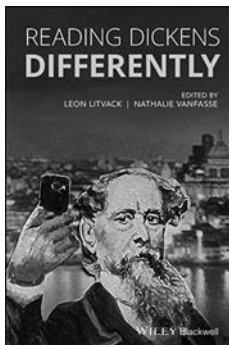
第4章 ‘Is This an Hotel? Are There Thieves in the House?’: The Spatial Contexts of Crime は探偵小説に目を向け、犯罪の舞台としての宿屋や下宿が担う機能や、このジャンルが提起する空間にまつわる言説を検討する。ヴィクトリア朝においては ‘low/common lodging house’ と呼ばれる安価で部屋を提供する下宿屋が、しばしば犯罪者や娼婦が寝泊まりする場所となり、1851年には法律による取り締まりの対象となるなど、悪徳と結びつく空間として問題視されていた。だがディケンズやコリンズの犯罪小説では、『荒涼館』のタルキングホーンが事務所で射殺され、『月長石』ではゴドフリーが ‘respectable’ な宿屋で暗殺されるように、より安全で私的に思われる閉ざされた空間でさえも外部からの侵入を免れず、都市においてはあらゆる居住空間が犯罪や危険と隣接していたことが示される。『荒涼館』において、クルックの小道具屋に下宿するネモやミス・フライトが互いのことを何も知らないように、ロンドンでは物理的・空間的な近接性は必ずしも対人関係の親密性を保証することにはならないのだ。そのため都市で起こる犯罪を解決する探偵は単なる謎解き役ではなく、何よりもまず ‘a connoisseur of space’ (224) でなければならないと著者は論じる。ある場所で起こった出来事は必ずその痕跡を空間に留めるという前提を持つ探偵小説においては、まさに空間それ自体がテキストのように意味を求めて読まれる対象となるのである。『荒涼館』で下手人のオルタンスを逮捕するバケット警部はロンドンのあらゆる空間を熟知し、読み解き、活用する能力に長けた有能な探偵であるが、同時にオルタンスを下宿におく主人 (landlord) であるという事実はこの意味で示唆的である。彼の最大の協力者であるバケット夫人も、「おしゃべりで世話焼きな女主人」という本書の第1章で扱ったようなステレオタイプ像を巧みに演じることによって、オルタンスの残した犯罪の足跡を辿り事件解決の手がかりを次々と見つけ出していく。犯罪捜査はまさに空間を巡る攻防であり、‘the character who can manipulate his or her surroundings to best advantage’ (224)こそが勝者となるのである。

第5章 How To Live Together: Collaborative Fiction は『家庭の言葉』や『一年中』のクリスマス特集号に掲載された他作家との合作小説を論じる。『リトル・ドリット』、『我が互いの友』、『エドウィン・ドルードの謎』などの後期作品では、独身者の一人暮らし、友人との同居、下宿住まいなど様々な居住形態が描か

れているが、クリスマス号の作品においては往々にして個人的な空間よりも共同体的な空間が称揚される。『リリパー夫人の下宿屋』と『リリパー夫人の遺産』では、下宿屋の形成するコミュニティが伝統的な家族集団の代替物を提供し、多様な物語が生成される空間として描かれる。また、1858年にコリンズやギaskellらとの共作で発表した『空き家』をはじめとして、旅籠や下宿屋を舞台とした合作小説が多いという点に着目し、他人と一つ屋根の下で空間を共にする行為が、複数の小説家が共同して一つの作品を創り上げる共作活動へのメタフィクショナルな言及になっていると著者は主張する。共同執筆に疲弊したディケンズは1868年には合作を打ち切るが、同一空間における他者との「共生」を考察する上で意義深い試みであったと結論付けられる。

以上、主にディケンズの著作に関する議論を中心に内容を紹介したが（紙幅の関係で省略したセクションもある）、本書ではコリンズやサッカレーといった有名作家の小説や当時の新聞・雑誌記事はもちろん、今日ではほとんど読まれない作家の作品や大衆演劇など膨大な一次資料にも幅広く言及されており、加えて1851年に廃止された窓税（window tax）や SICLC（Society for Improving the Conditions of Labouring Class）による住宅改革の試みなど、ヴィクトリア朝の住環境をめぐるコンテクストにも目配りがきいている。ディケンズ作品の分析では、『デイヴィッド・コパーフィールド』のクラブ夫人など珍しいキャラクターが取り上げられ、ミコーバーやバケットといった頻繁に論じられる登場人物についても、間借り人との関係性からその役割が再考されており新鮮だった。他にもエミリーがヤーマスの浜辺で拾い上げる貝殻に‘complex symbols of snugness, emptiness, protection, fragility, and death’（199）を読み取るなど、細部の解釈も興味深い。もっとも、テーマの性質上、分析される作品の箇所や登場人物にやや偏りと狭さが見られるのは否めない。例えば、寄宿学校（boarding-school）等は筆者の定義する‘the lodger world’には含められないのかもしれないが、教養小説を論じた第2章では、『デイヴィッド・コパーフィールド』のセイレム・ハウスなども比較対象として考察に含めれば、空間の共有と主人公の成長というテーマにももう少し広がりが出たかもしれない。また、第3章の『荒涼館』と万国博覧会の関わりについては、あくまでも後景に仄めかされているという指摘に留まるため、作品全体の読みを大きく問い直すには至らないのが惜しまれる。著者の主張を踏まえれば、レスター・スクエアのジョージの射撃場を訪れるフランス人のオルタンスの造形に、万国博覧会に乗じて渡英してきた‘Continental agitators’（180）の脅威を結びつけてさらに踏み込んで論じる余地もあったかもしれない。とはいえ、著者の一貫した興味は‘what does it mean to feel at home?’（vii）という問いにあるようなので、こうした点については今後の研究の中でさらに掘り下げられていく

ことが期待できるだろう。ヴィクトリア朝における「家庭」という、王道中の王道ともいえるテーマに独自の文化的視座から切り込む著者の清新な着眼点が光る一冊だった。



Leon LITVACK and Nathalie VANFASSE eds,
Reading Dickens Differently
(xvi+366 頁, 259 頁, Wiley Blackwell, 2020 年,
本体価格 \$50)
ISBN : 9781119602224

(評) 石井 昌子
Masako ISHII

Reading Dickens Differently と題された本書は、現代では、ディケンズの作品が必ずしも一般読者に読まれているとは言えず、文学作品の存在意義さえ問われているという認識を背景に、研究者だけでなく一般読者をもディケンズに引き付ける、刷新的な「リーディング」を提案することを目的としている。そこで本書には、作品に隠された深い意味を探ることに加えて、テキストや挿絵などから直ちに「明らかで」「感知できる」「純粹で翻訳できない、五感に訴える臨場感」を体験する読み方 (6) や、作者は登場するが作品とは直接関わりのない内容のビデオゲームの紹介なども登場する。

本書は3部からなり、各々4つの論文を含んでいる。第1部のタイトルは、‘Reconfiguring Dickens’で、最近のディケンズの伝記研究の発展に基づき、ディケンズの人生の見逃されてきた側面を扱う。第2部のタイトルは、‘Reincorporating Dickens’で、身体的・視覚的方法を採用し、また学際的・間テキスト的のレンズを通して新たな読み方が提供される。第3部のタイトルは‘Resetting Dickens’で、新しいメディア・テクノロジーの分野とディケンズの関係に焦点を当て、デジタル・プラットフォーム、ソーシャル・メディア、双方向型アプリ、バーチャル・リアリティの利用が、ディケンズの作品を読むときの連続性と変化に、どのような影響を与えるかを考察する。

第1部 ‘Reconfiguring Dickens’——伝記的観点から読む

最初の論文は、編者でもある Litvack のもので、これまで知られていない資料を使って、John Forster や近親者から得られたディケンズの死と埋葬に関する知識を補強する。新たに発見されたウェストミンスター寺院の院長の私的書簡は、ディケンズのウェストミンスター寺院での埋葬が決まったいきさつを教えてくれ、ディケンズの息子 Charley が父親の危篤に際して高名な神経科医を呼ぶ電報の、

「一刻も早く」という言葉からは、当時は心臓発作にはなす術がなかったことが分かる(17)。また、寺院の会計帳簿にあるディケンズの葬式の料金表は、ディケンズの葬式の詳細を教えてくれる。Litvack は、ディケンズの死亡証明書などの新しい資料も示し、1870年6月9日～13日に焦点を絞って、Forster の *Life of Charles Dickens* (1872-74) を補強している。

2番目の Lillian Nayder の論文は、*A Tale of Two Cities* の新しい読み方を、ディケンズと8歳違いの弟 Frederick との複雑な関係という視点から提案している。ディケンズは、父親の財政危機による一家離散後、Fred を自分と一緒に住ませ、就職の面倒も見ていたが、Fred がディケンズに多額の借金を肩代わりさせ続けたこと、ディケンズの反対を押し切って Anna Weller と結婚したことで、2人の仲は険悪になった。しかし Fred が不倫を理由に Anna から別居を要求され、手紙で相談したので、ディケンズはこれに応じた。この頃ディケンズは、22年間連れ添った妻 Catherine と合意による別居をし、不倫の噂と共にスキャンダルを報じられていたので、穏便に済ませたかった。彼は、弟の別居訴訟の証言台にも立たなかった。他方ディケンズは、1859年1月に *A Tale of Two Cities* の構想を練り始め、1859年4月30日から11月26日まで、*All the Year Round* に連載した。Sydney Carton には Fred が、Charles Darnay にはディケンズが投影され、また、農奴の女をレイプしたもしくは(ヴィクトリア・アルバート・ミュージアムに保管されている初稿のプロットによると)不倫を働かせた Darnay の叔父 Evrémone には Fred、夫に冷遇される Darnay の母親には Fred の妻 Anna、農奴に鞭をふる Darnay の父 Evrémone 侯爵にはディケンズが、各々投影されていると Nayder は主張している。

3番目の David Paroissien の論文は、ディケンズが1830年代に国会を傍聴したことが、小説家としての彼の後のキャリアに影響を与えたことを論じる。18歳のディケンズは、大英博物館のリーディング・ルームでジャーナルを大量に読んで学ぶだけでなく、ウェストミンスター宮殿の傍聴席に座って、フリーランスの記者として議事を眺めおろし、重要な議論を見聞しながら、自身の政治観や歴史観を形成した。イギリスの国会が、第1次選挙法改正のための議論で湧いていた時期のことである。Paroissien は、歴史における民衆の力を説く Thomas Babington Macaulay の歴史観が、Thomas Carlyle とともに、ディケンズの歴史小説の書き方に深く影響を与えたと考え、Macaulay が1831年3月2日から1832年2月28日にかけて下院で行った、選挙法改正を支持する演説のうち、ディケンズが見聞したことが状況証拠から推測できるものを紹介している。Paroissien によると、Macaulay の影響は、*Barnaby Rudge* が政治的動向よりも社会的動向に、とりわけ鍛冶屋の Gabriel Varden に中心を据えていることに現れている。この論

文は、40歳代半ばのディケンズが、Macaulayの*History of England*を真剣に読んでいる様子の描写で終わっている。しかしParoissienは、ディケンズがその後まもなく*Household Words*に投稿した論文‘Insularities’の中で、Macaulayのホイッグ史観に対する嫌悪を表わした部分を紹介することも忘れてはいない。

4番目のNeil Davieの論文は、Cold Bath Fields Prisonの記録文書から新たに見つかった資料に基づき、沈黙方式を奉じるChesteron所長と隔離方式を主張するミドルセックスの治安判事グループとの衝突が、ディケンズの刑事政策に対する態度や、Urania Cottage projectとの関わりについて持つ意味を再考する。政府は隔離方式派であったが、治安判事が幅を利かせることを嫌ったことから、Cold Bath Fields Prisonでは、ディケンズとChesteronの支持する沈黙方式が温存されていた。治安判事代表のRotchには、沈黙方式に伴う「踏み車」の罰則に反対するなどの民主的な側面もあったが、ディケンズが刑務所に自由に出入りできない規則を作り、効果のほどは定かでないが、Urania Cottage projectのパトロン、Miss Couttsが、Cold Bath Fields Prisonの女囚に会うことも禁じた。イギリスの刑務所は、1850年代後半からはハイブリッド型に変わってゆく。ディケンズの刑事政策に対する態度も、‘American Notes for General Circulation’（1842）では沈黙方式を断固として擁護し、隔離方式における囚人の「拷問の心配と恐ろしい絶望」に言及していたが、‘Pet Prisoners’（1850）が出版される頃には、沈黙方式の利点は、その低コストと囚人を甘やかさないことで、隔離方式の欠点は、模範刑務所Pentonvilleの囚人の示す奇妙な陥りやすい利己主義（‘strange absorbing selfishness’）だとして、変化する。

第2部 “Reincorporating Dickens” —— 感覚的・視覚的観点から読む

Georges Letissierの論文は、読者が身体的反応を通して読むという方法を提案し、ディケンズのテキストの発信する知覚（意味でなく）に注目する。例えば、*Great Expectation*の中で、Pipが夜、Orlickと人里離れた家で出会う場面で、Pipは最初、薄暗い中で触覚に頼って動いている。PipはいつOrlickに絞め殺されるか分からない。読者とPipの距離は、手の届く距離に縮まり、読者の鼓動は早くなる。Pipの腕は、衣服に火のついたMiss Havishamを火から救い出したときの火傷で痛んでいるのだが、「まるで茹でられているように」としか、痛みを形容する言葉が見つからない。読者は、言葉に困る自分の経験に当てはめてPipに共感する。さらにPipは、Orlickの重い手で口をふさがれ、脅しの言葉を聞かされている間、「痛みの対処法（‘pain management’）」（102）を実行する。つまり、現在の死の恐怖を、死後に誤って語り継がれることの不名誉に置き換え、Orlickに弱みを見せないのである。Letissierは、読者のミラー・ニューロンが、以前の行

動でコード化された反応メカニズムによって、直接経験していない状況に反応する、という神経心理学の説明を引用している。こうしてディケンズは、読者の認知能力よりも知覚に訴えて、読者に、身体的な激痛と死の恐怖の中にある Pip の状況を追体験させるのである。

2 番目の Michael Hollington の論文は、ディケンズを愛読した D. H. Lawrence の作品には、モダニストでありながらリアリストとしてのディケンズの手法の影響も受けていることを論じている。Lawrence の最初の一人称小説 *The Lost Girl* (1920) において、ディケンズの影響が最も濃いことには、批評家が一致している。Hollington が新たに指摘する影響の第 1 は、登場人物のモデルとなる人物を模倣する能力の高さと、登場人物の声へのこだわりである。第 2 は、人間の顔つきと鳥などの動物、とくにディケンズが好んだカラスの顔との類似を認識することである。*The Lost Girl* では、北米のトーテムを前景化して効果を上げている。第 3 は、生きている人間を物のように、物を生きている人間のように描くことである。物の場合は「アニミズム的」と言える (120)。Lawrence は、Catherine Mansfield の作品にも、このディケンズからの影響を見出していた。

3 番目の Jeremy Tambling の論文は、John Ruskin の著作を手掛かりとして、画家 J. M. W. Turner の作品を通じてディケンズの芸術を見直すことを提案し、ディケンズが、Turner のイメージと類似したイメージを、文章を通じて生み出している部分に焦点を当てる。まず、Turner の嵐への関心は、ディケンズにも見られる。*David Copperfield* の Steerforth や Ham の死をもたらす嵐の詳細な記述を、Ruskin は賞賛している。*Dombey and Son* の ‘French road’ の章は、Turner の *Rain, Steam and Speed* (1844) の、ディケンズによるテキスト版である。Ruskin がその手紙の中で思い出している、ディケンズの Glencoe で遭遇した土砂降りの雨の描写は、Turner のこの絵の雨の激しさと対をなす。*Dombey* の汽車は轟音を立てて近づき、ぼんやりした光が赤い 2 つの目になり、燃え盛る炉は赤く輝く石炭を散らす。汽車の煙は、Turner の絵のように、土砂降りの雨の風景を「産業化する」(131)。Tambling は、*Great Expectation* の Pip がロンドンで Magwitch の逃亡を助ける場面が、きわめて Turner 的だと言う。ヴェールが引き上げられるように、光が、ぼんやりしたパターンからはっきり区別できる形に移行し、とくに水面のきらめきが明るい色をなす。このヴェールは、Pip の心理的・社会的な暗雲を暗示する。Tambling はまた、Ruskin, Turner, ディケンズの 3 人とも、廢墟 (ruins) を好んだと考えている。「ディケンズの霧や雨や泥は、形のない太古の風景を暗示する」のである (139)。

4 番目の Chris Louttit の論文は、これまで言及されることのほとんどなかった、ディケンズの死後出版された Household 版 (2014) の挿絵を分析し、視覚的效果

を論じる。Household 版の挿絵画家たちは、風刺画に満足しなくなっていた 1860 年代と 1870 年代の大衆の好みに合わせて、挿絵を風刺画スタイルからリアスティックにしたため、挿絵は、テキストの「付属物」から「内在的」存在になった (152)。また Fred Barnard による *Bleak House* の挿絵は、メロドラマ的要素を前景化し、劇的効果を上げている。Jo の挿絵は以前の版より数が多く、また「はっとするほど人間的でシンパセティックな人物」として描かれ、Jo の人気に貢献している (158)。最後に Louttit は、ディケンズの挿絵付きテキストのデジタル・アーカイヴの未来への展望について述べている。

第 3 部 “Resetting Dickens” —— 新しいメディアで読む

Peter Orford の論文は、ヴィクトリア朝の月 (週) 刊配信を真似て、ディケンズの作品をオンラインで分割配信した場合の、双方向的なりーディング・ストラテジーを示している。2012 年、ディケンズ誕生 200 周年を記念して、*Dickens Journals Online* が始まり、*Household Words* と *All the Year Round* へのアクセスが可能になった。次いで、*A Tale of Two Cities* と Wilkie Collins の *No Name* を週刊で、*The Mystery of Edwin Drood* と *Our Mutual Friend* を月刊で配信するプロジェクトが始まり、*Edwin Drood* の配信を監修したのが Orford である。このプロジェクトの最も重要な点は、オンライン・コミュニティの読者が、各々の配信の後で議論することである。ディケンズの時代の、インストールごとの書評や社会の反応が紹介されている。Orford はまた、*Edwin Drood* の登場人物の重要度を、彼らの 1 か月間、3 か月間、半年間の登場頻度で測り、グラフで示している。

2 番目の Gillian Piggott の論文は、現代の「都市探検」(Urban Exploration もしくは Urbex) を、ディケンズがロンドンを歩き回っていた事実と比較している。都市探検とは、「レクリエーションとして行われる、建造物への不法侵入」を意味し、例えば、建設中の高層ビルや使われていない建物によじ登ったり、立ち入り禁止のトンネルやロンドンの地下鉄の使われなくなった部分に潜り込んだりする (186)。ほとんどが若者である。1970 年代から 1990 年代にかけて活発になり、一時下火になったが、ドキュメンタリー映画やテレビに出演するだけでなく、James Bond シリーズなどの映画にも影響を与え、現代文化に根付いている。他方、ディケンズは、「まともな人間は寝ている時間、に幾夜も (1 時間 4 マイルかそれ以上の速さで)、真っ暗なロンドンを 15 マイルも 20 マイルも歩き回った」(188)。ロンドンのオフィスから家まで夜中に 30 マイル歩いたこともある。ディケンズの創作を支える巨大なエネルギーと感情が長距離を歩くことを必要としただけでなく、ディケンズの作品の絵画的、聴覚的、運動的イメージ、都会の空間の詳細な描写には、歩いて得た材料が糧を与えた。息子の Charley は、ディケン

ズが、歩いている間にロンドンおよび小説の登場人物と心を通わせていた、と言っている (192)。他方、都市探検者は、立ち入り禁止区域に入る経験は、都市と一体化する感覚を生み、日常生活よりもリアルな感じがすると言う。またディケンズが、汽車に乗ってそのスピードを経験したときの興奮を、“A Flight”というエッセイで書いているのに対し、都市探検者は、例えば超高層ビルによじ登って自分の身体を死の危険に晒す時、アドレナリンが増加して非常な幸福感を感じ、それを巨大なゲームに中毒することに近いと認識している。

3番目の Francesca Orestano の論文は、最近のビデオゲーム、*Assassin's Creed: Syndicate* (2015) に注目する。このゲームの中でディケンズは、登場人物の一人として (出演時間は1分少々であるが)、双子の暗殺者 Jacob & Evie Frye を、ロンドンで人を襲う Spring-heeled Jack と呼ばれる幽霊の正体を明らかにするミッションに誘う。Jacob & Evie は誘いに応じ、Evie が幽霊を殺し、正体を暴く。このゲームの物語の背景にはヴィクトリア朝のロンドンの雰囲気が使われているのだが、このディケンズ的の舞台装置はできる限り正確に再現され、映像は驚くほど鮮明である。ゲームの対象年齢は10代前半であるので、製作者 Ubisoft は、売春婦や麻薬は避けており、暴力シーンは低レベルであると言っている。Orestano は、ゲームと読書は異なることを認め、またテレビで育った現代の子供たちがディケンズの作品を読む根気をなくしているという指摘を引用しながらも、*Assassin's Creed: Syndicate* は、ディケンズの作品の断片を残しつつ、子供たちのワクワクする探究を可能にしていると結んでいる。

最後の Clair Wood の論文は、iPad のアプリとポップアップブックという形で提供される *A Christmas Carol* を取り上げる。ポップアップブックとは、「1つ以上の操作可能なパーツもしくは3次元の要素を持つ本」である (223)。iPad アプリの読者も、プロットを変えることはできないが、画面をタッチすると、Marley の幽霊の頭の包帯が外れて (顎が落ちて) うめき声をあげたり、画面の前景に浮かんでいるコインや幽霊や鎖や食べ物や舞うなどして、読者は物語に参加することができる。Wood は、このような操作可能なパーツや3次元の世界は、読者を物語の雰囲気に浸らせ、Scrooge の改心に一体化させると主張している。

以上本書は、ディケンズやその作品への様々なアクセスの仕方を紹介しているので、読者は各自の興味に従って論文を選ぶことができる。そしてこのことは、ディケンズの偉大さを改めて教えてくれる。



Jennifer GRIBBLE,
Dickens and the Bible : 'What Providence Meant'

(x+200 頁, Routledge, 2021 年,
本体価格£96)

ISBN : 9780367508654

(評) 吉田 一穂
Kazuho YOSHIDA

聖書の権威が高等批評（聖書の文学的・歴史学的研究）や進化論をはじめとする発展する科学からの試練にさらされる時、「神意（摂理）が何を意味するか」が最も議論を呼ぶ問いとなる。この本は、ディケンズと宗教という主題を扱い、歴史と文学という学際的領域に寄与する本である。著者のジェニファー・グリブルは、長年教鞭をとってきたシドニー大学の名誉准教授である。特にヴィクトリア朝時代の文学とオーストラリア文学に関心があり、これまでに *The Lady of Shalott in the Victorian Novel* (1983) と *Christina Stead* (1994) を出版し、ジョージ・エリオットの *Scenes of Clerical Life* (1857) の 1998 年のペンギン版で編者を務めている。

リチャード・D・オールティックが *Victorian People and Ideas* で指摘しているように、ダーウィンの進化論は、ヴィクトリア朝時代の宗教的・道徳的前提やユダヤ・キリスト教的人間観の根底を揺るがすほどの衝撃を与えた。進化論は、神が人間を創造し、人間の要求にかなうように森羅万象を仕立てたという長い間抱かれていた神の摂理説に懐疑の念を起こさせ、人間は動物界で最も発展したものにすぎず、その他のものを支配しているのと同じ発展の法則に支配されているにすぎないとした。

ディケンズは、物語構築に関してラマルクやダーウィンの進化論に影響を受けることなく、作品の中で神意（摂理）という言葉を用いている。グリブルは、序論で本の副題である 'What Providence Meant' が *Our Mutual Friend* のボズナップ氏を説明する言葉、すなわち、「神意のあるところは、常にボズナップ氏の意のあるところと一致していたのである」から来ていることを示している。神意は、ディケンズが高く評価していた 18 世紀の小説にも見られるが、ディケンズの作品の場合は、聖書とのテキスト相互関係性の中で考えていく必要がある。ラテン語の 'providentia' は、カール・バルトによって「自然界や世界の方向づけを行う

できごとに働く神のルール」と要約されている。ディケンズの場合は、物語構築のため神意を用いる必要があったのだ。

18世紀の小説の影響を受けた小説世界の創造者としてのディケンズは、ユダヤ・キリスト教の語りによって物語を構築している。グリブルは、ディケンズに旧約聖書を嫌い新約聖書を重視する傾向があることを指摘している。ディケンズが旧約聖書を嫌い新約聖書を重視した理由として、法と復讐の執行者である神が、イエス・キリストによって説かれる愛の神の概念と相容れない存在であることがある。一方で、グリブルは、ディケンズの小説を構築しているのは全体的な聖書の語りであることも指摘している。そして、ディケンズの語りには、創世記や預言書や讚美歌も福音書やヨハネの黙示録と同じくらい必要不可欠なものであることを見てとっている。聖書は、ディケンズの小説の物語構築に必要なだけでなく、読者に倫理的な指針をも提供しているのだ。

第1章「コンテクスト」でグリブルは、ディケンズが聖書を物語構築に用いる背景について述べている。ディケンズにとって聖書は、道徳的指針を与え、慰めを与えるという点で重要な書物であった。彼は、新約聖書を最も良い書物であると考え、息子たちにも読むことを勧めていた。教会出席者の減少に関する1851年の国勢調査の報告は、ヴィクトリア朝時代のイングランドに信仰が失われてしまったと解釈されることもあったが、聖書の売り上げと普及率は伸びていた。聖書を読む人が増えたことは、ディケンズの小説の理解を助けたと思われる。1835年に設立されたロンドン市伝道団は、ロンドンの貧しい家庭に聖書を提供した。聖書はまた教育の手段として日曜学校でも用いられていた。グリブルは、*Great Expectations* においてウォプスル氏の大伯母が、自身が経営する塾で聖書を用いて生徒に文字を読む練習をさせていることを挙げ、教育の手段としての聖書に注意を促している。

一方で、ディケンズ自身の宗教に関する背景についても説明的に付け加えている。グリブルは、チャタムの子供時代、アングリカンのセント・メアリー教会、プロヴィデンス・バプテスト・チャペル、ウィリアム・ジェイルズのバプテスト派の教会で出会った宗教によって、ディケンズが神意について探求するようになったのだと説明している。英国国教会から離れ、ユニテリアンの非国教徒になり、再び英国国教会に戻ることにあった過程においても神意の探求が関係していた。英国国教会で洗礼を受けたにもかかわらず、ディケンズは、1842年から1847年までエドワード・タガートのリトル・ポートランド・ストリート・ユニテリアン・チャペルに出席していた。ディケンズは、タガートとは生涯に渡る友情を育んだ。英国国教会とピュージー主義に嫌気がさしていたディケンズは、ユニテリアン主義の慈善や寛容に感銘を受けたのであった。当時ユニテリアン派で

あった著名な人物として、サミュエル・テイラー・コロリッジ、ローバート・ブラウニング、ジェイムズ・マーティノウ師、ハリエット・マーティノー、ウィリアム・ギヤスケル師、エリザベス・ギヤスケル、チャールズ・ダーウィン、ディケンズの友人であり、伝記作家であるジョン・フォスターなどがある。このことから当時ユニテリアン派であることは、イギリスにおいてはそれほど珍しいことではなかったと言える。ディケンズはタガートだけではなく、1842年アメリカ旅行をした際、ウィリアム・チャニングにも影響を受けた。チャニングの特徴として、原罪や予定説に対して善や自由意志を尊重した点が挙げられ、この点においてディケンズは共感を覚えたのではないかと思われる。

ここで付け加えておくと、ユニテリアン派とは、三位一体説 (Trinity) に反対し、唯一の神格を主張し、キリストの道徳的教えは受け入れるが、その神性は否定する宗派である。ユニテリアン派教会は、イギリス国教会を脱して、1773年にセオフィラス・リンジーによって作られた。ディケンズは、一時期ユニテリアン派に走ったが、決してキリストの神性を否定していない。なぜならば、ディケンズは *The Life of Our Lord* において人間では行えないような奇跡も描き出しているからである。グリブルは、ディケンズがリトル・ポートランド・ストリートのタガートの後任のジェイムズ・マーティノウの説教を聞いていたことを指摘している。さらにジェイムズ・マーティノウの「新ユニテリアン主義」は、キリストの神性も認めていたことを付け加えている。このことから、おそらくディケンズの信奉したユニテリアンの考えは、ジェイムズ・マーティノウの「新ユニテリアン主義」に近いのではなかろうかと推察できる。

グリブルは、ディケンズが18世紀と19世紀の小説に特徴的な神意を含むプロットを組んでいることだけでなく、ダーウィンとは異なり、驚異的な事柄を全能者の英知によるものであるとしている点を指摘している。社会ダーウィニズムを唱える人々は、チャールズ・ダーウィンが発見した自然法則が、人間の世界にもあてはまるのだと仮定した。彼らは、強い者が生き残り、弱くて環境に適應できない者は生き残ることができないと考えた。ディケンズの作品世界でそのような社会ダーウィニズムが勝利を収めることはない。全知者であるディケンズは、道徳的空間を作り出し異なる結末を用意するのである。ディケンズの作り出す道徳的空間における重要な言葉として、自己 (self) という言葉がある。グリブルは、1850年代後半から1860年代にかけてディケンズの自己に関する考えは、サムエル・スマイルズの *Self-Help: with Illustrations of Character, Conduct and Perseverance* (1859) の影響を受けていると考え、その例として *Our Mutual Friend* のブラドリー・ヘッドストンと彼の生徒であるチャーリー・ヘクサムを挙げている。一方で、リトル・ネルに始まり、フローレンス・ドンビー、エスター・サ

マーソン、エイミー・ドリットに見られる無私（selflessness）が道徳的空間を生み出していると指摘している。無私とは、イエス＝キリストや彼の説く隣人愛にもつながる概念である。黄金律「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（Matthew 7: 12）がディケンズのキリスト教の本質であるとししば言われている。この黄金律が重要であることは、*The Life of Our Lord* の最後の部分の子供たちへの教えにも窺える。グリプルは、ディケンズの場合の物語構築と自己の関係について、ミハイル・バフチンとポール・リクルのアイデアと共通する部分を見出しているが、ディケンズ特有の倫理空間において自己の問題があるとしている。

第2章「はじめに——ピクウィックからスクルージへ」でグリプルは、ディケンズの *The Pickwick Papers* と *The Christmas Carol* に見られる聖書に基づく語りについて述べている。グリプルは、*The Pickwick Papers* において *The Christmas Carol* と同じように、クリスマスのお祭り騒ぎが聖書に基づく語り内に内在する道徳的秩序を転覆させてしまう要素があることを指摘しているが、一方で、*The Pickwick Papers* の冒頭部分の「暗闇を照らす光」に創世記の光の到来（Genesis 1: 3）を読み取っている。ところで、作品の出だしの部分を見ると、神意にも聖書にも無縁に見えるピクウィックが描かれている。旅行・調査、風俗習慣の観察、冒険の報告、地方の風景とそこで引き起こされる物語と記録をロンドンのピクウィック・クラブに提出することを要求されているピクウィック・クラブの会長のピクウィック氏は、文化の観察者としての役割を担わされている。ピクウィック氏は、第16章では寄宿女学校の校庭へ入りこんでしまったり、第22章では宿屋で寝室を間違えて独身女性の寝室へ入りこんでしまったり滑稽な失敗をしないで。彼は、ついには裁判の不当な判決に抗議してフリート監獄に入ってしまう。ピクウィック氏が意気消沈と気の滅入りを感ずるフリート監獄をグリプルは、「ミルトンの地獄」と表現しているが、ユダヤ・キリスト教的語りの中では、特にクリスマスを扱う部分が重要であると主張している。

グリプルは、第29章老夫人が話す「墓掘り男を盗み去った鬼たちの話」が *A Christmas Carol* の元となっていることを指摘している。生まれ変わった人間になったゲイブリエル・グラブが、自己を投影した「他我」（alter ego）であるマーレイの幽霊の導きによって自らを省みて生まれ変わるスクルージになったと考えられるのだ。ピーター・クラチットが読む本の中の「おさなごをとって、彼らの中に置く」という部分は、マルコによる福音書9章に基づいている。第37節でイエス＝キリストが言う言葉、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」（Mark 9: 37）

が作品のアイデアの中心にある。そのことの他にグリブルは、全存在の本質的部分を形作る子供時代の記憶ということに関して、ディケンズがワーズワースの考えに近い考えを作品に反映させていることを見て取っている。

第3章『『ドンビー父子商会』——波は何をいつも語っているか』でグリブルは、スクルージと同じようにドンビー氏もまた、経済人すなわちホモ・エコノミクスであることを指摘している。ホモ・エコノミクスとは、もっぱら経済的合理性のみに基づいて個人主義的に行動すると想定した人間像のことである。作品の出だしの部分、すなわち、「地球はドンビー父子商会が商売をするために創造され、太陽と月は彼らに光を与えるため作られてた。川と海は、彼らの船を浮かべるため形作られた、虹は彼らに好天を約束し、風は彼らの投機に有利か不利かで吹き、星や惑星は、彼らが中心である神聖なシステムを保つため軌道を回った」という部分に、グリブルは、自然の中に神を崇拝するというヘブライ人の伝統のパロディを感じている。グリブルは、ウォルター・ゲイと海との関係に *David Copperfield* のペゴティー一家と海との関係に似た運命と関わる海の働きに注目している。自然など構わずに教育を行うプリンパー博士の寄宿学校で教育を受けたポールは早世してしまう。ドンビー氏に救いを与えるのは、彼に軽視されてきたフローレンスであった。グリブルは、フローレンスが受動的とは程遠く、不自然なほど能動的に父親の心を理解しようと努め、父親の愛を得ようとしている点を指摘している。また作品に神意に関するプロットがあるとすれば、自然とはどのようなものかということに関して存在していると指摘している。

第4章『『荒涼館』——審判を待ち望んで』において、グリブルは、*Bleak House* におけるユダヤ・キリスト教的語りを検証している。この作品においては、社会的には大法官をめぐる描写が人間の罪深さを表している一方で、個人的にはエスター・サマーソンの出生の秘密に関係のあるデッドロック夫人の罪深さをめぐる語りがある。第3章で情け容赦のない養母は、エスタが「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」(John 8: 7) という部分を朗読しているとき、「だから目を覚ましていなさい。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは全ての人に言うのだ」(Mark 13: 35-36) と言う。グリブルは、この部分をキリスト教的な深い同情と預言的な警告を表している部分であり、テキストを読む際、重要な部分であると考えている。一方で、孤児を見捨てることのないジャンディス氏に関しては、エスタの地上における天の父と読めることを指摘している。

第5章『『リトル・ドリット』と王国の到来』において、グリブルは、*Little Dorrit* のプロットにおいて新約聖書が重要であることを指摘している。第3章に

おける陰鬱な日曜日について、アーサーは、「新約聖書で語られるイエスの情け深い愛など偶像崇拜者の中で育ったのと同じくらいにしか分かっていなかったのだ」と思い出す。彼を育てたクレナム夫人の宗教は、厳格すぎて精神の自由を奪ってしまうようなものであった。アーサーの家庭の外に目を向けると、マードル氏は、拝金主義に毒されている。「新約聖書を書き変えて天国に入っただけで天国に入ってしまった金持ち」と表現されるマードルが天国に程遠い人物であることは明らかである。グリブルは、エイミーにキリストのような側面があることと子供のような点に注目し、エイミーが拝金主義とは無縁で天国にふさわしい人物であること、作品世界とアーサーに救いをもたらす人物であることを指摘している。

第6章「最終的な事柄——あがない、復活、そして永遠の生命」において、グリブルは、*Little Dorrit* の監禁状態とあがないが *Great Expectations* においても見られると述べている。かつて囚人であったマグウィッチが作った金で紳士階級の仲間入りをしたピップは、愛情深い育ての父親である鍛冶屋のジョーを疎んじる心を持ってしまうが、故郷に戻ってジョーに赦しを請う。グリブルは、このことに放蕩息子の話を見て取っている。*Our Mutual Friend* においては、ノアの箱舟の物語が見られることに注目し、父親と舟で仕事をしていたりジエが愛情深い性質のゆえに報われるというプロットがあると指摘している。さらに、*A Tale of Two Cities* においてカートンが思い出す父親の墓の前で読み上げられた復活と永遠の生命に関する言葉、すなわち、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は誰も、決して死ぬことはない」(John 11: 25-26) が *Little Dorrit* と *Our Mutual Friend* においても重要であると注意を促している。グリブルは、*Our Mutual Friend* においてジョニーの葬式に祈祷書の言葉を読み上げるフランク・ミルヴィ師こそディケンズの理想とする聖職者であると考えている。「彼はただ人間の限界内で、知れば知るほど全知の神が知っておられることについておぼろげながら想像することができるだけであった」と表現されるミルヴィ師には、憐れみだけでなく、へりくだりの気持ちは見られるのである。

本書は、いろいろと啓発される部分の多い書物である。また著者の該博な聖書に関する知識が窺える。それによって著者は、聖書と関係のある部分である点と点を線で結びつけ、ディケンズの意図に迫ろうとしている。少し気がかりな点があるとすれば、論考の出だしで難解な部分があるという点である。物語構築と自己の関係について述べる際にミハイル・バフチンとポール・リクールのアイディアを紹介する際に、もう少し詳細に説明した方が両者の思想を知らない読者にとっては読み易いかもしれない。バフチンの『作者と主人公』やリクールの『他

者のような自己自身』などを用いて説明しておけば、初心者でも理解し易いかもしれない。また、ディケンズの作品を聖書に基づいて説明していく際に、ジョージ・エリオットやブロンテ姉妹の例を挙げると、読者は理解しやすいかもしれない。さらに、キリスト教において寛容であることの重要性について述べる際に、*American Notes* や *Pictures from Italy* などの旅行記についての言及があれば、さらに説得力を増したのではないかとも思われるが、著者がディケンズの小説に限定して論を進める腹つもりであったかもしれないので批判は差し控えたい。著者の学識に学ぶ所が多く、聖書に基づく解釈の可能性を感じさせる一冊であることは間違いない。



Troy J. BASSETT,
The Rise and Fall of the Victorian Three-Volume Novel
(xvii + 256 頁, Palgrave Macmillan, 2020 年,
本体価格 \$84.99)
ISBN : 9783030319250

(評) 甲斐 清高
Kiyotaka KAI

ヴィクトリア朝小説の出版形態を代表するものとして、すぐに頭に浮かぶのは三巻本かもしれない。この複数巻形式が当時のイギリスで流行し、衰退していった状況にも、いろいろな要因があるのだろう。本書 *The Rise and Fall of the Victorian Three-Volume Novel* の著者 Troy J. Bassett によれば、三巻本という形式自体に対する学術的研究は必ずしも十分ではなく、いくつかある研究は、もっぱら文学的な観点から三巻本小説を論じていたり、また、現実の数字ではなく、いくつかのエピソードを基にしていたりと、三巻本小説の全体像を明らかにしていない。本書は、三巻本という形式が文学的、そして経済的産物であるという観点から、数量的データ、出版社の事情、さらには貸本業者の事情を考慮に入れ、《ヴィクトリア朝三巻本小説の盛衰》の歴史を語り直そうという試みである。

イギリス出版史を専門とする著者は、ヴィクトリア朝に出版された小説を網羅しようと試みる膨大なデータベース *At the Circulating Library: A Database of Victorian Fiction* を編纂している。これは、ヴィクトリア朝に出版された小説のタイトル、作者、判型、価格、出版社、それに、作品が雑誌等で連載された場合はその情報も加えてリストアップしたものであり、現在もさらに充実、拡張がはかられている。Victorian Research Web に組み入れられているこの充実したデータベースは、ヴィクトリア朝小説を研究する人にとって、非常に有用で価値があるものだろう。そこに集積されているデータが、本書の重要な基礎をなしていることは言うまでもない。

著者が説明するところでは、ヴィクトリア朝三巻本小説に関する通説は、以下のようになる。大部分の新作小説が発表される形式であった三巻本は非常に高価であり（3冊セットで31シリング6ペンスが標準だった）、かなり裕福な人でなければ購入できず、大部分の読者は貸本屋を利用して新作に触れるのが普通だった。出版社は貸本業者による大量購入を当てにして、高い値段のまま三巻本を作

り続けるというシステムができあがる。貸本業者——特に二大業者のミュージーズ (Mudie's Select Library) と W・H・スミス (W. H. Smith and Son's Subscription Library) —— の隆盛のおかげで、イギリスは、新刊本を買うのではなく、借りて読む社会となり、こうした状況を憂う人たちからは、その象徴となる三巻本小説が批判の対象となる。また、この形式と貸本業者は、作品の長さだけでなく、内容にさえ規制を及ぼし、イギリス小説の発展を阻害している、といった非難も受ける。こうして、三巻本という形式は多方面からの批判にさらされて廃れていき、ついには、1894年、二大貸本業者自身が出版社に最終通告書を送る——今後、三巻本は1セット4シリング以下でしか購入しない、そして、三巻本は1年以内に廉価版で再販しないでもらいたい、といった内容の通告である。これを機に、事実上、三巻本小説の時代が終わった。こうした見方が間違っているわけではないが、本書はこれを、数量的データ、出版社の帳簿、貸本業者の帳簿を参照しながら検証していく。

イントロダクションとなる第1章では、これまでのイギリス出版史におけるヴィクトリア朝三巻本小説に関する学術研究の経緯がまとめられている。1970年代よりも前の研究では、三巻本小説が言及されることがあるものの、その形式自体に焦点が当たることは稀であり、正確な数量データを扱ったものは見られなかったが、1970年代、John Sutherlandが、出版史における実証的な研究の必要性を訴えたあと、以前から見られた理論的なアプローチに加えて、小説の執筆、出版、流通、消費といった実際的な見地に立って、ヴィクトリア朝小説を捉える研究が増えていく。こうした近年の研究を踏まえうえて、ヴィクトリア朝三巻本小説の盛衰を記述する、という本書の方針が、この序文の中で述べられている。

本論の始まりとなる第2章は、主に著者の集積したデータを中心にして、ヴィクトリア朝の三巻本（および二巻本、四巻本）小説に関する量的データを、40ほどの表やグラフとともに示し、年ごとの作品の数、その作者（主に男女比および国籍）、出版社、雑誌等への連載などについて分析する。ここで、これまで必ずしも正しく認識されていなかった点がいくらか明らかになっている。例えば、1894年の貸本業者による最終通告までに、複数巻本という形態が、すでに時代遅れの代物として勢いを失ってきていたという見方があるが、実際のところ、1890年代になっても、多くの複数巻本は出版されていたという事実、そして、最終通告後も、数年は三巻本小説が出版されていたこともわかる。また、多くの出版社が複数巻本小説を出版しているにもかかわらず、全体的な出版点数で見ると、比較的少数の大手出版社が、複数巻本小説の出版を独占している傾向にある。それと同様に、多くの作家が複数巻本小説を書いているのだが、比較的少数の作家が、一人で多数の作品を提供し、三巻本小説全体の作品数の大部分を占めてい

る。なかでもマーガレット・オリファントは群を抜いていて、71冊もの複数巻本小説を書いている。オリファントやメアリー・エリザベス・ブラッドン、エレン・ウッドのような目立った作家の活躍のせいで、三巻本小説は女性によって多く書かれている、という見方をされることが多いが、この事実はデータによって裏付けられる。さらに、複数巻本小説の半分以上のタイトルが、雑誌等で連載されており、また、その多くは、出版前の連載であることも明らかになっている。

第3章では、ヴィクトリア朝をとおして三巻本小説の発行点数が二番目に多い出版社、リチャード・ベントリー（Richard Bentley）の出版記録を参照し、当時の出版市場の動向について論じる。ベントリーの帳簿についても、重要なデータとして徹底的に調査した結果、いくつかの点が見えてくる。例えば、ベントリーが三巻本小説として発行した作品で、赤字になったものは少なく、特に、後に廉価版等で再版することによって、利益を得ていた。また、ベントリーの刊行した三巻本小説も、女性作家の作品のほうが多い。女性作家への報酬が男性より少なかったという事実は認められず、むしろ女性作家のほうが高い報酬を得ていたという点については、多くの批評家が誤認していたと言える。

続く第4章は、三巻本小説の隆盛において、もうひとつの重要なプレーヤー、貸本業者に目を向ける。ヴィクトリア朝に繁栄した貸本業者のなかで、記録が十分に残っているのは、ミューディーズに次ぐ規模を持っていたW・H・スミスだけであり、著者はこの貸本業者の記録を総合的に調査して、三巻本小説に関わる貸本業者の実態、そして貸本業者が最終通告を出すに至った経緯を探ろうとする。第2章で示されたデータでは、1870年代と80年代が三巻本小説の最盛期であったとされるが、W・H・スミスが貸本業界に参入したのは1860年代であり、すでに三巻本小説と貸本屋との強い繋がりができていた。他の貸本業者と同じように、W・H・スミスも出版社から三巻本小説を割引価格で買い入れ、それを貸し出し、その後、古書として安値で販売する、という形で利益を上げていた。それが、93年から94年にかけて、貸本業の経営収支が落ち込む、という事態になるが、著者の分析によれば、三巻本小説の購入自体が経営不振を起こしたとは考えにくいという。

W・H・スミスがミューディーズと結託して出版社に最終通告を送った理由について、著者が推察するところでは、三巻本小説として発表された作品が、すぐに廉価版一巻本で再版されることが最大の要因であった。以前から出版社による再版は行われていたのだが、1890年代になると、再版される点数が増え、さらに、三巻本版の発売後、1年どころか、1,2カ月で廉価版を発行するようになった。そのような事態になると、貸本屋に、高価な三巻本を買い支えるメリットがなくなる、というわけだ。貸本業者による最終通告のあと、複数巻本という形式

自体にさして大きな利点があるわけでもなく、2, 3 年は一部の出版社が複数巻本小説を発行していたものの、ほぼ三巻本という形式は終わった。

「文学市場の脱独占」(‘De-monopolizing Literary Space’) と題された最終章、第 5 章は、新作小説を発表するフォーマットとして、三巻本の代わりとなるものとして、特に 6 シリンダー巻本小説を取り上げ、この新たな形式が、どのように市場を広げていったのかが論じられる。そして、一巻本が三巻本に取って代わり得る勢いをつけたとされる「3 つの瞬間」に焦点が当てられる。まず、R・L・ステイーヴンソンの『宝島』(*Treasure Island*) の出版、次にジョージ・ムーアの『芸術家の妻』(*A Mummer's Wife*) の出版と彼の検閲に対する戦い、そして最後にジェローム・K・ジェロームの『ボートの三人男』(*Three Men in a Boat*) 出版に関わる出版社によるシリーズ物の流行である。この章では比較的データへの言及が少なく、個々の作品や作家についての記述が多くなっている。

文学的な評判を得ていたにもかかわらず、文学で生計を立てられずにいたステイーヴンソンは、立派な三巻本小説、あるいは貸本屋小説を書くことによって、職業小説家としてのステータスを確保したいと考えていた。しかし、三巻本小説を書くには至らず、少年向けの冒険物語『宝島』を雑誌で連載したのち、1883 年、これを比較的安価な一巻本として出版したところ、大人(の男性)の読者も読むべき作品として評価され、大きな成功を収めた。少年向けの物語から始まった「ニューロマンス」の 5 シリンダー巻本という形式に、ライダー・ハガードなどの有力な作家が次々と追随し、「家庭的リアリズム」の傾向が強い三巻本小説・貸本屋小説という形式から解放されるひとつの道筋を作ったと言える。

ステイーヴンソンは、結局、三巻本小説を一度も書くことはなかったのに対し、ジョージ・ムーアは 1883 年に最初の小説を標準的な三巻本形式で出版したが、貸本屋ミュージーズに内容が「不道德」とであると判断され、少数しか買わず取ってもらえなかった。貸本業者からの購買がなければ、三巻本の出版は成り立たず、ムーア本人がかなりの損失を被ることとなった。その後、ムーアはミュージーズによる検閲を厳しく攻撃する。彼は比較的マイナーな出版社ヴィゼテリー(Vizetelly) から、安価な一巻本小説『芸術家の妻』を売り出すが、この形式そのものが三巻本貸本屋小説に対抗しているのに加え、その内容も、貸本屋小説の検閲が文学におけるリアリズムを阻害するばかりか、読者の道德にかえって悪影響を及ぼすことを訴えるものとなっている。ムーアの検閲に対する戦いは、三巻本小説と貸本屋のシステムに対して多少とも打撃を与えたことは間違いない。

もうひとつ、1880 年代から新たな成功を見た出版社のシリーズ物のなかで、新作小説が廉価一巻本で発表されるようになったのも、三巻本小説の終焉に寄与した。まず、地方の出版社アロースミス(Arrowsmith) が、失敗続きだったクリ

スマス年報の第3号で、ヒュー・コンウェイ（本名フレデリック・ファークス）の『回想』（*Called Back*）を掲載したところ、これが大ヒットする。アロースミスは、これを第1作として、「アロースミス・ブリストル叢書」の発行を始める。1シリング、あるいは1シリング6ペンスという非常に安価な一巻本は大成功を収め、新作小説が次々とこのシリーズで発表されるようになる。アロースミスはさらに、1冊2シリングのシリーズ、また、3シリング6ペンスのシリーズも発行する。おそらく先見の明のあったジェローム・K・ジェロームは、1889年、『ボートの三人男』をアロースミスの3シリング6ペンスのシリーズから出版し、その成功によって、貸本業者に頼る三巻本に十分対抗できるものであると証明した。また、1890年代のアンウィンの発行した「スードニム叢書」（Pseudonym Library）が、文字通り、偽名を用いた作者の新作を、1シリング5ペンス、あるいは2ペンスで発売し、これも大きく売り上げを伸ばした。アロースミスやアンウィンに倣って、他の出版社も次々とシリーズものを発行し、本を借りるのではなく、本を買う市場が、イギリスに開拓された。

このように、最終章は、高価な三巻本小説、貸本屋小説が終焉を迎えるまえ、それにとって代わる一巻本小説の市場がすでにできあがっていたという状況を、いくつかの具体的な事情をもとに描き出そうとしている。しかし、イントロダクションにおいて、先行研究がエピソードベースで、十分に実証的ではない、と批判していることを考えると、この章は、少し恣意的な事象の選択があるのではないかと訝しんでしまう。ただし、私にとっては、この章が圧倒的に面白かった。

おそらく、数量的データを全面的に押し出した第2章が、本書の最もオリジナリティの見られる箇所なのだと思うのだが、同時に、最も面白みに欠ける章でもある。イギリス出版史の専門家にとっては、おそらく細かい数字に価値があるのだろうが、私には大きな発見があるようには思えない。著者は、データを示しながら、恣意的な解釈を避けようとする慎重な態度を取っているように見受けられるが、そのせいか、先行研究を超えた発見が見えてこない。数量データの重要性は理解できるが、三巻本小説という限られたテーマのなかで、もう少し何か強めの論考があっても良かったのではないかと思う。ただ、もちろん、ヴィクトリア朝の出版史の研究において、著者のデータベースと合わせて、この著作が重要な資料であることは間違いないだろう。



山本史郎，
翻訳の授業——東京大学最終講義
Shiro YAMAMOTO, *Lecture on Translation:*
The Valedictory Lecture at the University of Tokyo
(208 頁，朝日選書，2020 年，
本体価格 869 円)
ISBN : 9784022950680

(評) 向井 秀忠
Hidetada MUKAI

外国文学を読むようになったのがいつかは定かではないが、小学生の頃にはホームズやルパンの物語を読みまくっていた記憶がある。もちろん、子ども向けの翻訳。図書カードがどんどん埋まっていく喜びもあったが、それ以上に物語の展開が面白かったことをよく覚えている。以後、推理小説や SF 小説などを読むようになり、やがてジャンルを問わず小説を楽しむようになっていった。その際に読むのはやっぱり翻訳。やがて、大学に入り、少しずつ英語で作品を読むことができるようになってきたが（そのはずと信じているのだが…），それでもやっぱり外国文学を翻訳でたくさん読み続けてきた。外国文学への導き手としての翻訳は必要不可欠なものであり、今でもそうである。

最近では、原書との比較ではなく、同じ作品の翻訳を比較しながら読むことを楽しむようにもなったが、時どき、「同じ作品なのに、なんだか印象が違うな…」と感ずることがある。小説だけではなく、詩や演劇やエッセイ、それに研究書など、たくさんの翻訳書を読んできたが、意外に、翻訳そのものについて深く考えることはなかった。本書は、そんなただ翻訳を楽しむだけだった読者の私を、翻訳について考えることへと誘ってくれるものであった。

本書は、次の 8 つの章から成り立っている。

- ・第 1 章 『雪国の謎』— 人間の思考はすべて「翻訳」だ—
- ・第 2 章 「同化翻訳」と「異化翻訳」— アメリカの翻訳者には顔がない—
- ・第 3 章 視点と語り— 文化圧とは何か—
- ・第 4 章 実用と文学のはざま— AI はなぜ「通訳」を殺すのか—
- ・第 5 章 岩野泡鳴と直訳擁護論— 読めない翻訳をなぜ作ろうとするのか—
- ・第 6 章 翻訳家の仕事— そこまでやるのか『ホビット』!—

- ・第7章 翻訳と文体 — どうやって「似せる」か —
- ・第8章 翻訳革命 — 新たな翻訳論への旅立ち —

第1章は、川端康成の『雪国』の有名な書き出しである「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった」の英伊仏独語の翻訳を比較しながら、文学作品等の翻訳において、(a)一つの解釈例、具体化、(b)逐語訳、(c)私的表現の相当物という3種類の方法があることが説明される。この中でも特に「夜の底が白くなった」の部分の訳し方の違いを通して、日本語の表現が各国語によって異なるニュアンスで理解されていることが説明される。この言語ごとの違いが生じるのは、表現の「曖昧性」、つまり「表現の抽象性」にあり、「『夜』と『底』という本来結びつかない語を無理やり接続することによって、風景から具体性を奪い、抽象化した表現を作り出して」いるからだと説明される。この抽象的にしか理解できない言葉で表現された風景を、それぞれの言語が「具体化」しているからこそ、このような違いが出てくるのだという。なるほど、翻訳という行為が、単に言語の移し替えだけではなく、翻訳される言葉の文化的な背景に影響を受けることがよく理解できた。

第2章においては、三島由紀夫の短編「新聞紙^{がみ}」、紫式部の『源氏物語』、芥川龍之介の「羅生門」などの英訳を用いながら「同化翻訳」と「異化翻訳」について具体的に説明される。ローレンス・ヴェヌティによれば、「同化翻訳」とは「最初から英米人が書いたかのように読める」ものであり、「異化翻訳」は「明らかに翻訳であることが分かるように、オリジナルの言語の言い回しや構文が見えるように訳す」ものとされている。これは単に翻訳上の姿勢の問題にとどまらず、前者を求めることに「文化的な帝国主義」的姿勢を読み取ることができ、後者こそ翻訳が目指すべき方向性であるとされていることは興味深い。「異化翻訳」の意義は、あえて原作の文章の行文をいかすことで、文と文のつながりの不自然さを読者に意識させ、異文化の存在を意識させることにあると説明される。至極納得できる指摘であり、翻訳という行為が異文化理解であるということがよくわかる。

第3章では、視点と語りの点から、翻訳が「文化の違い」とどのように関わっているのかについて説明される。具体的には、『オリエント急行殺人事件』の三谷幸喜によるテレビドラマにおける置き替えの工夫、大河ファンタジーの『精霊の守り人』の日本語の原作と英語の翻訳における登場人物を紹介する個所の論理性の比較、村上春樹の『ノルウェイの森』の原作の日本語に含まれる皮肉が英訳で消えてしまっている点などが具体的に紹介される。そして、この章の後半では、谷崎潤一郎の『蓼食う虫』の英訳について、理路整然と文章をつなぐと原文の「ねちねちとした印象」が消えてしまうことに加え、語りの視点の問題が指摘さ

れる。日本語の原作では視点がころころ転換するのに対し、英訳では全体が平板化された第三者の視点から描かれているという。その理由として、イギリスにおいて19世紀半ば以降の小説の考え方、つまり作者は作品の中では気配を消す（しゃべりすぎない）べきであることが主流となっているからではないか、と説明されている。最後に、ルース・レンデルの *Burning End* の一場面を用いて、視点の移動を意識した日本語による翻訳の例が提示され、非常に説得力のある説明になっている。

第4章は、機関車をめぐる3つの英文（英語版ウィキペディア、一般教養書、チャールズ・ディケンズの『ドンビー父子』）を用いながら、「実用テキスト」と「文学テキスト」における文章の読み方の違いについての説明から始まる。これらの文章を比較しながら、著者が考える「文学テキスト」とは、「表現の形、文の姿、すなわち広い意味での『文体』が重要な意味をもっているテキスト」のことであると説明される。AIがさらに進化することにより、コンピューターによる翻訳は書かれている事実を文字通り正確に伝えることができるようになるだろうが（＝「実用テキストの翻訳」）、言葉の裏側の意味（皮肉やジョークなど）を理解して翻訳することはできないという説明は説得的である。使われている言葉が持っている社会的・文化的・歴史的な奥行きまでも理解することができるAIを開発するのは難しいのではないだろうか。さらに、著者がディケンズの『オリヴァー・ツイスト』を翻訳した際、フェイギンの最後の場面における‘firmament’という言葉は、「空」ではなく「蒼穹」と翻訳することで、クリストファー・マーロウの『ファウストゥス博士』とのつながりを日本語の読者にも意識させたという点は興味深いものであった。

第5章では、岩野泡鳴によるアーサー・シモンズの『象徴派の文学運動』の翻訳を検証することから始められる。岩野の翻訳からは、(a) 英語の文章の（従属節などの）順番を維持する、(b) イディオム的な英語表現は「逐語訳」すべき、という翻訳の姿勢についての2つの主張が読み取れる。これを通して、岩野が取っている原文の言語を重視する「起点言語志向（source-oriented）」と、それとは正反対のものとして、翻訳される言語に重点を置いた「目標言語志向（target-oriented）」があると説明される。引き続き、シェイクスピアの『ハムレット』の有名な一節“To be or not to be, —that is the question.”の日本語翻訳のあり方について触れた後、ギヤスケル夫人の『克蘭フォード』の野上豊一郎訳を引くことで、「西洋のものを西洋のものらしく」するために日本語としての自然さを犠牲にしていることが指摘される。続いて、聖書翻訳の「行間逐語訳」の例を用いながら、信仰にこそ「逐語訳」に対する強い欲求があったことが紹介され、引き続き、ヴォルター・ベンヤミンが「翻訳者の使命」において逐語訳の必要性を

論じていたことが紹介される。これは「純粹言語」の議論へと結びつき、その先にバベルの塔の物語で人間が失った「世界中の様々な言語の意味を統合した、一つの巨大な言語」を取り戻す志向性が見出され、そこに翻訳の役割があると理解することができるという。そして、岩野（「日本語の英語化」）とベンヤミン（「純粹言語」）の例から、著者は「深い崇拜は逐語訳を要請する」と結論づける。この章の最後に、日本における「直訳」とヴェヌティの「異化翻訳」とが根本的に相違するものであることが説明されている。

第6章において、著者が翻訳したJ・R・R・トールキンの『ホビット』における作業を紹介しながら、翻訳家の仕事について説明される。まず、主人公が巻き込まれる「冒険」（＝‘burglar」強盗）と「格式」（＝ジェントルマン）の対比、イギリスの階級ごとの言葉の差異、主人公のジョークのユーモア、物語に挿入された詩の特徴、効果的に使用されている頭韻など、どのように日本語に置き替えられるのが次々と具体例を用いながら説明される。的確な具体例があるため、非常にわかりやすい。そして、翻訳とは「何らかのかたちで原作に『似たもの』を作ること」だとする考え、つまり、「原作の様々な要素を『再現』することである」とまとめられる。そのためには、「原作の要素を限りなく多く写す」だけでなく、「もっとも目立つ特徴に注目する」ことを心がけることが肝要とされる。ここでの、「書かれたもの」ではなく、「文字として表現される前に存在していた意味」こそ重視するべきであるという指摘は深い。この「意味空間」の再現が翻訳の目標となる。最後に、ロマン・ヤコブソンの「言語内翻訳」「言語間翻訳」「記号法翻訳」の分類を踏まえ、「意味空間」を出発点とすれば、この3つともが同じ土台から出発できるようになることが指摘されていることが非常に示唆的である。

第7章では、ギヤスケル夫人の『クランフォード』を実例に翻訳分析が行われる。4つの具体的な翻訳スタイル（逐語訳、「意味空間」からの掘り起こし、語り手の視点の明確化、現代日本の小説に近い文体）が示された後、引用個所の冒頭の‘I saw, I imitated, I survive!’のセンテンスの訳し方に注目する。これは、ローマの将軍カエサルの言葉（‘Veni, vedi, vici’「来た、見た、勝った」）をもとにしたパロディであることを念頭に日本語に置き替えることが重要と指摘される。「実用テキスト」ではなく「文学テキスト」を翻訳することの難しさがこの点にあるが、面白さでもあることがよくわかる。このほか、「文体を再現する」ことについて、ヘンリー・フィールドイングの『トム・ジョーンズ』の朱牟田夏雄訳での擬似英雄詩（mock heroic）の日本語への置き替えの試み、J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』の野崎孝訳と村上春樹訳における若者ことばの日本語置換の試み、そしてマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの

冒けん』における柴田元幸訳の俗語の訳し方などが紹介される。さらに、森鷗外の翻訳についての考え方に触れ、L・M・モンゴメリの『赤毛のアン』の第1章の冒頭部分を筆者がどう翻訳したのかが紹介される。まず、モンゴメリが想像した風景を自分の中で再現し、使われている言葉を分析することを通して小川が擬人化されているという特徴を意識し、そして「比較的に重要度の低い特徴はバッサリと切り捨てる思い切り」も必要であるとされる。

最後の第8章はこの本の全体をまとめたものとなっている。まず、「実用テキスト」の例としてロープの結び方の説明を用いながら、「翻訳は現実世界との対応ができていのかどうかで成否が決まる」ことが示される。つまり、「翻訳の正しさは原文とは無関係で、百パーセント現実との照合で決まる」という刺激的な結論に至ることになるという。続いて、「文学テキスト」はどうなのかについて、ケネス・グレアムの『たのしい川べ』を例に考えていく。一見するとニュートラルに語られているように読める箇所も、虚栄心の塊のようなヒキガエルの性格を意識することで、「proper」や「graciously」のような表現に彼の偉ぶった気持ちや階級的優越感が読み取れることになるという。翻訳する際には、もちろん、これらのことを反映させなくてはならず、そのために、場合によっては、翻訳する作業の中で原作を書き替えたり、書き足したりすることさえある。つまり、「文学テキスト」においても、翻訳とは、「翻訳テキストの成否は原テキストが描いている世界と対応しているかどうかで決まる」ものであり、「原テキストの文法的・語彙的特徴はまったく無視してよい」のではないかという過激な結論となっている。

ここから先がさらに刺激的な議論となっていく。モンゴメリの『赤毛のアン』の一節を用いながら、原作の情動的な意味の最小単位化、そしてそれを組み合わせながら翻訳する言語へと再現する中での接続表現の用い方について論じられる。この際の、英語の接続表現（関係代名詞の *that* と接続詞の *until*）にこだわることの意味のなさが示される。つまり、原テキストそのものを忠実に日本語化することではなく、作者のモンゴメリが頭の中で想像していた世界を日本語を使って忠実に再現することこそ、翻訳が試みることとされる。この章の最後において、新たな文学作品の翻訳モデルとして5つの事柄が示されるが、是非、これらについては本書を通して理解して欲しい。ここでの指摘が、著者が言っているように、「翻訳研究が、『直訳／意訳二元論』という洋の東西200年に及ぶ歴史的しがらみを清算」した上で展開される「新たな文学作品の翻訳モデル」であるという考えには説得力がある。まさに「翻訳革命」であり、「新たな翻訳論への旅立ち」のひとつが示されていて、読んでいて一番面白かった章であった。

本書を読むことで、これまで英語を含む外国文学を読みながら感じてきたモヤ

モヤの多くがスッキリしたように感じた。翻訳することは、単に英語を日本語に訳すことでなく、できるだけ自然な日本語に置き替えることだけでもない。原作者が自分の頭の中で描こうとしていたことを正確に読み解き、日本語を使ってできるだけ正確に再構築することである。その際には日本語に特有の感覚を優先し、英語の表現に正確に対応しない場合もあり得る。そんなすぐれた翻訳を生み出す秘訣を理解することができた。

最後にひと言を。本書第4章で引用されているように、ディケンズの『オリヴァー・ツイスト』では、ユダヤ人のフェイギンはしばしば名前ではなく‘the Jew’と呼ばれている（‘—all looks were fixed upon one man—the Jew.’）が、ここに当時のイギリス社会のユダヤ人に対する偏見を読み取ることができるという。では、例に挙げられた翻訳では「誰もが一人の男、フェイギンにじっと目をそそいでいる」とされているが、当時の社会で共有されていたこの悪意を日本語ではどのように翻訳（＝表現）すればいいのだろうか。読後、このような点にこそ、翻訳という行為の深みと難しさ、そして面白さを感じることができるようになった。それにしても、このような授業を受ける機会を得た人たちがうらやましい。

中から見たブレグジット

2019～20 年在外研究報告

Brexit from the Inside: 2019-20 Sabbatical Report

三宅 敦子

Atsuko MIYAKE

私は2019年4月から2020年3月まで在外研究員として英国レスター大学に在籍する機会を得た。この間英国はEUを離脱、帰国直前にはコロナ禍に見舞われることになった。本稿では私が約一年間の英国滞在中に体験したブレグジットに関わる日常の出来事について書き記すことで、ブレグジットに揺れた英国の生活を振り返りブレグジットの要因を考察してみたい。結論から述べるとブレグジットとは、しばしば日本の報道で述べられるようなEUからの移民に職を奪われることを恐れた英国国民の選択によるEUからの離脱のみを意味するのではなく、英国国民が直面していたもっと一般的な社会変化に対する漠然とした不満の表明だったのではないかという考察である。

私の所属先の日本の大学では在外研究は出発年度の2年前の年度末に議決される。したがって2019年4月に開始する私の在外研究は2017年3月に決定した。当時の私はまだ気づいてい

なかったのだが、同時期に英国のEU離脱手続きが開始されていた。そしてそのことが私の在外研究計画と実施に大きな影響を与えることになった。当初はロンドンでの在外研究を計画しており2017年4月から受け入れ先の大学を探し始めたのだが、3ヶ月ほど経つと2008～09年の在外研究時と比較して現地の大学の様子が大きく異なることに気がついた。私のような名もない在外研究員を受け入れることができる大学とできない大学に分かれており、例えばオックスフォード大学のあるコレッジのHPでは、現地の大学が夏休みに入る5月頃ではなく英国の学年暦にしたがった秋に渡英するのが望ましいという但し書きが掲載されていた。ロンドンのある大学の教授にメールで受け入れの打診をしたところ、その教授自身がアメリカに在外研究に出ており（結局この教授はアメリカの大学に転籍した）残念ながら私の渡英時にはロンドンにいないのでと、ロンドンに

いるご自身の同僚にメールを転送してくれた。これらの出来事と同時に英国のEU離脱関連ニュースを日本でも目にするが増えたのだと思う。この時点で私は何かがおかしいと思い始めた。

この気づきが私の在外研究先の選択に大きな影響を与えることになった。幸いにも、ちょうどその頃私が所属する日本の大学の同僚が在外研究でレスター大学に滞在していた。レスター大学には私も学会でお目にかかったことがある親日家の名誉教授もいらっしやうり、偶然ではあるが25年ほど前のMA留学時のコースメイトがレスター大学ヴィクトリア朝研究センター長を務めていた。既に顔見知りであれば在外研究員として受け入れて頂く可能性も高まるうえ、万一何か予期せぬ事が起きたとき、知り合いがいる大学の方が安全だと考えた。そこで現地滞在中の同僚教員を通して私の受け入れを打診したところ、元コースメイトの教授が快諾してくれたので、レスター大学に受け入れをお願いすることにした。

この決断は吉と出た。というのは、後日判明したことなのだが、私が在外研究先を探していた頃英国の在外研究員制度が変更となり、在外研究員も移民としてカウントされるようになったため、英国の大学はこの制度で在外研究員を受け入れる大学と受け入れない大学に分かれ、かつ各大学に受け入れ人数の割り当てが設けられるようになったからである。そのため出発はま

だずいぶん先であったが、すぐに受け入れの手続きを開始してもらうことになり、2018年2月にはレスター大学での受け入れが認められた。

こうして出発前にはほんやりとしか見えなかったブレグジットの影響は、2018年12月に出発に向けた準備をする中でさらに明瞭となった。私が申請するヴィザは前回の在外研究で申請したアカデミック・ヴィザではなく労働ヴィザであり、書類上私は日本の所属大学から給与（この額は労働を目的とした英国への移民の最低労働賃金をクリアしている必要があった）をもらい、レスター大学で研究という労働に従事する形式になっていた。そのためにレスター大学人事課とのやり取りが必要だった。ヴィザの申請に必要な書類にも大幅な変更があり、銀行口座の書類など日本語で書かれた文書はすべて提出前に英国政府が認める特定の日本の翻訳会社に翻訳してもらいかつ証明書を付けてもらう必要があった。レスター大学人事課の説明によると、大学は私を「監視 (monitor)」しなければならない。具体的には欠勤などの情報は逐一ホスト教授に連絡し、その連絡は人事課を通して最終的には英国政府の入国管理担当部署に届けられるというシステムになっていた。このため入国日の決定なども厳密に考慮しなければならないし、入国後に滞在許可書として常時携帯が必要なIDカードを受け取る現地の郵便局までヴィザ申請時点で決定しなければならない。

こうしてハードルが高まったヴィザ申請を無事クリアし、幸運にも当初の予定であった2019年3月29日のEU離脱が秋に延期となったことで、私は2019年4月1日に無事英国に入国することができた。しかしここからさらなる困難が私を待ち受けていた。膨大な数の移民が英国内に流入していたことや、経済的に困窮した移民には住宅手当のようなベネフィットが出るらしいのだが、そうした移民の中に自分が借りた借家に他の移民家族を部分的な又貸しのような形で不法に住まわせる人がいて、賃貸住宅に多大なダメージが発生する事件などが頻繁に発生しており、移民の一人である私も厳格化された入居審査をクリアしなければならなかったのである。前回の在外研究都市はロンドンであったため日系不動産もあり、家探しにはさほど苦労はしなかった。しかしながらミッドランドの地方都市であるレスターでは、いい物件を持っているのはやはり地元の不動産屋である。セキュリティがしっかりしたアパートを借りるためには、英国滞在中の給与見込みを私の日本の所属大学が保証する証明書だけでは役に立たず（というのはこの手の証明書は偽造が簡単だし、そんなものは「口約束に過ぎない」から、らしい）、日本の所属大学から取り寄せた過去3ヶ月間の給与明細と、日本で住んでいた賃貸住宅の家賃の同期間の銀行振り込み記録を、私の過去の財政状況の実績を示す証拠として自分で英語に翻訳し、契

約する不動産会社に提出しなければならなかった。それだけではない。日本における私の雇用形態が正規の終身雇用であり、かつ英国滞在中私の雇用形態にも給与にも変更がないことを日本の所属大学の人事課に不動産管理会社専用の書類で証明してもらわなければならなかった。

落ち着いて生活できるようになると、こうした一連の厳しい手続きも納得できるようになった。というのは、何よりも英国が移民大国になっていたからである。冒頭でも言及したように、英国国民がEU離脱を選んだ理由は、移民に仕事を奪われることを懸念したからであるとよく言われる。しかし1年間近く現地生活してみると、むしろ仕事は既に奪われており、それにより元々英国に住んでいた人々の生活の質が劣化しているという現実が、僅差でのEU離脱決定に繋がったのではないかという印象を受けた。例えば新居が決まるまで私が宿泊していたホテルの受付カウンターには、タイからの移民の女性が働いていて、ホテルから新居に移動する際のタクシー手配を行ってくれた。英国ではこの手のタクシー手配サービスが自動音声化されているために、この女性は私の新住所を読み上げて入力してくれたのだが、彼女の英語の発音に癖があったために、タクシー会社の側では全く異なる住所が私の目的地として登録されていたのである。私はタクシーに乗った途端、恐ろしく遠方の郊外に連れて行かれそうに

なっていることに気づいた。慌ててタクシーの運転手に引き返すように依頼すると、その運転手は自分も移民として来たばかりで自分には道がわからないから案内しろと、到着後2週間しか経っていない私に言うのだった。そして新居に入居後、自宅用にWi-Fiを契約したところ次の問題が発生した。英国ではよくあることなので慌てることなく契約した携帯電話会社に電話をしたのだが、コールセンターがインドに置かれているらしく、電話口の向こうで担当者が何人変わっても非常に癖の強い英語しか聞こえてこないため、全く理解不能でコミュニケーションがうまくいかない。結局問題を解決するのに半月を要した。

その後知り合った現地の英国人に尋ねると、自分の生まれ育った国で母語を話しているのにその言葉が通じないことから生じるストレスは、程度に差はあれ彼らも体験しているようだった。レスターのシティー・センターでは英語を理解できないために仕事に就けず『ビッグ・イシュー』を販売しているイスラム系移民に対して、「英語を話せ (Speak English!)」と叫びながら唾棄している白人の若者を見たこともある。レスター大学の教員は、英語が出来ない留学生が増えていることや、高校教育の質の低下のために英国人であっても英語がきちんと書けず、エッセイ課題の添削が非常に大変になったと嘆いていた。2008年当時と比較すると、東欧系の移民も驚くほど増えていた。

東欧系の移民は特にイングランド北部地方に多いのか、北部地方を出発しレスターを経由するロンドン行きの電車に乗ると、曜日や時間帯によっては東欧系の言語しか聞こえてこないことがよくあった。そして英国はキャメロン政権時代に中国に接近したため、英国の大学では中国人留学生が急増していた。2020年1月16日付けのガーディアン紙の記事によれば、2019年の時点で英国の大学に留学する中国人は12万人を超えており、これはEU圏外からの留学生の実に三人に一人以上という計算になるのだそうだ。そして中国人留学生は概して裕福であり、特に博士課程の学生であれば卒業後の英国移住を見越して大学近隣の不動産を購入している。英国の高等教育では政府からの補助金の減額に伴い2015年に入学定員が事実上撤廃されており、レスター大学に限らず全英の大学において高等教育はビジネス化していた。この変化によって一人でも多くの留学生を呼び込むことが、多くの大学にとり急務となっていたのである。学部留学生は寮生活になるため、大学は寮をどんどん新築し授業料のみならず寮費でも利益を上げることが出来た。こうして学びを目的とした移民が激増したことは、当然英国の大学街の光景も変化させることになった。

さて、ここで大学内部の話に少し触れておこう。今回のヴィザは労働ヴィザであるために、過去の在外研究活動では主流だった授業の聴講は許可され

ていなかった。変わって私に求められたのは、現地の教員の研究活動に参加することだった。そのため様々な研究活動を通して現地の教員の会話の輪に入る機会に恵まれたことは大変新鮮な体験であり、この経験を通して現地の大学が置かれている問題点を間近で見ることが出来た。EU 離脱はレスター大学のみならず英国の大学全般に大きな影を投げかけていた。教員に EU 市民が増えていたこともあるが、なによりも英国の大学が EU の研究資金へのアクセス権を失う可能性があったからである。特に私がレスターに到着した時期は EU 離脱が 10 月に延期になったばかりで、EU 残留派にとってはまだ挽回のチャンスがあると考えられていたため、教員の集まりでは EU 離脱が話題に上ることがよくあった。大学では教員が取るべき姿勢は EU 離脱反対であるという暗黙の了解があったため、EU 残留派の教員は粘り強く戦うことの必要性を元気よく主張していた。とはいえ本音では EU 離脱を支持する教員もいて、こういう話題になると途端に何も話さなくなる教員もいた。大学を定年退職後に EU 離脱派としてメディアの取材に応じた人もいたらしく、私の到着直後はその人物が話題に上がっていた。彼らの本音は 2020 年 1 月末の EU 離脱後によりやく明らかになった。本当は EU 離脱派だった人たちはもう用心する必要がないと思ったのか、離脱の日には家族で祝杯を挙げたと思わず本音をこぼした。2019 年

の英国における EU 離脱という話題は、同時期のアメリカにおけるトランプ大統領支持と同様に、社会分断のテーマだったといえる。

大学では控えめでも EU 離脱について議論が交わされていたが、一般社会では EU 離脱の話題はタブーだった。1993-94 年にロータリー財団奨学生としてノッティンガム（レスター州の北側に隣接）に留学した私は、今回のレスター滞在中幸運にもひょんなことから、現地のとあるロータリークラブとご縁ができ、会合やクラブの社交活動に参加させて頂く機会を得た。こうした会合では、EU 離脱や政治の話に話題がいきそうになると、決まって誰かが「その話はしないことにしようと言ったよね？」と喋って話題を変えた。1993 年当時のノッティンガム州のロータリークラブは裕福な白人男性の社交クラブという印象であったが、2019 年のレスターではチャリティー団体という印象が強く、メンバーとして活動する南アジア系移民やその子孫も多かった。ロータリークラブにもグローバル化の波は押し寄せていた。興味深いことに現地の白人系英国人メンバーでも、子供が EU や英連邦圏で働いていたり、英国に住んでいても配偶者が EU や南北アメリカ大陸からの移民（有色人種を含む）だったりというケースが非常に多かったのである。あくまで私が現地滞在中に知り合った人という恣意的に限定された集団の話になるが、白人系英国人同士のカップル

で英国に住み労働しているという子供を持つメンバーの方が圧倒的に少なかった。つまり英国人の家庭では、日本とは比較できないスピードと規模でグローバル化が拡大していたのだ。こうしたグローバル家族にも EU 離脱を支持している人がいたことは、EU 離脱が簡単な説明では理解できないことの証ともいえるだろう。そして彼らの社交の場で EU 離脱の話題がタブー視されていたのは、EU 離脱やそれに伴う移民問題は一度言及し始めるといやでも我が身の話となってしまうからだったのかもしれない。

英国社会のグローバル化は、2021年7月時点のジョンソン政権にも明瞭に現われている。財務大臣のリシ・スナック氏は東アフリカ経由でインドから移民してきた一族出身のようだし、最近保健相として閣僚に復帰したサジド・ジャヴィド氏はパキスタン系移民の子である。内務大臣を務めるプリティ・パテル氏もインド出身の両親を持つ。南アジア系英国国民の活躍は国政レベルに限ったことではない。レスターでは不動産業の多くが南アジア系英国人によって営まれていた。お世話になったロータリークラブでも南アジアにルーツを持つメンバーは多く、しかも薬剤師、会計士、医師、教員といった高等教育と資格がなければ就くことが出来ず、かつ地域コミュニティに欠かせない職種に就いていた。

こうした移民の存在は 2008 年当時のロンドンでは普通のことだった

う。しかし地方都市もそうであったかといえば、あくまで印象論になるが、そうではなかったような気がする。今回の英国滞在では研究活動のためにいろいろな地方都市を訪問したが、驚いたことに中華料理店がない街はなかったし、ベトナム人や中国人の不法労働者を連れてくる闇のルートや彼らが働かされる違法ネイルサロンやレストラン、大麻農園が英国社会にしっかりと根付いていることは、誰もが認める暗黙の了解となった事実だった。合法であれ違法であれ移民との共存は、どんな小さな田舎町に住む英国人にとっても避けて通ることの出来ない問題となっていた。僅差での EU 離脱という決定は、こうした事実を日常生活の一部として受け入れざるを得なくなった英国人の戸惑いを表わしているように



ロックダウン後にセント・パンクラス駅で見つけた NHS をたたえる電子掲示



そして誰もいなくなった……ロックダウン後のパディントン駅構内

も思えた。

2020年3月、コロナ禍はヨーロッパを混乱状態に陥れた。3月12日のボリス・ジョンソン首相の声明の翌日、レスター大学人事課から大学閉鎖のメールが届いた。一週間ほど帰国を早めほぼ無人のセント・パンクラス駅に到着した私は、パディントン駅まで南アジア系英国人が運転するタクシーに乗った。見事なほど人気のないロンドンの目抜き通りを車で走りながら、ロックダウン後客が見つからず生活に困っているというタクシー運転手は、日本への飛行機チケットは持っていて

いるのか、その便に必ず乗れるのかと移民の私の帰路を心配してくれた。パディントン駅に到着したとき、わずかな金額だったがおつりはいらないうってお札を渡すと、運転手は安堵したような笑みを私に幸運を祈ってくれた。人気のないパディントン駅に停車するヒースロー・エクスプレスにぼつんと私一人。コロナ禍後の英国はさらに変わっていることだろう、コロナ禍後の世界はどうなるのだろうと不安に思う私を乗せて、電車はヒースロー空港へと静かに出発した。

オックスフォード大学留学記

Studying at Oxford: The Days of Sweetness and Light

中越 亜理紗

Arisa NAKAGOE

2018年秋から1年間、オックスフォード大学の修士課程で学ぶ機会に恵まれました。英文学を志して以来フェロウシップ会員を含む先生方や友人達に支えられ励まされてきたことへの感謝の気持ちを込め、ご報告させていただきます。本稿が将来留学を考えている方のご参考になればとも願っております。歴史と文学の魅力に溢れたオックスフォードの街、大学、特にボドリアン図書館(Bodleian Libraries)については既に猪熊先生(旧姓:川村先生、『年報』第29号)が詳細に書いてくださっていますので、ぜひご参照ください。また、修士プログラムのコースワークについては拙稿が一部重複してしまうことを予めご容赦いただけたら幸いです。

オックスフォード大学の学事暦は10月から始まります。1年間は3つの学期に分かれていて、それぞれミケルマス・ターム(Michaelmas Term; 10月から12月)、トリニティ・ターム(Trinity Term; 1月から3月)、ヒラリー・ターム(Hilary Term; 4月から6月)という風に名前が付いています。



図1 ボドリアン図書館の建物の一つ、ラドクリフ・カメラ(Radcliffe Camera)。学生達はしばしばラッド・キャム(Rad Cam)と略します。ここには人文系の本が多く所蔵されています。

修士課程も10月から開始するのですが、私は早めにオックスフォードでの寮生活に慣れたかったため8月に渡英し、夏休みの間にプレセッションル・コース(Pre-sessional Course)と呼ばれる留学生用の準備コースに参加しておきました。プレセッションル・コースの内容自体はアカデミック・ライティング、ディスカッション、プレゼンテーションなどの基本的なワークショップだったのですが、専攻を超えた留学生の仲間ができたことが何よりの収穫でした。また、週に1回はバス

旅行があり、ブレナム宮殿（Blenheim Palace）、ウォリック城（Warwick Castle）、バース（Bath）の街などに皆で出掛け、とても良い思い出となりました。

オックスフォード大学は39ものカレッジから成るのですが、私はセント・ピーターズ・カレッジ（St Peter's College）の所属でした。市の中心部に位置し、14世紀頃の建物がそびえているため如何にも古めかしいカレッジのように見えますが、実は若いカレッジです。設立自体は1920年代であり、フランシス・ジェームズ・シャヴァッス（Francis James Chavasse）という英国国教会のリバプール司教だった人物によって、はじめはセント・ピーターズ・ホール（St Peter's Hall）という名前で建てられたのでした。古い建物の正体は、カレッジが購入した土地に元々あった女学校などのものです。著名な卒業生の中には英国人俳優のヒュー・ダンシー（Hugh Dancy；テレビドラマ版『デイヴィッド・コパーフィールド』のタイトルロールや、映画『ジェイン・オースティンの読書会』のグリッグ役）がいます。私はセント・ピーターズ・アネックス（St Peter's Annex）と呼ばれる、カレッジから少し離れたパラダイス・ストリート（Paradise Street）にある寮の一人部屋に住んでいました。ウェストゲイト（Westgate）という大型ショッピングモールの目と鼻の先で生活には非常に便利でしたが、キッチンが共用である

ため自炊のタイミングが難しく、共用冷蔵庫内のスペース争奪戦という切実な問題もありました。しかし、セント・ピーターズはオックスフォード大学の中でも食堂の食べ物が心から美味しいと言える有数のカレッジで、学生規模も決して大きくはありませんが、とても気さくなカレッジ仲間達と先生方にも出会え、居心地が良い場所でした。セント・ピーターズの学長は当時マーク・デイヴィッド・ダマザー（Mark David Damazer）先生だったのですが、新入生のウェルカム・ディナーの席でイギリスのEU離脱が如何に嘆かわしいことであるか、またオックスフォード大学が如何に変わらずEU諸国や海外から来る学生や研究者を歓迎しているかについて熱弁していたことが印象に残っています。

オックスフォード大学の英文学の修士課程は時代ごとに専攻が分かれています。時代は650-1550、1550-1700、



図2 所属していたセント・ピーターズのポーターズ・ロッジの入り口。ポーターというのはセキュリティや郵便物の管理などを担当するカレッジのスタッフさんです。

1700-1830, 1830-1914, 1900-Present という5つに分けられ、私は1830-1914のプログラムに所属し、ほぼほぼヴィクトリアンの世界に浸かりました。ちなみに、23名のクラスメイトの中でアジア人は私だけ、非英語圏出身者は日中ハーフの私、ドイツ人、メキシコ人の3人のみでした。新学期にパプで行われた1830-1914組と650-1550組の交流会にて、ゲームで「英語が母語でない人は立って一口飲みなさい」という場面があったのですが、その時にアメリカ人やイギリス人の酔っ払った友人達が「あなた達が一番偉い！」と褒めちぎってくれて元気が出ました。

修士号を獲得するには、修士論文以前に3種類のコースの修了が求められます。ミケルマス・タームに行われるAコースは‘Literature, Contexts and Approaches’といって、私の場合だと1830年から1914年までのイギリス文学や理論などの知識を深めるための授業でした。ご存知の方も多いとは思いますが、イギリスの大学院では何冊もの本を一度の授業にカバーするので予習に時間がかかりました。カースティン・シェパード・バー (Kirsten Shepherd-Barr) 教授とマシュー・ベヴィス (Matthew Bevis) 教授が率いるこのコースの厚みは特に凄くて、入学前に送られてきたリーディング・リストを夏休みの間にできるだけ読んでおくというミッションになかなか苦労しました。大変さはクラス全員同じだったようで、初回授業がマシュー・

アーノルドについてだったことに因んでクラスのWhatsApp (欧米圏のLINEのようなメッセージアプリ) グループ名がSweetness and Light Supportになりました。

ミケルマス・タームからトリニティ・タームにかけて行われるBコースは‘Bibliography, Theories of Text, History of the Book, Manuscript Studies’, つまり、物としての本の歴史、流通、作家の古い手書きの解読など、知識やスキルを実際の19世紀の初版本や手書き原稿などを見ながら勉強する授業でした。初回授業ではジェイン・オースティンの手書きの手紙の解読を試みたのですが、クラス全員で協力して1時間かけても半ページくらいしか進まず、クライヴ・ハースト (Clive Hurst) 先生に「英文学専攻の院生をこれだけ集めて取り組んでも、最初はそんなものだから」と言われた衝撃は未だに鮮明です。ミケルマス・タームの終わりには期末試験があり、癖のある作家の筆跡を解読して書き下すという作業をさせられました。これが不可だと追試を受けることになります。追試が不可だったら、落第です。幸い、私の年度に追試組はいませんでした。後に分かったことですが、私の年度の試験問題はジェラルド・マンリー・ホプキンスの手書き原稿でした。また、このBコースはトリニティ・タームの終わりにターム・ペーパー (6,000-7,000語) の提出も必要でした。

Cコースはミケルマス・タームとト

リニティ・タームの両学期にあるのですが、各学期は別のトピックを選びます。‘The Body in Victorian Literature, Science, and Medicine’, ‘Senses of Humour: Wordsworth to Ashbery’, ‘Proto-Modernism and the Novel: Joseph Conrad and Nineteenth-Century Contexts’, ‘Women and Drama’, ‘Queer Identities in Fin de Siècle Literature and Culture’ などなど、毎年変わる様々なオプションの中で2つ好きなものを選択するのですが、人気が集まったものに関しては抽選制となります。これは参加者10名程度のゼミ形式の授業で、毎回1-2名が発表し、それに対して質問や意見を出し合っていくというスタイルでした。このコースは専攻の時代区分に縛られず、英文学のみならず米文学や比較文学の学生も参加するもので、授業内のディスカッションなどでも他分野からの学びも加わり、視野が広がります。私がミケルマス・タームで履修したのはウシャーシ・ダスグプタ (Ushashi Dasgupta) 先生の ‘Writing the City, 1820-1920’ で、トリニティ・タームの方はハーマイオニー・リー (Hermione Lee) 教授とケイト・ケネディ (Kate Kennedy) 先生の ‘Life Writing’ でした。Cコースでも各学期の終わりにターム・ペーパー (6,000-7,000語) を出します。

ヒラリー・タームは授業がありません。指導教官との週に1回 (30分から1時間) の面談と修士論文 (10,000-11,000語) の執筆に全てを捧げます。

修士論文のトピックはトリニティ・タームの途中で学科に連絡し、合う先生を手配してもらいます。そして修士論文はヒラリー・タームの期末に提出するという流れでした。私の指導教官はミケルマス・タームのCコースで面識があったディケンジアンのダスグプタ先生で、とてもフレンドリーかつ親身に指導をしていただけました。しかし、授業が無いと同級生と会う機会がどうしても減り、さらに修士論文で煮詰まるととても厳しい心持ちになってくるものです。上手な気分転換も必要だったので、親しいクラスメイト達と一緒に修士論文の作業をする日を作ったり、日本人学生会の仲間とフォーマル・ディナー (Formal Dinner; オックスフォード大学の各カレッジが開催する晚餐会) に参加したり、プレセッションル・コースで仲良くなったドイツ人の法学生と1泊2日のアイルランド旅行に出掛けたりしました。また、日本からオックスフォードに遊びに来てくれた友人達のための観光案内も、回数を重ねるにつれ上達していくのが自分でも分かりました。たまには、当時ケンブリッジ大学で修士課程をやっていた夫に会いに行き、ケンブリッジの大学図書館でも修士論文の資料調査を行いました。ディケンズとウィルキー・コリンズが共同で書いた戯曲『行き止まり』の台本がマイクロフィルムで保存されており、画像を拡大する機械の操作は初めてで少々苦戦しましたが、オックスフォードに

は無いものだったため非常にありがたかったです。

ただ、オックスフォード大学の英文科で注意しなくてはならなかったのは、ターム・ペーパーも修士論文も、全て扱う作品やテーマがあまりにも近いと不可とみなされるということでした。例えば、私はミケルマス・タームのCコースのターム・ペーパーでディケンズの『荒涼館』をポストコロナリズムの観点で分析したため、トリニティ・タームのCコースで元々希望していたエレケ・ボーマー (Elleke Boehmer) 教授とグレアム・リアック (Graham Riach) 先生の 'Literatures of Empire and Nation, 1880-1935' を取るのは良くないと学科に判断されて、急遽 "Life Writing" の授業に変更しました。そしてトリニティ・タームのCコースのターム・ペーパーをエリザベス・ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』に見られるビジネスウーマンとしてのギヤスケルの側面について書くことにしたのです。Bコースのターム・ペーパーでは19世紀オーストラリアにおけるイギリスの児童書の流通とエドワード・ペセリック (Edward Petherick) の出版エージェントのカタログを分析しました。修士論文では、またディケンズについて書きたかったのですが、ミケルマス・タームで書いた『荒涼館』を再び使うのは許されなかったので『リトル・ドリット』を選び、コリンズの『白衣の女』との比較を含めて、両作

品におけるコスモポリタニズムやマルチリンガリズムについて考察しました。

授業内発表も、必ずしも自分が好きなトピックが当たるとは限りません。私はAコースで児童文学の回の発表を希望していたのですが、挙手の瞬発力がいまいち足りずジョージ・エリオットのエッセイの担当になりました。トリニティ・タームのCコースでは、あまり詳しくないのにも関わらずチャイコフスキーのオペラ『スペードの女王』についての発表を行ったり、また複数の伝記におけるモーツァルトの死の表象の比較をしたりしました。調べ物のために音楽科の図書館に通いながら「一応、英文学専攻のはずなのだけ」と妙な愉快さを感じていました。

つまり、修士課程では、自分が一番得意なことだけで全て課題を片付けてしまおうというような戦略は全く通用しないようになっていたのです。様々な作家・作品、色々なアプローチに挑戦する必要があったわけです。ある晩、博士課程の先輩 (英文科では数少ないアジア人留学生でシンガポール出身の華人) に相談をしていたところ、「今はキツいかもしいないけど、頑張っておけば将来自分が教える立場になったときの幅も広がるから、良いことだよ」と励まされ、確かにそうだと納得して自分を鼓舞していました。オックスフォードでの経験は間違いなく研究者の卵としての自分を成長させてくれ、これからも何かヒントを得るべく立ち返る新たな原点になったと言

えると思います。

そして今、2021年夏、再びオックスフォードに私は戻ってきています。私事で恐縮ですが、昨年秋に日本で息子が生まれまして、所属している東京大学の博士課程を長期の出産・育児休業にしており、現在オックスフォード大学で東洋学（Oriental Studies）の博士課程に進んでいる夫と2020年の旧正月以来の家族再会を果たしました。日本での渡航前PCR検査に加え、入国後も10日間の自己隔離を行い、その間に2回も自宅でPCR検査を受けるという試練に耐えました。隔離期間から解放された後は早速近所のワクチン・センターでファイザーの1回目を接種してきました。副反応は2日間ほどの筋肉痛のみでしたが、2回目の接種後の方が辛いと聞くので少し緊張しております。イギリスは他の国とは違い「より良い効果のために1回目と2回目の接種の間隔を8週間以上空けるべき」という風変わりなルールを設けており、私の2回目は8月後半です。オックスフォードの街の様子ですが、屋内施設ではマスクをお願いしている場所がまだ多いものの、外でマスクをしている人は殆どいません。7月19日にイギリスでのコロナ規制がほぼ撤廃されて以来、開放的なムードが漂っているのです。その一方で、大学は慎重な姿勢を取っています。オックスフォード大学では予約無しで行けるワクチン会場やPCR検査会場を設けており、授業もほとんどがオンラインで

行われています。カレッジのフォーマル・ディナーも一部再開しましたが、少人数かつ座席間の距離をかなり取っているため、以前のような賑やかな社交は叶わなくなりました。大学側は若者の感染者増加を非常に警戒しており、寮での感染者発生や集団行動に対する嚴重注意のメールが回ってくる昨今です。

10ヶ月の赤ちゃんとのイギリス生活は修士時代とはまた違う苦楽があります。例えば、新生児スクリーニングの血液検査を日本で済ませていたのにも関わらず、イギリスとは基準が違うからという理由で診断結果の翻訳では受け付けてもらえず、バスで片道1時間近くかかった南のアビンドン（Abingdon）という街にある検査所にまで行く羽目になりました。一方で、先日は『不思議の国のアリス』が誕生した7月4日を祝う「アリスの日」（Alice's Day）で楽しい気分も味わえました。オックスフォード大学の数学者だったルイス・キャロルがリデル家の姉妹達に物語を語って聞かせた日です。イベントは毎年恒例で、7月の第1土曜日に行われます。当日は息子と一緒にブロード・ストリート（Broad Street）で巨大アリスの人形や着ぐるみの白兔や赤の女王とソーシャルディスタンスを保ちながら対面し、午後はクライストチャーチ（Christ Church）の庭を散策しました。子連れのロンドン生活については小宮先生（『年報』第33号）が素敵な寄稿をされていて、



図3 「アリスの日」で、ブラックウェル・ブックショップ (Blackwell's Bookshop) から登場してホワイト・ホース (White Horse) というパブの辺りで立ち止まる白兔さん。

コロナの状況さえもっと良くなれば私もロンドンで息子と色々なミュージアムに行ってみたいと思っている次第です。

私自身も、イギリスにいるうちに各

地の図書館で博士論文関連の資料を集めたり、来年度の復学までに研究で可能なことには着手したりする必要があります。課題は山積みです。博士課程での研究テーマはヴィクトリア朝の女性旅行家や女性作家の作品における東アジアの表象です。ポストコロニアリズム研究とフェミニズム研究を背景としながら、彼女たちのフィクション作品とノンフィクション作品における日本と中国の表象を考察し、トラベル・ライティング研究にも貢献が出来たらと考えています。今まで拘ってきたディケンズ研究から一度は離れるのですが、きっとまた戻ってくるのだろうという予感が既にしております。これからも、フェロウシップの先生方にはご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

2020 年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2020

via Online Video

日時：2020 年 10 月 3 日（土）
オンライン映像通信により実施

2020 年度の秋季総会は、田中孝信氏のお世話で大阪市立大学での開催を準備してきましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を受けて、オンライン映像通信による開催となりました。同様の理由から猪熊恵子氏のお世話で東京医科歯科大学で計画されていた去る春季大会は中止になってしまいました。会員のみなさんのご助力もあり、それでもディケンズ没後 150 年にあたる本年にオンラインとはいえ一度の会合を持つことができたのは喜ばしいことでした。

本会はずつがなく進行し、総会においては、任期を終えられた新野緑支部長に代わる新たな支部長の選出が審議され、会員の決議により松本靖彦氏を選出され、その他理事が選任されました（任期：2020 年 10 月～2023 年 9 月）。

研究発表 1 Short Paper Session 1

司会：渡部智也（福岡大学） Introduction by Tomoya WATANABE (Fukuoka University)

『リトル・ドリット』におけるアーサーの内内向性について

Introversive Arthur in *Little Dorrit*

杉田 貴瑞（早稲田大学）

Takayoshi SUGITA (Waseda University)

『リトル・ドリット』のアーサー・クレナムといえ、特にペット・ミーグルズへの恋心を「ノーボディ」としてかき消してしまうという例が典型的に示しているように、その内向性に特徴がある。その一方で、彼はドリット一家を監獄から救い出したり、共同経営者ドイスのために Circumlocution Office に通いつめるといった積極性も度々見せている。杉田氏はこのアーサーの持つ二面性の意味を

再考すべく、クレナム夫人との親子関係を中心に分析し、彼の内向的な性質の裏に潜む、母親同様のエゴイスティックな一面の存在を明らかにした。特に両者のすれ違いを考察する中で、「アーサーは読み取れていないが、夫人は彼を愛していないまでも肯定的には評価していた」とする解釈は斬新に感じられた。日本支部初となるオンラインでの研究発表であったが、フロアからの質問も非常に活発で、刺激の多い発表であった。（渡部智也）

『リトル・ドリット』の主人公アーサー・クレナムは、「自分には意志がない」と語る引っ込み思案で内向的な男として描かれる。その一方でアーサーはドリット家をマーシャルシー監獄から出すために奔走したり、共同経営者となったドイスのために **Circumlocution Office** へ通いつめたりと、反対に行動的な一面も持ち合わせている。本発表では、このようなアーサー・クレナムという人物の二面性について、深まらない内的思考とクレナム夫人との親子の関係という二点に注目して考察した。

物語序盤でロンドンの実家に帰還したときから、アーサーは夢想癖のある内向的な性格の持ち主として描かれるが、その根底にはみずからの過去や現在の状況と直視しなければならないという義務感がある。そのため、アーサーはドリット一家やドイスを救おうと他人のために積極的な行動を起こすことができる。しかし、肝腎の自身の問題について、アーサーは内省を繰り返すものの、その思考が深まることはなく、結論を導き出すことも出来ないの、現実から逃避しているだけに見えてしまう。そのため、アーサーの内省は具体的な内容を伴う思考というよりは、問題を前にしてアーサーが逡巡する様を描いたものになる。実際ペット・ミーグルズに恋愛感情を寄せたときにも、失恋へと到る際に描かれるアーサーの内省は、ペットへの思いよりも年齢差やミーグルズ一家との関係などの人間関係が中心であり、むしろ彼の心情はペットとガウアンが思いを寄せあう情景を見つめるという行為によって明確に描かれる。アーサーは内向的でありながらも、その内省が雑駁で思考が深まらないために、他者のために行動してもすべてが裏目に出てしまう。

アーサーが抱えるこのような問題が、最も表面化するの、母親であるクレナム夫人との関係においてである。アーサーはクレナム夫人との関係をよくするために胸襟を開いたつもりでいるが、実際には夫人の心情を読み取って寄り添うよりも、自身の感情をおつけることに終始してしまう。その姿はアーサーが手本とすべき自己犠牲を貫こうとするエイミーなどより、奇妙にもクレナム夫人の姿と重なる。以上の点から、アーサーは単に内向的で自信を無くした内気な人物というだけでなく、クレナム夫人のように内側に激しい攻撃性を潜ませる複雑な人物

として作中にその姿を現していると結論付けた。(杉田貴瑞)

研究発表 2 Short Paper Session 2

司会：田中孝信（大阪市立大学） Introduction by Takanobu TANAKA（Osaka City University）

A Tale of Two Cities, アンデルセン「人魚姫」, ポー ‘William Wilson’ における ドッベルゲンガーのテーマ

Doppelgängers and Doubles in Dickens’s A Tale of Two Cities,
Andersen’s ‘The Little Mermaid,’ and Poe’s ‘William Wilson’

吉田 朱美（近畿大学）

Akemi YOSHIDA（Kindai University）

吉田朱美氏は、『二都物語』（1859）に見られる「人魚姫」（1837）の影響を、従来『二都物語』との類似性を指摘されてきた『凍れる海』（1857 初演）を介して、次々と具体例を挙げながら立証されていく。その中心となるのは、もちろん、シドニー・ルーシー・チャールズと、人魚王子—彼の結婚相手となる王女、この二つの三角関係だ。さらにシドニーとチャールズとの外見上の相似性ゆえに、人魚と王女との相似性を描いた「人魚姫」の影響はますます強まると指摘し、そこにダブルを主題としたポーの「ウィリアム・ウィルソン」（1839）との結びつきの可能性をも示唆された。あらためて T・トドロフの「あらゆるテキストはパリンプセスト」という言葉を思い起こした。「人魚姫」では人魚と王子の関係が中心なのに対して、『二都物語』ではシドニーと彼の恋敵チャールズとの男同士の関係が主となるのはディケンズの独自性なのか。そんな思いを抱かせてくれる発想力豊かな発表だった。(田中孝信)

『二都物語』（*A Tale of Two Cities*）のペンギン版（2003）序文で Richard Maxwell は、フランス革命期のパリとロンドンを舞台とするこの歴史小説が、一見壮大であるかのような印象を与えるにもかかわらず、実際は核になる少数の人物間の人間関係を軸とし、基本的に「スケールの小さな」作品であることを指摘する。この大きな舞台の上で展開する物語の意外なコンパクトさというのもしかすると『二都物語』の物語世界を設計するうえでディケンズが参考ないしは下敷きにした先行作品のジャンルにも関わりがあるものではないだろうか。本発表では、デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンの「人魚姫」およびアメリカの短編小説の名手エドガー・アラン・ポーの ‘William Wilson’

「ウィリアム・ウィルソン」からディケンズが『二都物語』を執筆するうえでのインスピレーションを受けていた可能性が高いのではないかという仮説を、作品間の類似性を主な根拠として展開した。ディケンズとポーとが互いの作品を高く評価しあっていたことについては昨年度のフェロウシップ大会シンポジウムでも様々な視点から検証・確認がなされたばかりであり、またアンデルセンとディケンズの間にも文学的交流及び個人的親交があったことはよく知られている。1846年にはディケンズの関わる雑誌 *Bentley's Miscellany* に「人魚姫」の英訳版が掲載され、1847年、初めての渡英を果たしたアンデルセンとロンドンで対面したディケンズはアンデルセンの「本2冊と『人魚姫』」とを読んだと告げた。

『二都物語』の主要登場人物である Sydney Carton, Lucie Manette, および Charles Darnay をめぐる人間関係は、「人魚姫」の主人公である人魚、彼女に恋される人間の王子、およびその結婚相手となる人間の王女という三者間の関係と重なる。Sydney も人魚の姫も、その命懸けの献身ぶりは人に知られず、愛によって報われることもない。自分そっくりの顔をし、自分がそうなりえていたかもしれないような立場にある他人と自分の愛する者たちが幸福に結ばれるのを見届けたのち、愛する者のために自ら命を捨てることになる。「人魚姫」において海と陸という二つの対照的な舞台が設定されていたのと同様、『二都物語』においても変化を感じさせない安定したロンドンと、既存の社会や道徳の秩序が一挙に破壊され刻一刻とその様相を変えていくパリとが対比される。また、Sydney と Charles がお互いにとってそうであるような「人生の決定的な局面で介入してくる、自分そっくりの他者」というモチーフには、「ウィリアム・ウィルソン」からの影響をたどることも可能であろう。(吉田朱美)

研究発表 3 Short Paper Session 3

司会：田中孝信（大阪市立大学） Introduction by Takanobu TANAKA（Osaka City University）

『ドクター・マリゴールドの処方箋』—— ディケンズにおける感情と倫理

‘Doctor Marigold’s Prescriptions’: Dickens, Affect and Ethics

溝口 薫（神戸女学院大学）

Kaoru MIZOGUCHI（Kobe College）

「ドクター・マリゴールドの処方箋」（1865）の魅力の一つに、心優しき「呼び売り大道芸人」ドクター・マリゴールドの、20世紀の「意識の流れ」の手法を先取りする喜劇的独白が挙げられる。溝口薫氏はその語りを、アフェクト研究と障がい学の観点から詳細に分析された。まず最初に、マリゴールドの血のつながらない聾啞者の「娘」ソフィーの内面的発達を明らかにし、その上で、彼女の知的発達を育んだ、マリゴールドの手話と文字による教育を時代背景に照らして検討された。そして、そうした教育が彼自身に自己認識や感情面での変化をもたらし、最終的な彼の姿には他者との共感・共生が読み取れるとされた。当時推進されていた口話教育の実態や手話教育に対するディケンズの姿勢など有益な情報も満載だった。人間の魂の孤独、それも自らが招いた孤独からの蘇生、さらには健常者と障がい者の間における「父娘」関係を通した他者同士の深い絆というのは、本作品に限らず、「キャロル哲学」を反映した *Christmas Stories* の一つの大きなテーマではないか、そんな思考の広がりをも誘ってくれる質の高い発表だった。（田中孝信）

1865年に発表されたディケンズの「ドクター・マリゴールドの処方箋」は、聾啞の子供を養女として引き取り育てた Cheap Jack が自らの人生を語る作家後期の優れた短編小説であるが、その正当な評価は最近まで待たねばならなかった。それは作品を感傷的で皮相的なものと決めつける見方や、手話を用いる聾啞教育に対する偏見があったためと思われる。本発表では、当時の英国における聾啞教育事情の一端を明らかにするとともに、アフェクト研究の手法を用いて聾啞のソフィーと主人公マリゴールド両者の関係の内実を探り、障がい者とそれを支える者をめぐるこの物語の倫理的意義に迫った。

マリゴールドの聾啞者ソフィーに対する教育は、彼自らが考案した素朴な手話によるものであるが、実は当時ロンドン聾啞学校が成果を上げていた手話による伝統的教授法と軸を同じくしている。当初獣のように無知の状態にあったソ

フィーに、物事と言語の不安定な関係を理解させ、読み書きを覚えさせ、さらに正義や愛などの精神的な価値についても会得させるに至るこの物語は、いわば手話による聾啞教育成功物語ともいえよう。ソフィーの内的成長は、障がい者としての自覚や、養父の愛情に報いようと積極的にとる agency や responsibility の窺える主体的行動が暗示している通りであるが、結果として両者が互恵的対等関係に至ることが、この物語における重要な到達点を示している。

また 1860 年代当時の聾啞教育新運動という背景事情に照らすならば、この物語のさらに重要な意義が見えてくる。当時、聾啞者を手話によらず聾啞者に口話を教える新教授法が強調され始めていたが、それは手話を聾啞児の精神的成長を妨げる未発達な言語として徹底的に排除する排他的な運動を形成していく。その結果、この口話主義教育は、最近に至るまで長く聾啞教育の標準となるのである。この当事者不在の極端な教育運動に対し、作家は当時敢えて手話による聾啞児に寄り添う教育物語を書くことで、警鐘を鳴らしたといえるのではないか。

最後に、マリゴールド自身の感情の変容に注目しその倫理的含みを探った。マリゴールドは女性的な情愛を示すディケンズ後期の献身的な男性像の一例といわれているが、物語を通してみると、情愛に目覚めるだけではなく献身に潜む独占的衝動と抑制が描かれている。英国の伝統的リベラルであった彼は、いわばコミュニタリアン的な自制という「^{バーチャル}徳」を発揮し内的調整を果たす存在ともいえる可能性がある。(溝口薫)

シンポジウム Symposium

「今に生きるディケンズ」 ‘Dickens’s Presence Today’

司会・講師：佐々木 徹 (京都大学) Toru SASAKI (Kyoto University)

講師：阿部 公彦 (東京大学) Masahiko ABE (University of Tokyo)

講師：板倉 巖一郎 (関西大学) Gen'ichiro ITAKURA (Kansai University)

講師：猪熊 恵子 (東京医科歯科大学)

Keiko INOKUMA (Tokyo Medical and Dental University)

ディケンズ没後 150 年を記念してディケンズの現代における意味を考えるシンポジウムを、という執行部のお達しを受けましたので、お祭りだからこの際思い切ってフェロウシップの外からゲストをお二方お迎えすることにしました。阿部先生にはディケンズと現代日本文学、板倉先生にはディケンズと現代イギリス文

学との関わりを中心にお話しいただき、できるだけ多様な角度からこの問題にアタックしてみようという企画でしたが、蓋を開けてみると、(案の定と言うべきでしょう)「始まり」の問題、レズビアン作家、事務能力、テレビドラマ、という実にバラバラな切り口の寄せ集めシンポでありました。でも、考えようによっては、ディケンズが色々な要素を含む大きな作家であることを改めて認識できた150分であった、と言えないこともないでしょう。(佐々木徹)

ディケンズと現代の TV ドラマ

Dickens and the TV Drama Today

佐々木 徹 (京都大学)

Toru SASAKI (Kyoto University)

2005年のBBC版 *Bleak House* は、ディケンズとソープオペラの関連性をきわめて強く意識したアダプテーションであった。イギリスの代表的なソープオペラ *EastEnders* の直前の時間帯に、この連続ドラマと同じ1回30分で放映されたからだ。そして、脚本を担当した Andrew Davies は、「もしディケンズが今日生きていたら、イーストエンダーズの台本を書いているだろう」と語った。この著名なシナリオ作家の発言はしばしば引用される。たしかに、ディケンズが現代のテレビドラマを観たら、自分も一枚かみたいと思うかもしれない。しかし、*EastEnders* よりは、もうちょっと高級なものに惹かれるはずだ。

21世紀のテレビドラマで、もっとも頻繁にディケンズと関連づけられるのは、David Simon の *The Wire* である。これは、ボルティモアを舞台にした、麻薬の売人たちと、それを取り締まる警察官を中心にしたドラマだが、単なる犯罪アクションではなく、ホームレスから市長まで、大都会に生きる人々の生態を幅広く描き、警察、学校、行政といった組織の腐敗、行き詰りをえぐる政治ドラマでもある。鋭い社会風刺、多彩な人物造形、登場人物たちのネーミングのおもしろさ、などのディケンズ的な特徴を持つこの作品は、一つの大都市を描き出そうという意図と犯罪がらみのエキサイティングなプロットを結合した点で、現代版 *Bleak House* と言えよう。

ディケンズやコリンズの活躍したメロドラマ小説の黄金時代には「純文学」、「スリラー」などといった分け隔てなどなかった。最上の小説はスリルに満ちていた——かつてT・S・エリオットはこう述べた。この「メロドラマ小説の黄金時代」が、21世紀の今、復活しつつある。ただし、それを担うのは、従来の小説ではなく、小説的テレビドラマ、サイモンの言葉を借りれば、Visual Novelなのである。

現代はテレビの黄金時代で、*Mad Men*, *Breaking Bad* といった優れた長尺連続ドラマこそ、21 世紀アメリカを代表する芸術だ、という声もある。エリオットをなぞって言えば、スリリングでおもしろい、それでいて芸術的に優れたものを大衆に提供する役割をディケンズがたとえば *Bleak House* において果たしたとすれば、同じ役割を今日において果たしたのが *The Wire* なのである。(佐々木徹)

ディケンズと事務能力

Dickens and Paperwork

阿部 公彦 (東京大学)

Masahiko ABE (University of Tokyo)

ディケンズは明治以来さまざまな日本の作家に影響を与えてきた。とりわけ大江健三郎については『キルプの軍団』でのあからさまなオマージュもあり、正面から影響関係が論じられることがある。たしかに粗削りな文体、人物造形の大胆さなど、両者には類縁性が見られる。今回の発表では、筆者は固有名の問題からめてディケンズと事務能力という問題にフォーカスし、大江健三郎における固有名詞の問題とも接続させることを試みた。

ディケンズは『荒涼館』で、果てしなく続く裁判の事務作業の虚無を描き出してみせている。また、デッドロック夫人の法律文書の筆跡への反応や、膨大な書類の蓄積された部屋での事件など、さまざまな形で「書類」が物語展開にからんでもいる。総じてみれば、『荒涼館』において書類処理は人間の存在や死を暴力的に記号化するともいえるだろう。このように事務処理、書類作成といった表象に注目すると、この作品に見え隠れする一連の問題系が浮かび上がる。これは概略、以下のような着目点としてまとめられる。

- ・ paperwork と密着する「紙」概念。物質性。書くこと。筆記筆写。書く技術。書く人への注目。
- ・ 蓄積、整理の問題。記録。記憶の混濁。
- ・ 形式主義の独り歩き。杓子定規さ。
- ・ 手続きに伴う遅延。書くことと物語化に伴う迂回、サスペンス。
- ・ 実体との乖離。人間よりも人間管理。数値化。疎外。
- ・ 生命からの自由。究極の事務仕事としての「死の扱い」。遺産相続。遺言。墓碑銘。家系図
- ・ 事務に対する蔑み。軽視。ディケンズの苛立ち。
- ・ 事務が生み出す「富」。文房具。紙。文字へのフェティシズム。「書く人」の雇

用. 情報処理技術の洗練. 教育. 知識. 学校. 訓練. 言語.
 ・事務の重圧. 病. 反復作業の苦痛. 孤独. 「正確さ」という圧力 (推理とも関連). 神経・注意への負担. 身体と精神のアンバランス.

こうした着目点を見渡すと、『荒涼館』が「代書人バトルビ」とならぶ、世界最初の〈事務能力小説〉の一つだということがわかってくる。そこでは公的な制度による、プライベートな言葉や固有名の「乗っ取り」が問題となってもおり、従来の研究でも議論されてきた「ディケンズにおける言葉の所有権」のテーマと接続させて考えることも可能ではないかと思えるのである。(阿部公彦)

「本当にタイムトラベルしたい？」——ディケンズと現代イギリス作家たち
 ‘Would you actually like to time-travel?’ Dickens and Contemporary British Novelists
 板倉 巖一郎 (関西大学)
 Gen'ichiro ITAKURA (Kansai University)

サラ・ウォーターズ (Sarah Waters) の『荊の城』 (*Fingersmith*, 2002) とアリ・スミス (Ali Smith) の『秋』 (*Autumn*, 2016) には、現代作家／読者のディケンズ「使用法」の特徴が集約されている。もちろん、この二作品は対照的だ。前者がネオヴィクトリアニズムの系譜で読まれるのに対し、後者は現代版モダニズムに分類される。だが、ともに研究者の道——レズビアン文学とモダニズム文学——を目指した作家であり、そのディケンズ使用法にはオマージュと研究の余滴が混じり合っている。この研究者としての目こそ、大学院で学ぶ作家の多い現代文学の特徴なのだ。

『荊の城』で、ウォーターズは自身の博士論文で書けなかった部分を想像力で補完している。冒頭から彼女がつねに愛読書として挙げる『大いなる遺産』へのオマージュに満ちているが、論文では許されないようなより創造的な読み替えも見られるのだ。たとえば主人公 Sue と Maud と Gentleman の三角関係は、Miss Havisham と Estella と Pip の関係に比せられる。これは、ディケンズにおける奇妙な三角関係を、レズビアン小説にありがちな女性同性愛者＝女性同性愛者＝男性異性愛者の関係へと読み替える試みなのだ。ウォーターズは Maude Meagher が *The Green Scamander* (1933) で *The Well of Loneliness* (1928) の悲劇をユートピア的に読み替えたたと論じているが、ウォーターズの三角関係はディケンズ作品に潜むクィア性を暴き出し、現代的に書き換えていると言えよう。

一方、『秋』は芸術論とフィクションの間を自由闊達に移動するテキストである。スミスはディケンズの新しい読みを提供するのではなく、むしろ彼の作品を

フィクションとノンフィクションの狭間に移送することで新たな命を吹き込む。若手研究者の不安やE U離脱をめぐる狂騒の現働的イメージと個人的な回想イメージを自由に結びつかせることで、『秋』は Elisabeth と Daniel の何気ない会話に出てくる「タイムトラベル」の実践例となる。作品後半で Elisabeth が読む『二都物語』の有名な冒頭が引用されるのだが、この引用は『秋』の時間遡行をメタフィクション的に指し示すのみならず、*Artful* (2014) で展開しているスミスの時間論への注釈としても機能する。

ウォーターズのディケンズがレズビアン文学研究者の想像の産物なら、スミスのディケンズはモダニズム研究者の時間論の題材だと言えよう。これらは熱烈なファンが思い描くディケンズ像ではないかもしれないが、彼女らのような強引な使用法に適応できる潜在能力こそが、ディケンズ作品を現代イギリス文学のなかに生かし続けているのだろう。(板倉巖一郎)

「僕は生まれる」という不思議と普遍性

The Wonder and the Universality of 'I Am Born'

猪熊 恵子 (東京医科歯科大学)

Keiko INOKUMA (Tokyo Medical and Dental University)

小説ジャンル一般、または物語る行為そのものにとって、「死」というテーマはきわめて重要である——このことにはおそらく、疑問の余地がないだろう。その一方で、「生誕」というテーマと「リアリズム小説」のコンヴェンションとが、不協和音を奏でるように思われるのはなぜだろうか。

フランク・カーモードが述べる通り、近代リアリズム小説とは、有限にして「はじめ」と「真ん中」と「終わり」を持つ一編の物語を提示することで、巡り巡る無限のクロノスを生きる我々に、疑似的なカイロスを与えてきた。そうであってみれば、アポカリプスの終焉を人の生涯によって写し取って見たときの「死」が、フィクション形態そのものと強い親和性を持つことは、決して驚くにあたらないだろう。実際、小説ジャンルの祖にして、ある種の様式上の完成を導いたとされるサミュエル・リチャードソンの『クラリッサ』は、ヒロインの死をゆっくりと描き出し、テキスト空間にその肉体を埋葬するような構造を有している。

一方、小説ジャンルのあらゆるコンヴェンションを破ることによって成立する「反」小説『トリストラム・シャンディ』は、主人公の「生誕」に執拗にこだわり、ひたすらトリストラムの存在の「原点」に迫るべく、脱線に脱線を重ねている。しかしそれでいて不思議なことに、結局のところ明確なトリストラム誕生の

シーンは描かれることがない。クリストファー・リックスが述べるように、「小説によって描き得ないものとは何か」をとらえようとした小説が『トリストラム・シャンディ』だとするのなら、その「描き得ないもの」が常に、「生誕」というテーマの周りを旋回している点もまた、重要なのではないだろうか。

本発表ではこれらの点を踏まえて、『デイヴィッド・コッパフィールド』という作品を再考し、現在形で統一された各チャプターのタイトルが、一見して18世紀的コンベンションになっていること、またテキストの大部分においてリアリズム小説性が担保されていることを確認した。しかし一方で、冒頭の三語‘I am born’は、そうしたリアリズムの安定性を自ら手放す可能性を有している。つまり『コッパフィールド』とは、リアリズム小説が足を踏み入れるにはあまりに危険な「生誕」という彼岸に、一瞬だけ足を付けてみたような、冒険性に満ちた作品なのではなかろうか。そしてその冒険的1フレーズによって、「生誕」というテーマと「小説」ジャンルの軋みという普遍的問題に、自らを接続するような作品ではないのだろうか。これが本発表の暫定的結論である。(猪熊恵子)

懇 親 会

コロナ禍の中のオンライン総会とあって、残念ながら懇親会の開催はありませんでした。何の心配もなく会員同士が直接交わって親交をあたためる日がまたやってくるのが待ち望まれます。

2021 年 19 世紀イギリス文学合同研究会 準備大会**— 延期 —****The Preparatory Meeting for the Joint Society of
Nineteenth-Century British Literary Studies 2021****— Postponed —**

前支部長の新野緑氏を中心に 19 世紀のイギリス作家を研究する学会を募り「19 世紀イギリス文学合同研究会」の設立に向けて準備を進める中、「ディケンズ・フェロウシップ」, 「日本オスカー・ワイルド協会」, 「日本ギヤスケル協会」, 「日本ジョージ・エリオット協会」, 「日本ハーディ協会」がこれに賛同し、ディケンズ・フェロウシップ日本支部は今後、春季大会の開催に代えてこの研究会に集うこととしておりました。その最初の集いである準備大会が 2021 年 6 月 5 日（土）に神戸市外国語大学にて開催される予定でありましたが、残念ながらコロナ禍にて延期となり、2021 年 9 月 18 日（土）にオンラインでの遠隔映像通信による実施となりました。次号にて報告を致します。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日
改正 2000 年 6 月 10 日
改正 2005 年 12 月 1 日
改正 2018 年 10 月 13 日

第 I 章 総則

- 第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。
- 第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する。
- 第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。
(2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。
(3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。
- 第 4 条 (設立日) 本会の設立日を 1970 年 11 月 12 日とする。

第 II 章 目的および事業

- 第 5 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。
- 第 6 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 全国大会および研究会の開催。
2. 機関誌の発行。
3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

第 III 章 役員

- 第 7 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。
支部長 1 名、副支部長 1 名、監事 1 名、財務理事 1 名、理事若干名。
- 第 8 条 (役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。
(2) 副支部長は支部長を補佐する。
(3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
(4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。
- 第 9 条 (役員の選出および任期) 役員の選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。
(2) 役員の任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。
(3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。

- (4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。

第Ⅳ章 会議

第10条（議決機関） 本支部には議決機関として総会、臨時総会、理事会を置く。

第11条（総会） 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する。

- (2) 総会は、役員を選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。

- (3) 総会の議決は出席会員の過半数による。

- (4) 総会は原則として年に1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。

第12条（理事会） 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する。

第Ⅴ章 会計

第13条（経費） 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。

第14条（会費） 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する。

第15条（会計報告および監査） 本支部の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会で行う。

第16条（会計年度） 本支部の会計年度は10月1日より翌年9月30日までとする。

付則

- (1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする。

支部長	埼玉県越谷市瓦曾根 1-4-22-407	松本 靖彦
副支部長	奈良県奈良市あやめ池南 6-7-39-403	玉井 史絵
監事	埼玉県新座市栄 5-7-13	梅宮 創造
財務理事	東京都目黒区東が丘 1-2-5	田村真奈美

- (2) 本支部の事務局は、千葉県野田市山崎 2641 東京理科大学 松本靖彦研究室に置く。

- (3) 本支部の財務事務局は、東京都千代田区神田三崎町 1-3-2 日本大学経済学部 田村真奈美研究室に置く。

- (4) 本支部役員の氏名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。

- (5) この規約は2018年（平成30年）10月13日から適用する。

* * * *

※会員にはロンドン本部機関紙（*The Dickensian*; 年3回発行）および支部『年報』（年1回発行）を送ります。

※会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。（振替番号 00130-5-96592）

『年報』への投稿について

論文投稿規定

- (1) 論文を投稿する資格を持つのは、会員として認められ、会費を既に納入した者のみとします（ただし、ゲストによる論文や特集論文など編集委員会から依頼して執筆していただく論文については、この限りではありません）。
- (2) 過去に刊行されたもの、もしくは他媒体で掲載の予定があるものや審査中のものを投稿することはできません。ただし、口頭発表を行った内容で、そのことを明記してある論文については投稿することができます。
- (3) 投稿論文は、日本語または英語によるものとします（日本語、英文いずれの場合も母語でない言語で執筆した場合は投稿前にネイティブ・スピーカーによるチェックを受けてください）。論文の分量は、原則として、日本語の場合は18,000字以内（スペースを含めない文字数）、英語の場合は7,000語以内とします（ともに註や参考文献を含む）。投稿論文はMicrosoft Word形式のファイルで用意してください。
- (4) 論文には、「投稿者の氏名」、「謝辞」、「元となった口頭発表の情報」等を、一切書かないでください。
- (5) 論文とは別の投稿者情報ファイルに、「投稿者の氏名・ふりがな・氏名の欧文表記の綴り」、「論文タイトル」、「論文の英文タイトル」（日本語執筆の場合も）、「執筆にあたって依拠した書式スタイル（MLA第9版など）」、「謝辞」（必要があれば）、「元となった口頭発表の情報」（必要があれば）を明記してください。
- (6) 論文の一部として図版・写真等の掲載が必要な場合には、論文ファイル内に貼り付けずに、文章内に「図1」などと参照箇所を示し、イメージファイルのファイル名にそのナンバリングをして別個に添付してください。著作権のある図版・写真等については、予め論文の著者が掲載許諾の処理を済ませてから投稿をするものとし、著作権料や使用料が発生する場合の費用は著者負担とします。あわせて、写真に人物が写っている場合、本人の掲載許可を得てから投稿をしてください。使用許諾にまつわり特段の問題がある場合は別途ご相談ください。
- (7) 投稿にあたっては、論文原稿ファイルと、投稿者情報ファイル、必要があれば図版等のファイルを、電子メールに添付し、編集長宛に提出してください（アドレスは日本支部ウェブサイトにあります）。論文投稿の締切は6月10日です。編集長はメールを受領したら必ず確認の返信をしますので、それが届かない場合は届いていない可能性がありますのでご注意ください。
- (8) 編集委員長による受理の後、編集委員会による審査（採・否・再提出）を経て、採用になったものについて掲載をします（ただし、編集委員会から依頼して執筆していただく論文については、この限りではありません）。
- (9) 掲載にあたって、校正は最低1回、編集委員会が認める場合は2回まで行うことができます。
- (10) すべての論文は電子化し、ウェブ上で公開されます。投稿した時点でこの点に同意したものとします。論文を電子化して公開する権利はディケンズ・フェロウシップ日本支部が有するものとします。ただし、執筆者は1年を経過して以降は日本支部の許可を得た上で他の電子媒体に転載することができます。

- (11) 論文執筆時の書式については、以下の規定にしたがって執筆をするものとします（編集委員会から依頼して執筆していただく論文も含む）。
- a. 書式については、原則として、MHRA Style Guide (<http://www.mhra.org.uk/style/>)、MLA style (<http://www.mla.org>) 等、既定の書式の最新版に従ってください。最終的な書式形式は編集で統一します。
 - b. 註については、脚註ではなく、尾註を用いてください。
 - c. 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けてください。
 - d. 日本語で執筆する場合の「かっこ」（ ）は、すべて全角フォントのかっこを用いてください（そのかっこ内に欧文が入っている場合も含む）。
 - e. 執筆にあたって、句読点は「、」や「。」ではなくて、「,」や「.」を用いて執筆して結構です（編集時に統一します）。
 - f. 数字については、原則として、アラビア数字とし、すべて半角フォントで表記してください。（例：「11月6日」、「一九世紀→19世紀」、「一八一二年→1812年」）。ただし、「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします）。章分けにはローマ数字を用いることができます。
 - g. 日本語論文では、原則として、欧米人名を「サッカー」などとカタカナ表記し、初出時に「サッカー（William Makepeace Thackeray）」とカッコ内に原語を表記し、その後はカタカナ表記を用いてください。事物や書籍の名称など、人名以外の表記においても可能なものは極力これに準ずる表記を心がけてください。
 - h. ディッケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません。示す場合は、上記に従って一貫して表記してください。

論文以外の書評, 国際学会報告, その他エッセイ等

- (1) 寄稿する資格を持つのは、会員として認められ、会費を既に納入した者のみとします(ただし、編集委員会から依頼して掲載するものについては、この限りではありません)。
- (2) 編集委員会の方針により掲載することができない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。
- (3) 文章の分量は、書評(劇評/映画評/その他のレビュー)、国際学会報告、その他の文章、いずれも8,000字以内とします。Microsoft Word形式のファイルで用意してください。
- (4) 寄稿者の「氏名」に加え、「ふりがな」、「氏名の欧文表記の綴り」、「文章のタイトル」、「英文タイトル」を付記してください。
- (5) 論文の一部として図版・写真等の掲載が必要な場合には、論文ファイル内に貼り付けず、文章内に「図1」などと参照箇所を示し、イメージファイルのファイル名にそのナンバリングをして別個に添付してください。著作権のある図版・写真等については、予め論文の著者が掲載許諾の処理を済ませてから投稿をするものとし、著作権料や使用料が発生する場合の費用は著者負担とします。あわせて、写真に人物が写っている場合、本人の掲載許可を得てから投稿をしてください。使用許諾にまつわり特段の問題がある場合は別途ご相談ください。
- (6) 原稿はファイルを電子メールに添付し、編集長宛に提出してください(アドレスは日本支部ウェブサイトにあります)。投稿の締切は8月10日です。編集長はメールを受領したら必ず確認の返信をしますので、それが届かない場合は届いていない可能性がありますのでご注意ください。
- (7) 掲載にあたって、校正は最低1回、編集委員会が認める場合は2回まで行うことができます。
- (8) すべての文章は電子化し、ウェブ上で公開されます。投稿した時点でこの点に同意したものとします。論文を電子化して公開する権利はディケンズ・フェロウシップ日本支部が有するものとします。ただし、執筆者は日本支部の許可を得た上で他の電子媒体に転載することができます。
- (9) 書式等については、論文とは異なり、原則として執筆者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とし、それ以外の表記も論文の投稿規定をガイドラインとしてこれに準じることが望ましいです。ただし、最終的な表記法は編集で決定します。

追悼 松村昌家教授

(ディケンズ・フェロウシップ日本支部元副支部長／大手前大学名誉教授)

In Memoriam
Professor Masaie MATSUMURA
(1929-2019)



追悼 松村昌家先生 (1929.11.21-2019.9.9)

西條 隆雄 Takao SAIJO

ディケンズ文学および19世紀イギリス小説研究の大家、元日本比較文学学会代表理事、そしてまた日本ヴィクトリア朝文化研究学会(2001-)を立上げ初代会長を務められた松村先生が亡くなられてもう2年になる。先生はあまたの著書・論文を世に送られ、いずれも視点の新らしさと膨大な文献渉猟をふまえた論考ゆえに、学界で高く評価されている。心のなかでは常にいくつかの異なる論考をめぐらしておられ、朝夕にはきまって洛西の閑静な自宅からぶらりと散歩に出かけられた。「散歩していると、それまで考えていたさまざまな事柄がうまく一つにまとまるんですよ」とおっしゃられる。ディケンズ、漱石、逍遙、蘆花を論じ、ドストエフスキーは明治時代の日本人学徒のように英訳本で読み、ディケンズが明治小説におよぼした影響を考察する。地道な研究活動はやがて大きな実りをも

たらし、岩波書店の漱石全集第二巻『倫敦塔ほか・坊ちゃん』（2017）が「注解〔松村昌家・相原和邦〕」と明記して出版される。注解者の一人が英文学者であるのが目を引く。「比較文学は面白いよ、きみも入りなさい」と誘われてついつい比較文学会に入会したのは30年前のこと、一方的に教わるばかりであったが多くの著名な研究者に出会えるし、『ディケンズ鑑賞大事典』（2007）が完成した折には例会で「書評と解題」の集まりを開いてくださった。今西雅章氏が『シェイクスピア劇と図像学』（彩流社、2008）を出された時には松村先生から「書評と解題」の司会役をやってくださいとお願いされこの大著を詳細に読み、実に多くのことを教わった喜びは大きい。先生が常々口にされる「門戸を広く開け放しておく」ことの大切さが今になってわかり感謝している。先生の勤めておられた大手前大学の研究室へは何度かお訪ねしたが、そこにはオリジナル版の *The Illustrated London News* が全巻、めったに目にすることのない貴重なディケンズ研究やヴィクトリア朝研究の書物とともに並んでいて、名著を生みだした研究室がその一端をさりげなく覗かせていた。資料がすべて、研究室は無言でそう語っていた。

先生は大阪外国語大学英語学科を卒業後、大阪市立大学大学院で英文学を専攻され、数年間高等学校で教えられたのち天理大学（1960-65）を皮切りに同志社大学（1965-72）、神戸女学院大学（1972-85）、甲南大学（1985-96）、大手前大学（1996-2007）で教鞭をとられた。その間に出版された書物は単著10冊、編著・翻訳を加えると40冊を優に超える。軸足は常にディケンズ研究に置き、もう一方はヴィクトリア朝社会・文化の諸相の究明に置いている。『ディケンズとロンドン』（1956）および『ディケンズの小説とその時代』（1989）は、先生が心血を注いで書かれた書物で、世紀中葉頃に出現する、従来とは全く異なるジェントルマンの生き方をディケンズの作品に探っている。我執の渦巻く世の中で、成功をおさめ富を手にした人間の表と裏、おぞましい過去の隠蔽とその現われ、あるいは遺産相続の見込みと贈り主の判明による幻滅など、幸運探求の時代が残したいろいろな負の置き土産と戦いながら新しい生き方を探り出してゆくのである。

ディケンズ研究に劣らず広く知られている先生の『水晶宮物語』（1986）は、新しい資料には目のない先生が *ILN* を一目見るなり飛びついて書かれた名著である。先生はまた、ロンドン万博を成功させるために総裁アルバート公が設定した明確な目標とその達成を導く統率力には大層おどろかされたそうで、公の伝記を読みつづけるうちに、公は1857年開催のマンチェスター美術名宝博覧会において、第一回万博のとき以上にすぐれたリーダーシップを発揮したことを知る。なんと英国王室および国内の蒐集家の屋敷に秘蔵されている美術品の出品を要請し、カタログを作成してその借用に伴う難問解決を図ったのである。これによって隣

国に引けを取らない名画名宝があつまり、博覧会は大成功をおさめるとともに、イギリスのフランスにたいする美術コンプレックスをも解消させることになったそうだ。「これはいつかきくと書いてみせる」とおっしゃっていたのはつい数年前だと思っていたのに、早くも『ヴィクトリア朝文化の世代風景』（2012）および『大英帝国博覧会』（2014）が上梓され、密な内容を両書に手際よくまとめ、その全貌を語っておられる。おそるべき早さである。常人の及ぶところではない。

他にも述べたいことはたくさんあるが最後に、先生が日本の大学英語教育にもたらした大きな貢献を一言記しておきたい。先生はヨーク大学総長 Kenneth Clark より、名著 *Civilisation* に、詳注をほどこしてリーディング用教科書に編む許可をいただいた。この英語教材を通して学ぶ西洋美術の鑑賞と喜びは、学生にはもちろん英語教員にも大歓迎され、この教材は長きにわたり教材超ベストセラーの座を保ちつづけている。すぐれたリーディング教材をご提供いただいたこと、いい著書・研究発表やシンポジウムによってディケンズ・フェロウシップ日本支部の質的向上を果たしてくださったこと、そして我々のディケンズ研究をヴィクトリア朝ロンドンの全社会現象を視野に入れて進めてゆく必要を教えて下さったことにたいして感謝をささげたいと思う。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

追悼 松村昌家先生

植木 研介 Kensuke UEKI

私と妻は共に喜寿を迎え涙もろくなっている。この6月『NHK 俳句』の放送中に北陸に住むディケンジアンの入選句「微笑の遺影の妻や夜の蠅」を見つけ、彼女の話をしていたら身の回りがおぼろ靡なになった。しかし涙の向こうにある光景が蘇ってきた。若くして逝った彼女は私の指導の許に1992年の日本英文学会で『カスターブリッジの市長』における「娘」と「父」を発表した。論点はヴィクトリア朝小説の重要なテーマ「父と子」であった。ところが小説名を日本語で表記していたのが引き金になったのか、「市長でしょうか、町長でしょうか？」との質問が出て危うく学会が迷走しそうになった。この時「カスターブリッジのモデルである Dorchester は勅許により特権を与えられた都市 borough (OED, sb. の3) で、ロンドンの city には及ばぬが、単なる地方の town ではない」と救いの手をフロアから差し出してくださったのが松村昌家先生である。私は胸をなでおろした。

愛媛大学で1981年フェロウシップの春季大会を引き受けたら、大変だろうと

私を司会役として「夏目漱石とディケンズ——『坊ちゃん』の場合」を講演していただいた。この折には小池滋先生の司会で「『ピクウィック』の魅力をさぐる」シンポジウムを開くと、博学の臼田昭先生が発表中に「このパーティーズは何でしょう？」と言われたら「cockney の potatoes でしょう」と応じられたのも松村先生であった。打ては響く、この発言は私の心の中で奇妙に鮮明なのだ。

初めて先生にお会いしたのは1970年10月四国学院大学で英文学会中国四国支部がディケンズ没後100周年記念のシンポジウムを開催した時である。シンポジウムについては『ディケンズの文学と言語』榊井迪夫／田辺昌美編（三省堂、1972）を参照。発案者は山本忠雄先生と記されているが中心は榊井先生であった。未だ院生だった西條隆雄氏と植木は走り使い役、会が終わると発表原稿の受け取りが役目である。それを三省堂に入稿する手はずであったがそうはいかなかった。司会者が2名、発表者が11名を5部に編成された「新しい方法のシンポジウム」（榊井メモ）で参会者も多く活発な会であった。米田先生、松村先生、小池先生、久田先生はそのまま原稿を渡されたが、言語・文体を扱った方は完全原稿が少なく原稿がそろわなかった。文学系の先生は出版に手慣れた方が多く校正段階での補正を意図されていたと推測する。語学系の人々は「完全原稿」を出されたが予定した期限をはるかに過ぎて研究室に届いた。発行は1972年12月となった。発表はされたが原稿が届かなかった方は、文学系1名、文体論系1名である。このことは「はしがき」にさらりと書かれ、不注意な読者は気付かれないと思う。「はしがき」は榊井・田辺の両名併記となっており。私はお二人の先生からそれぞれ献本をいただいた。榊井先生からは万年筆の英語で‘index’作成を^{ねぎら}労っていただいている。田辺先生は墨痕鮮やかに「現代人とは『貧しくて無^{アツ}苦、物足りて幸福でなく | 心の破産と屈辱を受けながら苦痛をおぼえず | しかも喜びを知らない』BOZ 二十三才の言葉 昌美訳」と記された。二人の恩師の、全く違う両極端とも言える大学人のありようを如実に映しているので敢えてしるさせて頂いた。ディケンズ没後150年の今、松岡光治君の編集による *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays* が英語で上梓されたのを喜びながら、田辺先生のような生き方を許さなくなった、人文分野を邪魔物の如く扱う、特に国立大学の現状は正しいのだろうかと自問している。1983年に *CHARLES DICKENS OUR MUTUAL FRIEND—Essays from Britain and Japan* を‘For Dr Tadao Yamamoto’として、松村先生も加わって南雲堂から出版された頃が無性に懐かしい。

小池先生は『幸せな旅人たち——英国ピカレスク小説論』（1962）を読んで知っていたが、松村先生が手渡された原稿「David における悪の問題——Steerforth と David の関係を中心に」を読ませていただいて先生と本当に出会ったのだ。小池先生の名前まで出したのは、1970年12月23日東京の「学士会館」

で「ディケンズ・フェロウシップ日本支部」は発足したが、私の判断では、松村先生と小池先生のはほぼ同年齢のお二人に導かれて、研究者の多さで、世界中で知られる支部になったと判断しているからである。松村先生の研究はヴィクトリア朝の文化と社会事情を抜きにしては成立しえない。作品の精読は言わずもがな、日本の文学作品との比較を無視してはならないことを先生の多くの著書は語っている。同様の視点がなければ、小池先生の『島国の世紀——ヴィクトリア朝英国と日本』（1987）は生まれ得なかったと考えている。小池先生は伸びやかな言葉で際限なく広がっていく智の風景へと導いていただいているし、「面白くて為になる」を文字通り実践されている。松村先生は、切れ味のよい言葉で切り込みを入れ、そうだったのかと思う処まで連れて行っていただいた。松村先生の著書では『水晶宮物語——ロンドン万国博覧会 1851』（1986）が一番気に入っている。お二人の筆力は競うように旬を迎え、両先生の著書は私の脳と書庫のかなりの場所を占拠している。であれば、フェロウシップのよしみで、1970年前後の事情にもう少しお付き合い頂きたい。ディケンズについて一冊の本しか書けなかった *Ancient Dickensian* の繰り言に、

西條隆雄氏は大学院で2年先輩。フルブライト奨学生として1年米国で学ばれ私とは1年違いの形になった。学部では「紙と鉛筆と思索さえあれば研究ができると言われた学問（後にコンピュータが加えられたが）」理論物理学を学びたいと上洛したが、ものの見事に甘い夢は打ち砕かれた。ある名物教授の物理学の内容が全く分からないのだ。愕然とし煩悶し鬱となり大学一回生の終わりには、文学部への道を歩むことにした。と同時にいろいろ理由があり郷里広島で学び直そうという気持ちが芽生え始める。偶然見つけたのが *David Copperfield*。山本先生が注を付けられた研究社版の3巻本だった。面白かった。生き返った。4回生になった夏7月だと思うが田辺先生の自宅に行き参考に何を読みましようかと相談に行った。「これを読んだら」と押し出されたのが *Edgar Johnson* の2巻本 *Charles Dickens* であった。この日垣間見たのは久田晴則先生が「OEDを引かしてください」とやってきてシャツを脱ぎ肌着一枚で勝手に二階に上がられ辞書を引かれだした姿だった。これは楽しい処に戻れると息をついた。

翌1967年大学院に入学。そこで驚いたのは *Dickens* の位置付けだった。広島大学英文科では「英語の本流はチョーサーの英語、シェイクスピアの英語、ディケンズの英語」であって、チョーサーの作品からシェイクスピアの作品へと向かうもよし、ディケンズの作品からシェイクスピアの作品に遡るのもまたよし。これが了解事項であった。まさに山本忠雄先生の遺産である。修士課程2年目の5月、日大で日本英文学会が開かれ、のこのこ出かけた。所謂「日大闘争」なるものの姿はなかったが、山本先生の *Edwin Drood* を巡る発表があった。たしか

「Droodでは作家は新しい英語表現に入っている」と述べられたような気がする。Droodなど未だ読んでいなかったし何の事やら判らなかつた。「山本先生が一般の部で発表される」と、開会式で若い会員を鼓舞するコンテクストで触れられたのには驚いた。学士院賞の重みはそこにも確かにあった。同じ年の秋だったと思うが、西條氏は米国に留学中で、東大では学生の怒りの焰が燃え始めた頃、大阪におられる山本先生が所用で来広され模擬授業が行われることとなる。所は田辺研究室、教師役も田辺教授。テキストは*Hard Times*第1章、哀れな担当者は植木と英語学の某君の2人。院生が40名近く密になり、他に二人の教授、一人の助教授、英文研究室のほぼ全員が集まり廊下にまで溢れた。セミナー後山本先生は穏やかな声であったが講評を加えられた。先生の望まれるレベルに担当者は達していない。二人には文字通り*hard times*だった。その後、年が変わって東大の安田砦が陥落後、広島大学にも飛び火。全学封鎖され、機動隊によって封鎖が解除になる1969年の夏「大学紛争の波」と共に「英語学の某君」は大学から消えた。本当にいなくなった。名前すら覚えていない。そういう大学の只中で*Dombey and Son*で修士論文を仕上げ、1962年に米国の雑誌に載せたF. R. Leavisの論文で彼の「豹変」ぶりに魂消つつ、博士課程に滑り込んだ。松村先生、そういう社会の中でディケンズを読んでいましたよね。

1969年ロンドンに留学していた津村憲文先生は19 Nov.の榊井先生宛の私信でRandolph Quirk氏の‘Language of Dickens’の2回の講義が始まったが、参考書目として示唆されたのは山本先生の*Growth and System* (1950, revised 1952)だけだったと伝えられている。翌1970年11月にG. L. Brook氏が*The Language of Dickens*を出版した。この事は*Growth and System*はそれほど先駆的研究であることを証している。

三省堂の『ディケンズの文学と言語』に話を戻せば、三省堂と榊井先生の間は何があったか私は知らない。不完全なゲラ刷りを基にindex作成を榊井先生に命ぜられたのは出版3か月前のことである。西條氏は前年1971年同志社大学講師になられ（皆さんも推測がつかうと思うが、この人事はもちろん松村先生が広島に田辺先生を訪ねられて成立したもの）、1972年4月私は研究室の助手になっていた。私と院生中村愛人君がこの任に当たった。結果が凄まじい数の誤字脱字だった。校正は頼まれなかったが私は恥じた。すぐに出されたA5判の正誤表を見ると今も心が疼くし、三省堂の文字は反省の森にみえる。いくら鉛の活字を拾う時代だったとはいえ2年かかっただけのゲラ刷りがあれではひどいと思っている。*The Daily News*の創刊号の多くの誤植について、翌日編集長Dickensは一読者になりすまし「幾つかの活字が逆立ちし、また幾つかはあいにくピクニックでロンドンから外出中。義勇軍の徴兵籤くじに当たった人のように幾つかは代理が出頭しており

ます」とヒューモラスに言い訳をしているのは皆さんもご存じの通り。私がこれを真似るわけにも行かない。速達で執筆者の皆さんに誤植の訂正をお願いした際の返事が、大半手元に残っている。小池先生は速達葉書で「小生の文章は幸いにも二回校正に目を通す機会に恵まれ、もう大丈夫だと思ったのですが、やっぱり見落としがありました」と二回の校正のチャンスがあったことが綴られている。松村先生からは「再版する場合はあれば」と記した注意事項を榊井先生宛として便箋に認められている。とにかく編集部は大童だった。

実は1970年没後百周年前後は忙しい年だった。上記のシンポジウムのほかに広島大学英文学会は *HIROSHIMA STUDIES IN ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE* (vol. 17, no. 2) を出した。この号だけカバーは白のアート紙。赤い活字で *DIKENS CENTENARY NUMBER* と印され、頁下にも発行年と考えられる位置に赤で1970とある。日本語の奥付には昭和46年5月30日発行と印刷されているのだが、これが解らない英国の書評子は1970年発行のA. Wilsonの *The World of Charles Dickens* とH. P. Sucksmith(彼は1979年にClarendon版 *Little Dorrit* の本文校訂を行う)の *The Narrative Art of Charles Dickens* の書評が載っているのを見て(英語混じりの日本語で、前者を西條氏が担当、後者を植木が担当)この研究雑誌はどういう編集をしているのかと訝っている書評を見たことがある。間二郎先生、越智道雄先生の日本語論文も2つ収めているが山本先生、榊井先生、E. W. F. Tomlin氏(かつてブリティッシュ・カウンシルの代表として日本にいた文筆家で、1969年にはDickensの論文集を編集した)、松村先生の4氏の寄稿は全て英文である。榊井先生の記事「Dickens in Hiroshima」の中で原爆と山本先生の論文原稿のことが書かれ、さらに山本先生が東大に提出された学位論文題目(Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to a *Dickens Lexicon*)の一部になっている *Dickens Lexicon* が「研究社」から出版される約束がなされたと書かれており、英語で先ず欧米に告知した形となっている。最初の手書の膨大なカードは原爆で焼失した。あの厚いNEDさえも灰燼に帰した。山本先生の「Our Tortured Work」では、1940年代初め戦争で文化交流が絶たれた時期に偶然にもEdmund Wilson, George Orwell, Humphry House 諸氏の研究でDickens再評価が起こったころ、広島の地でもディケンズ英語の *philologish* な側面に関心を持った研究が始まったことが記され、それを *Dickens Lexicon* として刊行する意義を縷々述べられている。この時点、戦後25年を経た1970年にカード原稿がほぼ完成しそうだったことが両先生の文章からわかる。だが梓に上すには至らなかった。興味のある方は、今林修氏がWeb上で「The *Dickens Lexicon* Projectの概要」を公開されている。ご覧いただきたい。「ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報、38号、pp. 70-74」を参照されると、実態が分かる。正に

75年以上の歳月をかけた‘Our Tortured Work’なのだ。

梶井先生は欧米を常に意識された研究者、リサーチを重視する山本先生の直系の弟子である。したがって philologist として広島高等師範学校、広島文理科大学で学ばれたが山本先生に倣い東京大学で学位を取得された。同じく山本先生の弟子であり、小説家ディケンズを文学の面から論考されたのが田辺先生で、ディケンズの全作品（Oxford Illustrated Dickens）を翻訳された田辺洋子ディケンジアンの父君に当たる。昌美先生の神髄はその言葉にある。滋味掬すべしといった文章で、その万分の一を知りたければ、原英一氏の尽力により Web 上で公開されている『ディケンズ・フェロウシップ会報 創刊号（1978年）』の「読書会旅行」をぜひ読んでほしい。ここに行きつくには「ディケンズ・フェロウシップ日本支部」のサイトから、「会報」でなく、「年報」をクリックして入り、次に1をクリックして、次に「電子版 創刊号」をクリックすると辿り着く。山本先生、宮崎孝一先生、内山正平先生、中西敏一先生のいずれの文章も、内容と共にその人の研究方法を示し性格まで嗅ぎ取れるが、昌美先生の文章は際立って別物である。そこを感じて欲しい。内山先生の寄稿によるとフェロウシップ日本支部立ち上げに果たされた小池先生の役割の大きさが判ってくる。山本忠雄先生については Wikipedia などを参照していただきたい。裏話を一つ。山本先生の学位論文（1946）は1952年関西大学英語学会の支援を得て出版される。1953年にはこの論文が学士院賞、しかも恩賜賞の対象となった。昭和天皇にご進講の際用いられた John Forster の *The Life of Charles Dickens* (Chapman & Hall) 1872-74 初版3巻本は、今林氏の広大研究室に現在保管されている。

1970年10月23日の先述したディケンズ・シンポジウムは DICKENS CENTENARY SYMPOSIUM—report and Resume として英語で各講師の話の内容が50-65ページで紹介されている。

松村先生の記事は‘The Dickens Fellowship in Japan’で1970年12月23日に発足したばかりの日本支部創立の News in English である。50名ばかりのディケンズ愛好家が「学士会館」に集まり発足したこと。東大を定年になられた中島文雄先生が議長となり会則を審議し役員を選定した様子が描かれる。ところが、日本支部は研究者のリサーチでなく、偉大な作家の中に友を見出すことができる人々のフェロウシップを目的とすると書いてある。次に1971年3月29日の夕刻早稲田の大隅会館で開かれ、ビールとヴィクトリア朝時代の夕食付きの宴会が持たれ、ブリティッシュ・カウンシル付の Gillate 氏の Public Reading が添えられた convivial な例会が持たれたと報告される。例会は1ヶ月おきに開かれるので次回は5月22日の天理大学図書館で稀覯本のコレクションが見られる。とりわけディケンズの original edition が拝める興味深いイベントであると英語で予告してあ

る。

ここで「あれ」と気づかれる方は鋭い。例会は1ヶ月おきとあるのに現在は春・秋の2回になっている。何故かと思う人は松村先生張りの歴史を辿る研究者になれる。先述の『DF 会報 創刊号』の「日本支部の歩み」を詳細に見ると、東京では1972年2月7日の生誕記念パーティーあたりまでは、松村先生が書かれているように「フェロウシップを目的とする」convivialな例会が維持されている。日本支部が設立された時、宮崎孝一会長はロンドンに留学中で、本部の会員には市井の人が多くしかも老人が多いと報じておられる。発足当初東京はロンドン風を目指したらしい。

西日本では松村先生の予告通り1971年5月22日天理大学図書館を訪れた。松村先生が天理大学で教えておられた縁で稀覯本を収めた桜材で造られた内部まで入れたのである。ナポレオンに纏わる貴重本を拝観。ディケンズが用いた月刊分冊本が揃っているのを私はここで初めて見た。最初は松村先生の説明で見て回り、別室で山本先生が書物をどう取り扱うかについて失敗談を交えて説明された。これが実質フェロウシップの「春の例会」の始まりで、次が1972年6月10日の京都ブリティッシュ・カウンスルで松村先生が司会、山本先生の講演「二十世紀のディケンズ」がもたれる。第3回目(1973)は広島大学でお世話した。西日本での例会は初めから研究色が濃く、参加者が多かった。次第に東と西の差は薄れていくが、当初は差異があった。10年後、1980年南雲堂から出版された東田千秋編『ディケンズを読む』は山本先生が大谷女子大を定年になられることを契機とした本で西のディケンジアン^{ディケンズ}の寄稿が多い。山本先生はむしろ英文学から出発された研究者であることが判る本であり、小池先生の文章の冒頭部分で「放談風に語(る)」ことを意図した本だと分かるのだが、この本に寄稿した山本、小池、東田、松村、須賀、米田の各氏がディケンズ・フェロウシップを「風通しの良い学術的同好会」の雰囲気^{雰囲気}を醸成された人々だと私は認識している。

山本先生と松村先生の組み合わせが緊密なので、あるとき「何故」と訊ねた。「若いときディケンズの不明な点を質問するため山本先生の近くに下宿したことがある」旨のことを言われた。真偽のほどは知らないが、私の腑に落ちた。信じている。

1971年春、西條氏は同志社大学で松村先生と同僚になられた。秋、鳥取大学で中四国支部の英文学会で篠田昭夫氏と私が *Little Dorrit* について発表し、西條氏が *Martin Chuzzlewit* でペーパー^{ペーパー}を読んだ。松村先生と偶然同じ宿^宿になると朝食前の気怠い空気の中数人の院生が話していたら、先生が車座^{車座}に胡坐をかいて加わられる。何気なく F. R. Leavis と C. P. Snow の論争の経緯について疑問を口にした。すると先生は *TLS* のこの個所を当たるとよいと数か所を教えてくださいました。

私は驚いた。榊井先生が *TLS* を読んでおられる姿は英文研究室で見えていた。けれどそれを英語学に関する学術新聞であると誤解していたのだから。雑誌・書籍の姿のディケンズ批評は一応追いかけていたつもりだったが、大穴があいていた。とんでもない話だ。これが3度目の出会いである。

これ以降フェロウシップの例会などでよくお会いすることになるが、西條氏が先生の同僚になり、もっと親しいものになり京都西京区の書齋を訪ねたこともある。

松村先生は私立大学で教師をしておられたから、松山に学生集めに来られた折には道後温泉本館で風呂に入り浴衣姿で涼み、夜は大街道近くの美味しい豚足料理を出してくれる店で先生はお酒を、下戸の私はラーメンを啜ったこともある。西條氏は、徳島は脇町の出身でそこでの結婚式に出席すると、流石は徳島、新郎の家から隊列を組み、先頭は阿波踊りのリズムを奏でる三味線、鉦、太鼓、その後ろを親戚が進み、最後尾を松村先生と私は所在なく歩き「Boz ならどのように描くのだろう」と会話をした。1988年の秋徳島文理大での中国四国英文学会で *The Uncommercial Traveller* を基にしてジャーナリストのディケンズや文学作品が生まれる瞬間を探るシンポジウムを、松村先生を中心にして組んだ。パネラーには久田、要田、植木のお馴染みの面々。会が開かれる前に唐突に「テキストを持っているか」と問われ、私の書き込みの入った本を渡すと10分ばかりじっと考えながら読み込み、黙ってシンポジウムを始めたこともある。四国つながりだけでも思い出は尽きない。

1993年秋、松村編『ディケンズ小辞典』（研究社出版）の「ジャーナリストとしてのディケンズ」の部分執筆をさせていただいた。「若いディケンズが二つの新聞社向けに記事を書き分けた」と書いたら、草稿を読んだ昌家先生から電話で「何処からそのことを知ったか」と問われ、「新しいほうの Edgar Johnson の1巻本」と答えたら、「Johnson は危ない、信用できない」と、即刻削除することになった。訂正はその箇所だけだったが、「Johnson は危ない」はその後も身に染みて体験した。M. Slater 氏の *Charles Dickens* (2009) は、*Pilgrim Letters* の最終巻の第12巻が2002年に出版された後なので安心してよい。でも過信は禁物である。1994年1月11日から10か月の在外研究に出た。春、1975年から76年にかけてお世話になった Graham Storey 氏をケンブリッジ郊外に訊ねたら庭の芝生に椅子を置きそれに座って陽射しを浴びて第12巻を校正中だった。「『書簡集』は新しいディケンズの手紙が次々見つかるので終わりがなく、電子版 (online 版) を作っていくしか手がない。電子版なら新しく発見された手紙はどこでも随意に差し込めるから」と漏らされた。後日、昔の tutor である John Harvey 氏 (*Victorian Novelists and their Illustrators* (1970) の著者) が Emmanuel College の

High Table での昼食に Storey 氏と私を招待してくれた時、それまで温めていた「Household Words や All the Year Round の conductor はオムニバスの車掌説」を披露したら、それは面白い学位論文ものだと喜んで幻の論文の材料を彼らの知恵袋から出して並べて見せてくれた。ディケンズについての私の唯一の単著『チャールズ・ディケンズ研究——ジャーナリストとして、小説家として』（2004）の結論の一つは「オムニバス車掌説」なのだが、そこに気づいてくださった書評子は小池先生だけだったので、よほど書き方が悪かったのだと反省している。松村先生ほど私は筆が立たない。1994年6月からはケンブリッジに居を定め、ロンドンに通い M. Slater 氏に相談しつつ、British Library に籠る日々が多かった。9月に母が亡くなるのを英国で待つという苦しい時期でもあったが、私の人生において転機となる Homerton College での「autobiography」を巡る学会への参加が起こることになる。興味のある方は広島市立大学の『広島平和研究 第6号』の私の記事を Web でお読みください。榎井先生、湯浅信之先生、越智先生の名も現れる。

翌1995年のフェロウシップの総会で「Dickens と The Daily News—Railway Policy」の講演をした。当然話の中には Hudson と Paxton の名が出てくる。どこかで松村先生は「Dickens と Paxton という二人のセルフ・メイドマンがうまくいくはずがない」といった内容を書かれていた。Paxton の孫娘 V. Markam の *Paxton and the Bachelor Duke* (1935) を読み丁寧に関後の状況を考慮に入れると、対立したのは Dickens と鉄道王 Hudson だと分かってくる。松村先生の質問は「孫娘のことも彼女の本も知っているが、植木君はどこでその本を見つけた？」である。想定していた質問であった。孫娘の存在と本の題名は Pilgrim Edition の *Letters* の注に書かれており、そこまでは松村先生も把握しておられた。答えは British Library で本棚番号も控えてある。

本と言え、西條氏は同志社大学時代、図書委員になりディケンズ関連の貴重な書籍を図書館用に購入されたので、かなり利用させていただいた。例えば1960年台の後半、頼りになる書簡集は Nonesuch Dickens 中の Walter Dexter の *Letters* 3巻本だった。西條さんに紹介したら「あるよ」の返事。コピーして製本までして読んだものだが Pilgrim Edition の *Letters* が整うにつれて使わなくなり、どこにあるかさえ現在不明。小池先生も西條さんを介して同志社の図書を利用されたことは『島国の世紀』の「あとがき」からもわかる。まして松村先生においておや、と想像をたくましくしている。

何十年も前のこと、財務担当理事をされていた女性の方が「松村先生ったら『お茶をご一緒しませんか』って誘われるのよ」と私に言われたことがある。この方がなぜこのようなことを言われたのかと私のほうがどぎまぎした記憶がある

が、この方には高校が同級生の仲の良い夫がおられた。今年の年賀状にはかなり以前に昇天された彼との額入りの古いツーショット写真とクリスマス装飾と十字架の写真が印刷されていた。私とて中高時代の同級生と半世紀以上連れ添ってきた。このディケンジアンのエピソードが語るのは、松村先生は決して木石の人にあらずして、研究ばかりではないことをも語ってくれている。

松村昌家先生。先生の訾咳けいがいに接し、知遇を得て幸せでした。まもなく私もそちらに参るでしょう。先生への追悼文のはずがディケンズ・フェロウシップ諸賢への書き置きになりました。先生とフェロウ諸氏のご寛恕を乞う次第です。

あふれる知識と情熱

—— 松村昌家先生のディケンズ研究 ——

新野 緑 Midori NIINO

1979年に刊行された『会報』第2号に、松村昌家先生の「渡英日記抄」が掲載されている。渡英早々、研究拠点のディケンズ・ハウスに朝10時に出向かれて、図書資料や研究室の使用法の説明をデイヴィッド・パーカー館長から受け、5月にはディケンズの生誕地ポーツマスで開かれたフェロウシップの年次大会に出席、多くの研究者や愛好家と交流された。その折、マイケル・スレイター氏の案内でエレン・ターナンやマライア・ビードネルのお墓にも詣で、6月にはブローニュで開かれた学会に参加してシルヴェール・モノ氏などフランスの研究者やフィリップ・コリンズ氏と出会われ、ディケンズの180回目の命日にはウェストminster寺院の墓にフェロウシップを代表して花輪を捧げられた。その晴れがましい様々な経験が、折々の感動を交えて鮮明に語られている。

先生渡英のこの年、私は神戸女学院大学の4年生。当時4年次のみ開講されていた先生のゼミは当然開講となり、その前年、「英文学史」の授業で、女修道院長の密かな欲望や虚栄心をユーモラスに暴露する『カンタベリー物語』の秀逸さや、ファーディナンドと出会って一目で恋に落ちたミランダの「ああ、なんと素晴らしい新世界！」という台詞の持つインパクトを、生き生きと語られた先生の学識やお人柄に惹かれて、ゼミを志していた学生たちはがっかりだった。翌年4月、修士課程に進学した私は、授業の初日、英国の香り漂うチェックの上着を身にまとして颯爽と教室に入ってこられた先生の、自信に満ち溢れた意気揚々とした雰囲気は圧倒されたが、『会報』の記事を読み直して、その時の先生の高揚したお気持ちが理解できたように思う。

先生はフェロウシップ日本支部設立時からの会員で、年2回の大会には欠かさ

ず出席され、研究発表や講演、シンポジウムの講師、さらには司会や『会報』『年報』への寄稿など、数えきれないほどの貢献をされた。しかも、渡英時に知り合われた海外の著名な研究者を何度も大会に招聘して、支部会員との交流の機会を頻繁に提供してくださった。来日された海外の先生方が、日本支部や日本という国にこぞって良い印象を持って帰られたことが、海外、とりわけフェロウシップ本部における現在の日本支部への評価にも大いに影響していると思われる。その背後にはおそらく松村先生のような形でのご尽力やお心遣いがあったのだろうと、今になって思い至る。

フェロウシップの大会での講演者や発表者に対する先生の質問は常に的確で、そこに先生のあらゆる事象に関する知的好奇心と、他の研究者に対する尊重が溢れているように感じられた。ディケンズに関する最初の研究書『ディケンズとロンドン』をまとめられた1981年は、批評理論の最盛期で、新歴史主義と言われる新たな形の歴史・文化研究への興味も高まってきた時代だ。そうした理論的な研究動向にはほとんど関心を向けられなかったが、作品と伝記、さらには歴史的な事象や同時代の作品とのインターテクスチュアルな関係に焦点を当てられる先生の姿勢は、従来の実証主義とは一線を画す、新たな批評のあり方にも通じていたように思われる。水晶宮から『パンチ』、そして日英の交流まで様々な歴史的文化的な事象に関心を持たれ、そうした多様な知識の源となる数多くの貴重な蒐集資料を、先生は必要とする人には惜しげもなく提供された。先生とは全く異なる研究方法を試みていた私のような不肖の弟子にも、「僕と同じようなことをしていてもダメだから、君は君のやり方で」とおっしゃって、寛容に接して常に導いて下さった。お亡くなりになる少し前にお電話でお話しした時も、先生の頭に溢れる研究計画を熱く語っていらっしやっただが、その成果を拝見できなかったことがなにより残念でならない。

松村昌家先生と読書会の思い出

——「豊かな想像力と忍耐力」を心に刻んで——

永岡 規伊子 Kiiko NAGAOKA

1995年京大会館で行われたディケンズ・フェロウシップ春季大会で、松村先生を中心にした読書会を持ちたいね、と溝口薫さんとどちらともなく話をした記憶があります。その場におられた松村先生から即座に「いいですよ」と快諾いただいたのが、その後24年にも亘って続いた「ヴィクトリア朝文学研究会」、通称「松村先生の読書会」の始まりでした。会場は大阪学院大学から、甲南大学、大

手前大学と場所を変えながら、松村先生と一緒に読破した作品は、以下のヴィクトリア朝文学の大著の数々でした。

Charles Dickens, *Great Expectations*

George Meredith, *The Shaving of Shagpat*

Thomas Carlyle, *The French Revolution*

Charles Dickens, *Selected Journalism 1850–1870*

Benjamin Disraeli, *Sybil, or the Two Nations*

Anthony Trollope, *An Autobiography*

John Ruskin, *Praeterita*

一人では読めない難解なものを一緒に読みましょう、と先生自ら選んでくださった本をこうして並べてみると、ヴィクトリア朝の文芸だけでなく、社会、文化、歴史、芸術、政治に及ぶ松村先生の尽きない関心と興味の宝庫となる書物であったことに今更ながら気付かされます。それぞれの作家独特の難解な文体と格闘する私たちに、毎回明快な解釈を示し、そこに隠された意味と背景を生き生きと語られる先生のひと言ひと言を聴くのが、月一度の読書会に集まるメンバーの一番の楽しみでした。

読書会のメーリングリストで振り返ると、松村先生から初めての欠席の連絡をいただいたのが2016年7月14日付けで、「数日前から体調をくずしております。土曜日の読書会に出席できそうにありません。誠に申し訳ありませんが、ご了承ください。他の皆さまにその旨よろしくお伝えください」と書かれています。しばらく休会した後、2017年3月25日「今日はお天気もよく、読書会日和でした。松村先生の興味深いお話もたっぷり聴かせていただき、充実した時間を過ごすことができました」と、横山三鶴さんがその日のことを読書会のメーリングリストで報告されているように、体調が回復された松村先生と読書会を再開することができた喜びを皆で感じたものでした。それ以降、読書会は時間を短縮し、回数を減らして、2018年まで続けていきましたが、その年の9月1日には、松村先生が「服も着て、靴も持ったのだけれど今日は行けないと仰っている」との連絡が奥様からありました。11月24日に読書会の数名でご自宅に伺ったのが、先生とお目にかかる最後の機会になりましたが、その時に、「(ラスキンを)もう少しで読み終えるのに、(ご自身が参加できなくなって)本当にね、皆さんに申し訳ないと思っているんですよ」と繰り返し言われたことを思い出します。

読書会を通して松村先生に学ばせていただいたこと、そして先生のもとに集まった良き仲間を与えられたことが、私の人生でどんなに大きな恵みであるかを思います。そしてまた、私事ですが、娘たちが天に召されるという出来事があった時には、葬儀式にまで駆けつけ、「いつも言うように、豊かな想像力と忍耐力

を活かして試練を乗り越えてください」, 「(あなたを) 神が見捨てるはずはありません. 神のことをいう資格を持たぬわたしですが, このことだけは心の底から信じてやみません」と手紙に書いてくださった先生の言葉は, 崖から後ろ向きに落ちていく感覚の中にいた当時の私を支えてくれるものでした. その手紙は「内村鑑三の『後世への最大遺物』(岩波文庫) を読んでみることをお勧めします」と結ばれています.

2019年11月17日に読書会メンバーを中心に開いた「松村先生を偲ぶ会」の後, 奥様の通代様にその会で飾っていた遺影と皆で書いた追悼文集をお渡ししましたが, その公の場での先生の写真が普段の松村先生のお顔つきと全く違うと仰って, 手に持っておられた写真を見せてくださいました. そこには, 私がこれまでお見かけしたことのないご家庭での松村先生のお顔があって, 私にだけではなく, 困難にある教え子たちへの共感と励ましを送りつづけておられた先生の素顔を見た思いでした.

コロナの時代の私たちに松村先生ならどんな言葉をかけておられるだろうか, と想像しています. 「大変だね, しかしだね」と, 文学によって養われる「想像力と忍耐力」の大切さを今も語っておられる気がします.

松村先生との出会いと思い出

大前 義幸 Akiyuki OMAE

令和2年9月9日, 松村昌家先生が享年90歳で永眠された. まだまだ教を乞わなければならない私にとって, 時が止まるほどの衝撃だった.

のちに恩師となる松村昌家先生と私との出会いは, 2001年6月, 私が大学3年生の時であった. 9月からイギリス留学が決まっていた私が, 留学するまでの準備や勉強方法などを聞きに英語文化研究室へ駆け込んだ時, そこにいらっしやっただのが松村先生であった. 先生には紳士の雰囲気があり, 礼儀を知らない私からすれば, どこかお声を掛けにくい雰囲気であったが, 勇気を出して声を掛け, 留学中はどのようなことに気を付けながら勉強すればよいか質問をしてみた. すると先生は, 「留学は学問を留めるって書くのだから, 勉強などせずに遊べばいいよ」と返事をされた. 学生時代の私は, その答えに苛立ち, 留学をしてからは, たまの息抜き程度で遊ぶようにするだけで, あとは暇さえあれば勉強をする留学生生活を過ごした. そして私が日本に帰って来た時に松村先生へ, 語気を荒らげて「留学中は勉強ばかりしましたよ」と言うと, 「私も同僚に同じことを言われてムカついたから, イギリスでいっぱい勉強をしたんだよ. 君も留学したこ

とが無駄じゃなくなっただろ？」と言われて完全にまんまとしてやられた。

留学後からは先生の授業を受け、それからはイギリス文学に対する興味関心を持ち、文学だけではなく、歴史や絵画、当時の人々の暮らしや生活を知ること、文学に描かれる世界や人々をより詳細に知ることができ、また文学に描かれる人々を知ること、当時の時代を知ることができることも学ばせて頂き、完全に学問を学ぶ面白さの虜になっていた。ある日、先生のご著書が出版されたと言うことで、友達と先生のサインをもらいに大学院の研究科長室へ行ったとき、サインを書いて頂いたあと、先生の部屋の雰囲気には圧倒されていた私に向かって、「私は、この部屋で君が来ることを待っているよ」と声を掛けて頂いた。その言葉が嬉しくて大学院へ進学することを決め、勉強をし、無事に入学をすることはできたが、大学院の授業中での指導が周りの院生よりも厳しく、時には精神的につらい時もあったが、なんとか修了することができた。けれど、そのつらい経験から一度は研究者の道を諦めてしまった。しかし、研究者の道を諦めることができなかった私は、他大学の大学院へ進学した。そして、東京で開催された学会でお会いしたとき、初めて先生とお会いした時の優しい雰囲気でお話し掛けてくださり、その後の懇親会の席上で、「先生は大学院の授業中に、かなり僕に対して厳しく指導されましたよね。あの時は僕も精神的につらかったですよ」と話すと、「けど、あの時のことが、いま生きてるだろ？」とあっさりと言り返された時には何も言えず、「たしかに…、ありがとうございます」と深々とお礼を伝えていた。

その後は先生とお会いする機会がなかったが、学会でお会いする度、嬉しそうな笑顔で挨拶をしてくださり、先生は僕が研究職の道に向かって勉強していることを知って喜んでおられた。改めて、学生時代に先生から教えて頂いたことを思い返してみると、すべてが自分の人生のなかで生きており、いまも何かを教えて頂いているような感じがする。それは先生が授業中に話されていた、「研究者にとって一番大切なのは *Innocence* だよ。 *Experience* で考えると何もかもが固定観念で先走るからね」と言う教えを守っているからだと思う。先生より教えて頂いたご教示を胸に刻み、ご高恩に応えていくことを固く心に誓い、今後も研究者として精進いたします。

ディケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績

Publications by Members of the Japan Branch

(2020～2021)

著書・編書・共著

- 新井潤美, 『〈英国紳士〉の生態学 — ことばから暮らしまで』, 講談社学術文庫 2601 (講談社, 2020年)
- [猪熊恵子] Keiko Inokuma. 'David Copperfield: Evil Veiled in Haze in the Distance.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 205-22
- [榎本 洋] Hiroshi Enomoto. 'Christmas Books: The Arithmetic of Economy and the Antidote for Evil.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 151-68
- [金山亮太] Ryota Kanayama. 'The Old Curiosity Shop: The Beginning of the End of the Folkloric Time' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 79-96
- 川崎明子, 「マーガレット・ドラブル『礮臼』—〈女性作家〉による〈フェミニスト小説〉の解剖」, 高橋和久/丹治愛編著, 『二〇世紀「英国」小説の展開』(松柏社, 2020年), 298-321頁
- [木原泰紀] Yasuki Kihara. 'Innocent Evil in Barnaby Rudge: A Nightmare Abounding with Monsters.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 97-114
- [木村晶子] Tomoya Watanabe. 'Our Mutual Friend: Evil and the Fantastic.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 331-48
- [桐山恵子] Keiko Kiriyama. 'The Dandy-Devil: An Analysis of James Harthouse in *Hard Times*.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 241-58
- [木島菜々子] Nanako Konoshima. 'American Notes: Social Evil and Carceral Landscape.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 115-32
- 瀧川宏樹 (共編著), 『帰還する英米文学 — 時代を生き抜く〈学び〉とは』(大阪教育図書, 2020年)
- [玉井史絵] Fumie Tamai. "“Bemoaning the Present Evil Period”: The Uneasy Relationship between Sympathy and Social Reform in *The Uncommercial Traveller*” *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 295-312
- [田村真奈美] Tomoya Watanabe. 'Pictures from Italy: Darkness in the Sunny Land.' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 169-86
- [筒井瑞貴] Mizuki Tsutsui. 'Nicholas Nickleby: Dickens's Anti-Melodramatic Strategy' *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 61-78
- 寺内 孝, 『キリスト教の発生 — イエスを越え, モーセを越え, 神をも越えて』, 二訂版 (奥山舎, 2021年)

- [中越亜理紗] Arisa Nakagoe. “‘Foreigners are Always Immoral’”: Rigaud and Cavalletto in *Little Dorrit*.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 259-76
- [西垣佐理] Sari Nishigaki. ‘Great Expectations: The Chain of Evil and Consolation.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 313-30
- [長谷川雅世] Masayo Hasegawa. ‘Cannibalistic Martyrdom in A Tale of Two Cities: The Ambiguous Duality of Sydney Carton’s Death.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 277-94
- [畑田美緒] Mio Hatada. ‘Oliver Twist: The Complicity between Good and Evil.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 43-60
- [松岡光治] Mitsuharu Matsuoka. “‘I Can’t Help Writing It’”: Maladies of the Penny Post in *Bleak House*.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 223-40
- [松本靖彦] Yasuhiko Matsumoto. ‘Perverted Virtue?: Jasper’s Evilness in *The Mystery of Edwin Drood* Readdressed.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 349-66
- [村上幸太郎] Kotaro Murakami. ‘Sketches by Boz: Boz’s Curiosity and Compassion for the Miseries.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 7-24
- [矢次 綾] Aya Yatsugi. ‘Mythological Imagination in *Dombey and Son*: Florence Dombey’s Initiation and Revealed Evil Nature.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 187-204
- [渡部智也] Tomoya Watanabe. “‘Ravin’ Mad with Conscious Willany’”: Would-be Patricide in Martin Chuzzlewit.’ *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays*. Athena Press, 2020. 133-50

論文

- 新井潤美, 「Janeitesの功罪 — Jane Austen 受容についての考察」, 『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター), 第33号(2020年), 65-70頁
- 川崎明子, 「『不思議の国のアリス』における言語と生物の変身」, 『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所), 第96号(2020年), 271-97頁
- 川崎明子, 「『嵐が丘』における法とイングリッシュネス — ヒースクリフのイングリッシュ・ジェントルマンとしての自己成型」, 『ブロンテ・スタディーズ』(日本ブロンテ協会), 第6巻第6号(2020年12月), 85-97頁
- 川崎明子, 「『サイラス・マーナー』における植物 — 漸進的発展の跳躍的語り」, 『英国小説研究』, 第28冊(英宝社, 2021年), 48-76頁
- [田中孝信] Takano Tanaka. ‘Arthur Morrison’s Authorial Distance in *A Child of the Jago*.’ *Studies in the Humanities*. 72 (2021): 43-57
- 筒井瑞貴, 「『蘇り』としての歴史小説 — 『二都物語』における過去の表象」, 『年報』(ディケンズ・フェロウシップ日本支部), 第43号, 5-19頁
- 中和彩子, 「『続・新アラビア夜話 — ダイナマイター』の空間表象」, 『言語と文化』, 第18号(2021年1月), 55-68頁

- 橋野朋子, 「Household Words と All the Year Round におけるディケンズと心霊主義」, 『年報』(ディケンズ・フェロウシップ日本支部), 第43号, 20-35頁
- 原田 昂, 「A Tale of Two Cities において物語化される体験と群衆形成 — 19世紀の報道特派員の手法をめぐって」, 『英米文化』, 第51号(2021年), 1-16頁
- 溝口 薫, 「手話をめぐる物語『ドクター・マリゴールドの処方箋』における感情と倫理」, 『神戸女学院大学論集』, 第68巻第1号(2021年6月), 29-46頁
- 矢次 綾, 「サッカーの娘としての恩恵と呪縛 — 父の伝記作家になったアン・サッカー・リッチー」, 『言語文化研究』, 第40巻第2号(2021年3月), 23-40頁
- [吉田朱美] Akemi Yoshida. 'Nathaniel Hawthorne, Mona Caird, and Thomas Hardy's *The Pursuit of the Well-Beloved* (1892).' 『渾沌／Chaos』(近畿大学大学院文芸学研究所紀要), 第17号(2020年), 149-74頁
- 吉田朱美, 「“George”をめぐる音楽」, 『ヴィクトリア朝文化研究』, 第18号(2020年), 5-19
- 吉田一穂, 「A Tale of Two Cities — パリとその表象」, 『人間文化研究』, 第14号(2021年), 167-96頁
- 渡部智也, 「“That poor dream, as I once used to call it, has all gone by” — 『大いなる遺産』における「夢」について」, 『福岡大学人文論叢』, 第52巻第4号(2021年3月), 1181-1202頁

翻訳

山本史郎(訳), 新渡戸稲造, 『対訳 武士道』(朝日新書, 2021年)

会員業績報告についてお願い

次号に掲載する会員の業績報告は随時受け付けております。2021年8月から2022年7月までに、著書、編著、共著、論文、翻訳、その他を刊行された会員の方は、上に掲載の書式に従って、必要情報を日本支部HPの業績フォームを通じて、あるいは『年報』編集長宛てメールにてお知らせ下さい。第45号掲載の業績報告の締め切りは、2022年7月末日です。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

書評対象図書および書評執筆者、国際学会報告者、その他の執筆の募集

『年報』の書評では、ディケンズおよびディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。国内・国外を問わず、取り上げるべきとお考えの図書がありましたら是非ご推薦下さい。書評執筆者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれも歓迎です。随時受け付けておりますが、次号への掲載を希望される場合、2022年2月末日までに御連絡をお願いします。また国際学会に出席される予定の方には、国際学会報告をお願いしたいと存じますので、学会開催の3週間前までに、御連絡下さい。そして、ディケンズに直接間接に関連する興味深いエッセイのご投稿も、随時お待ちいたしております。いずれも『年報』編集長までお申し出下さい。よろしくお願いいたします。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
お問い合わせ先

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641
東京理科大学 松本靖彦研究室
URL: <http://www.dickens.jp/>
email: <matsuko@rs.tus.ac.jp>

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員の情報につきましては、上記のいずれかにお問い合わせ下さい。新規入会希望の方も随時受け付けております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
役員一覧

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従って2020年総会において選出された以下の役員に加え、名誉職・補佐職をもって、運営にあたっています。

役員の任期は2020年10月より2023年10月までです。

名誉支部長	小池 滋	東京都立大学名誉教授
支部長	松本 靖彦	東京理科大学教授
副支部長	玉井 史絵	同志社大学教授
理事（財務担当）	田村 真奈美	日本大学教授
理事	金山 亮太	立命館大学教授
理事	中村 隆	山形大学教授
理事（学会誌編集担当）	宮丸 裕二	中央大学教授
理事	矢次 綾	松山大学教授
理事（IT 担当）	松岡 光治	名古屋大学大学院教授
監事	梅宮 創造	早稲田大学名誉教授
『年報』編集委員	宮丸 裕二（委員長）・金山 亮太・玉井 史絵・中村 隆・矢次 綾	
VOD 担当補佐	渡部 智也	福岡大学准教授
	西垣 佐理	近畿大学准教授
	橋野 朋子	関西外国語大学講師
書誌作成担当補佐	大前 義幸	岩手県立大学講師
文献作成担当補佐	長谷川 雅世	高知大学准教授
大会案内作成担当補佐	木島 菜菜子	京都ノートルダム女子大学講師

『年報』第44号 編集詳記

投稿論文の審査結果

応募論文数	1
採用数	0

編集

宮丸 裕二	
投稿論文審査担当	
宮丸 裕二（編集委員長）	
金山 亮太	玉井 史絵
中村 隆	矢次 綾

編集後記

このたび、第44号からの編集の役割を仰せつかりました。かつて本誌第28号（2005年度）から第34号（2011年度）まで7号分の編集を、当時の編集長の原英一先生の下で補佐としてお手伝いをさせていただきました際の経験を存分に活かすことができればと思っております。「またお前か」の声も聞こえてくるような気もしなくもないのと同時に、これがなかなか骨が折れないわけでもない作業であるだけに、この編集体制がいつまでなのか、そこは支部長のみぞ知るといったところになって参ります。

久々の編集作業で見てきたこととしましては、10年そこらでも図像入手が相当に簡便になったことで、手元に所有の写真もウェブサイト各所に散らばる図像も随分と入手・利用がしやすくなっていたことです。入力元としてのスマホの利便の向上とインターネット上の資料の整理拡充がいつのまにか格段に進んでいたがゆえのことのようです。あわせて、投稿者・寄稿者の方が全員ワープロをお使いで、電子メールやネット閲覧を利用されていることで、大変な効率化と郵送料削減がいつの間にか起こっていました。そしてなにより、今や編集が外部委託になっていてDTPの頃よりも飛躍的にこちらの作業は減少しましたので、こうしたことから生ずる余力を今後も編集内容に振り向けて行ければと考えております。もう一つ重大な点を加えるならば、老眼が本格化して、画面が原寸表示では「。」と「。」の区別をするのがまず無理になったあたりです。

今年も残念ながらCOVID-19ゆえに学会の集まりの機会も本誌で報告するべきことも少なくならざるを得ないところはありませんでしたが、遠隔通信も含め復興しつつあるようですので、次年度には期待したいところです。

そして、本号で、松村昌家先生の追悼記事を通じて、フェロウシップの歴史が各アングルから語られたことは、結果的にはありますが、一つの成果と見ております。50年を超える時間を積み重ねてきた割には語られることがまだ少ないフェロウシップのこれまでについて、もっと語られていい、もっと尋ねられていいはずと思い起こさせてくれたのは、松村先生がお残しくださったこれもまた一つの殊恩と言えましょうか。

（宮丸裕二）

ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報 第44号

発行 2021年12月20日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

代表 松本 靖彦

〒278-8510 千葉県野田市山崎2641

東京理科大学 松本靖彦研究室内

印刷 明文舎印刷株式会社

***The Japan Branch Bulletin
of the Dickens Fellowship***

No. 44

ISSN: 1346-0676

Edited by Yuji Miyamaru

Editorial Board

Ryota Kanayama

Yuji Miyamaru

Takashi Nakamura

Fumie Tamai

Aya Yatsugi

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship

Tokyo University of Science and Technology

2641 Yamazaki, Noda-shi, Chiba 278-8510, Japan

[http : // www.dickens.jp/](http://www.dickens.jp/)

©2021 The Japan Branch of the Dickens Fellowship